瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財 予備調査報告(I)

香川県教育委員会

もう,ふたむかしも前の話ですが,昭和33年12月6日,香川県議会の連合審査で本四架橋問題が取り上げられています。翌日の朝刊には、『夢のかけ橋』として、記事が載せられました。

それから20年一香川県教育委員会では、昨年4月から、瀬戸大橋架橋 予定地の海狭部埋蔵文化財調査を始めました。本年度は、来年度から実 施する予定の本格的な調査に向けての予備的な調査を櫃石島と与島で行 いました。この報告書は、その調査結果をまとめたものです。

瀬戸大橋という、20世紀の"文化財"建設を機に、瀬戸の島々の生いたちを明らかにし、私達の祖先の生活をうかがいたい。今後、調査を通して、祖先の文化遺産に触れ、これら文化財を後世に伝えていきたいと考えています。

最後に,調査にあたり御協力,御指導いただきました地元はじめ関係 の方々に厚くお礼申し上げます。

昭和 52 年 3 月

香川県教育委員会文化行政課長

沖 吉 和 祐

- 1. 本書は、瀬戸大橋架橋工事に伴う、海峡部の埋蔵文化財予備調査報告である。
- 2. 発掘調査は本四連絡橋公団から委託をうけて、香川県教育委員会が実施した。
- 3. 各調査区の分担は次のとおりである。

総	括	文化	比行政語	果長		沖	古	和	祐		
		同	課長袖	甫佐		藤	本	義	春		
		同	係	長		松	本	豊	胤		
櫃石島	;第Ⅰ調査	区		朝	門員			秋	Ш		忠
				技	師			広	瀬	常	雄
	II /	,		技	師			松	本	敏	
				嘱	託			大配	少古	直	生
	Ⅲ −	Ł		技	師			松	本	敏	Ξ
				嘱	託			大配	少古	直	生
	Ⅲ - 🖺	有		技	師			渡	部	明	夫
				技	師			大	Щ	真	充
与島 I	• 11			技	師			渡	部	明	夫
				技	師			大	山	真	充

4. 報告書は各調査員が協議検討した成果を次のものが分担執筆した。

調査の経緯 松本豊胤 島嶼部の埋蔵文化財 忠 櫃石島第I調査区 秋 山 II松本敏三 Ⅲ一北 松本敏三 Ⅲ-南 大 山 真 充 渡部明夫 与島Ⅰ・Ⅱ 渡 部 明 夫 大山真充

5. 資料整理,製図等は横田佳代子の協力を得た。

目 次

調査の経緯	1
島嶼部の埋蔵文化財	2
櫃石島の遺跡	4
第Ⅰ調査区	7
第 Ⅱ 調査区	33
第Ⅲ一北調査区	83
第Ⅲ-南調査区	127
与島の遺跡	153
第Ⅰ• Ⅱ調香区	153

調査の経緯

本州四国連絡橋児島・坂出ルートにあたる海峡部の櫃石島・岩黒島・羽佐島・与島の四島にはすでに旧石器時代から人類の足跡があり、それ以来古代から中世へと各時代を通じて、それぞれ多数の遺跡が所在する。

香川県教育委員会では、本格的な架橋工事に先立って、これら貴重な埋蔵文化財の取り扱いについて瀬戸大橋公団をはじめとする関係機関としばしば協議を重ねてきた。まず昭和46年1月、架橋用地等関係地区における埋蔵文化財の分布図を公団に提示した。次いで48年2月には瀬戸大橋ルート関連公共事業調査がおこなわれ、埋蔵文化財についても幅200m、海上部9.5km、陸上部1.5kmの範囲に所在する遺跡の分布図を作成し提示した。

しかしての資料は一部に発掘調査の成果が入っているにしても、大部分は踏査によるものであって、この段階では遺跡全体の広がりとか、遺物を包含する当時の生活面が、地下でどのような層序によって構成されているかというようなことは適確に把握することは困難であった。従って遺跡の保存計画の策定及び本格調査計画案の策定に先立って試掘を主体とした予備調査を実施する必要が痛感されていた。

本四連絡橋公団においてもこの点をよく理解され、昭和51年 本四連絡橋公団と教育委員会で瀬戸大橋架橋工事に伴う埋蔵文化財調査についての協議が成立し、次いで6月1日付で海峡部埋蔵文化財予備調査委託契約そのIが締結された。

予備調査は昭和51年と52年度の二カ年に亘って実施する予定であるが、51年度は次表のとおりである。

調査	至区	調査地名	遺 跡 の 概 況	調査面積(㎡)
		鳶の巣遺跡(一部)		
		がんど凹地(奥部)		
櫃	I	がんど凹地後背尾根	尾根上斜面。旧石器やサヌカイト片が採集できる。	30,900
石		石の塔・五輪塔	尾根裾・丘陵上平坦地。石造物の基礎石1基, 箱式石棺2基,五輪搭1基と組み石数個がある。	
	II	花見山遺跡	尾根上斜面。旧石器やサヌカイト片が採集でき る。	10,900
島		大 浦 遺 跡	丘陵上斜面。旧石器や弥生式土器片が採集でき, 住居跡も予想できる。	
	Ш	大 浦 浜 遺 跡	尾根裾から浜堤。弥生式土器・師楽式土器・須 恵器片などが多量に採用できる。	56,400
与島	I II	し の だ 遺 跡	丘陵部に旧石器の散布がみられる他, 平地には 土器包含層がある。	33,700

島嶼部の埋蔵文化財

塩飽諸島に所在する埋蔵文化財については、古くから注目されていた。与島小学校には 昭和8年以来採集されてきた石器類が保存されているし、櫃石島でも東山包雄氏によって 根気強く資料が収集され保存されてきた。

それらは学会にはなばなしく発表されたり、多くの注目をあびることはなかったが、その業績は高く評価されなければならない。

昭和7年の岡山県史蹟名勝天然記念物調査報告の中に、鷲羽山で多数のサヌカイト製の石器を採集したという記録があり、「鷲羽山には原史人の遺跡随所にあり、全山に亘り、サヌカイトの破片夥しく、石鏃・石斧・石鎗等を多数検出した…」と記されている。昭和の初期、岡山県側と香川県側で期せずして、埋蔵文化財に対する関心が高まりつつあった。しかし残念ながらその後の継続的な調査研究の成果はなかった。そして学術的調査が本格的に実施されるようになったのは、昭和20年代の後半に入ってからであった。

昭和29年12月,鎌木義昌氏等によって先の鷲羽山の久須見鼻で発掘調査がおこなわれた。 この調査によって土器を伴わない石器だけの文化の存在が明らかにされると共に,それ 以来瀬戸内海の沿岸地帯及び島しょ部における石器文化に対する関心が急激に高まってい った。

香川県では昭和33年国分寺町の国分台の一角で多数の打製石器が発見され、次いで34年3月岡山大学の近藤義郎氏によって発掘調査がおこなわれた。同年川畑進氏が与島・小与島・櫃石島などで採集した多数の石器を報告し、翌35年8月香川県教育委員会は、与島の西方及び東方の尾根上で最初の発掘調査をおこなった。

それよりさき昭和29年8月,香川郡直島町井島での調査,昭和30年坂出市城山出土の多数の石器の資料報告及びその分析等によって,瀬戸内沿岸地方における旧石器の編年が試みられた。こうして土器を伴わない土器文化以前の,瀬戸内海地方に最初の足跡をしるした人類の文化が次第に明らかにされていった。

昭和35年,与島で旧石器の発掘調査をおこなった翌36年8月,再び香川県教育委員会は 与島で発掘調査をおこなった。この調査は製塩遺跡の調査で師楽式土器等多数が出土した。 遺跡は,与島の東方61番地で,旧与島診療所の敷地にあたる。その頃坂出市の川畑進氏は 附近で縄文式土器片を採集しており,与島には旧石器時代だけでなく,縄文時代・弥生末 期から古墳時代にかけての遺跡の存在が明らかになった。同様に櫃石島においても,大浦 浜における師楽式土器包含層が確認されたほか,長崎鼻における後期古墳,歩渡島におけ る組合せ箱式石棺の確認調査がおこなわれるなど,豊富な遺跡の所在が明らかになった。

昭和37年に香川県教育委員会がおこなった分布調査では、与島で山の神遺跡など7遺跡、

櫃石島で大浦浜遺跡など4遺跡が明らかになっていた。その後瀬戸大橋架橋工事が発表されたことによって、県教育委員会では、昭和47年度に国庫補助金を受け、県下一円における埋蔵文化財の分布調査をおこなった。その成果では、岩黒島・羽佐島において新たに旧石器の散布がみられたこと、櫃石島ではトビノス遺跡、がんど遺跡などが明らかになったこと、与島ではしのだ地区において旧石器の散布が明らかになったなど新発見資料の追加補正がなされた。



櫃石島の遺跡

1. 宮崎古墳 高さ約3 m径7 mの円墳,頂上に小祠がある。

2. トビノス遺跡 先土器時代の石器の散布地

3. がんど遺跡 今回の試掘調査でサヌカイト製の剝片やチャート製の剝片が出土した。

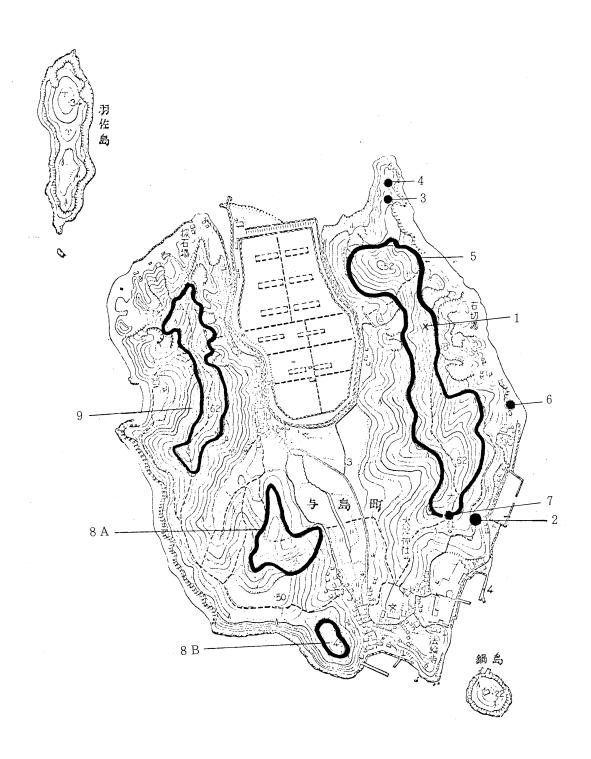
4. 石の塔 俗に「石の塔」と呼ばれている土地で、格狭間を刻んだ石がある。

5. 五輪塔 「しゃかのもと」の地名が残り、五輪塔1基と組み石数個が残っている。

6. 馬石・ぜにがみ石遺跡 島の最高所の標高78m—帯でサヌカイト製の石器の散布がみられる。

すくも塚
 低い土盛りがあり古墳と思われる。

- 8. ほうろく岩遺跡(花見山遺跡) 王子権現社東西の尾根丘陵上でサヌカイト製の石器の散布がみられる。
- 9. 大浦及び大浦浜遺跡 丘陵地帯にはサヌカイトの散布があり、海浜部は製塩土器及び縄文土器・土 師器の包含層がある。
- たてわ古墳1・2・3号
 古墳時代後期の横穴式石室がある。
- 11. 櫃岩遺跡 櫃岩と呼ばれる巨石がある。石器の散布もみられる。
- 12. 歩渡島遺跡 組合せ箱式石棺群がある。



(遺跡概要)

1. ミドロ遺跡

東方ミドロ採石場の上の丘陵からサヌカイト製ポイント・ナイフブレイド等 が多数出土した。

2. タテバ遺跡

造船所近くの山裾から奈良時代以後の窯跡と推定できる土器群が出土したといわれているが未確認である。

3. 長崎鼻石組遺構

直径約30cmの石を二段ぐらいに積み方形に囲んでいる。性格は不明である。

4. 長崎鼻古墳

3の石組から北へ20m程のところに花崗岩切石の組合せ式石棺が2基あった。 現在1基のみが露出し、あと1基は崩壊したものと思われる。

5. 東方遺跡

東方山の神から長崎鼻にかけての一帯にサヌカイト製石器が散布している。

6. 大州浜遺跡

大州の診療所附近にあり、昭和36年にその一部が発掘調査され、師楽式土器 片多数と貝(巻貝・ほたて貝),魚骨(タイ・クロダイ),獣骨(鹿らしい) 等が検出された。

7. 山の神

小学校運動場から北に山を登ると頂上近くに聖人像を祀った小さな石祠がある。祠の背後は丸くテラス状の頂部になっており、そこからサヌカイト製ナイフ・ポイント等が掘り出された。

8. シノダ遺跡 A · B

穴部の南部にある小丘一帯にサヌカイト製石器が散布している。

9. 西方遺跡

石槌神社を中心に、サヌカイト製ナイフが多数出土した。

櫃石島第Ⅰ調査区

	目 次	
1.	立. 地 9	
2.	調査の経過 9	
3.	調査区の設定…10	
4.	調査の概要10	插 図 目 次
5.	主たる調査区…12	第1図 「がんど」凹地出土石斧
6.	遺跡の範囲18	第2図 調査報告会
		第3図 第1調査地区調査区の設定
		第4図 2D-3平・断面実測図
		第5図 3F平·断面実測図
		第6図 50出土石鏃実測図
		第7図 「石の塔」の平坦地
		第8図 5 C平・断面実測図
		第9図 「石の塔」及び周辺部の測量図
		第10図 第1調査地区遺跡の範囲
		図版目次
		図版 1 (1) 第 1 調査小区 A トレンチ (南より)25
		(2) 第2調査小区(東より)
		図版 2 (1) 2 D-3 遺物出土状態 ······26
		(2) 第3調査小区Cトレンチ(北より)
		図版 3 (1) 3 F 遺物出土状態 27
		(2) 第4調査小区(西より)
		図版 4 (1) 第 5 調査小区(南より) 28
		(2) 5 C遺構検出状態
		図版 5 (1) 5 C遺構及び石鏃検出状態29
		(2) 第6調査小区(南より)
		図版 6 (1) 第7調査小区(南より)30
		(2) 第8調査小区五輪塔群
		図版 7 (1) 「石の塔」北側斜面にかかる組み石…31
		(2) 第1調査地区出土サヌカイト細片
		(3) 第1調査地区出土チャート細片
		(4) 5 C出土石鏃
		(5) 「がんど」凹地出土石斧

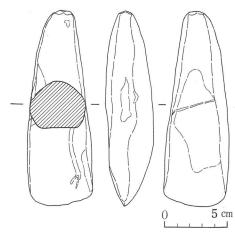
1 立 地

第1調査地区は、島の東北部にあたる細長い「がんど」凹地の奥半分と、それを囲む南 北側の標高20~30mの低い尾根筋及び丘陵上の地域である。

この地域には、周知の遺跡として、凹地北側の短く南北に延びた尾根上の「鳶の巣」遺跡があり、これまで畑地耕作の時などにサヌカイト製ナイフ形石器や剝片など先土器時代の遺物が多数採集されている。また、凹地の奥部北側の、俗に「石の塔」と呼ばれている平坦地に、格狭間を刻んだ方形の基礎石が残存し、これより約50m西南方の山裾には、原形にちかい五輪塔1基と崩壊した組み石が数個見られる。

凹地の取っ付きのところは、浜堤状に高まった地形で、付近の畑地より、細片ではある

が、古代の製塩に使用した師楽式土器や須恵器の破片が採集される。なお、昭和19年頃に凹地の南側尾根裾を東西に通る用水路の改修工事が行われた際、そのほぼ中央にあたるところで、長さ15.5 cm、上部が次第に細くなる蛤刃の磨製石斧(第1図版7(5))が出土しているので、周辺の尾根筋や丘陵上を含めた地域に弥生時代の遺跡の存在が推測されている。一方、島内には、その昔御座船が凹地を出入りしていたという伝承もあり、一帯の往時の地形復元を明らかにすることも興味深いことである。



第1図 「がんど | 凹地出土石斧

2 調査の経過

6月下旬,調査地区内の事前踏査に基づいて試掘地点の選定を行い,6月28日には地権者への調査説明会をもち,調査に関するご理解・ご協力をあおいだ。

そして、7月2日より試掘区の設定に着手し、以後ほぼ予定通り第1調査小区から第8



第2図 調查報告会

調査小区まで順次試掘及び地形測量調査 を進め、9月4日をもって終了した。

その後、取り急ぎ調査資料の整理にあたり、9月20日~21日にかけ、櫃石公民館において調査報告会(調査の概要報告と従来島内で出土・採集されたものを含めた遺物の展示)を開いたところ、多数の方々の出席・見学を得たことは、まことに幸いであった。

3 調査区の設定

第1調査地区約 $30,900 \, m^2$ を事前の踏査や各所の現状に合わせて第 $1 \sim 8$ 調査小区に区分し,大体 $300 \, m^2$ に $3 \, m^2$ の割合で試掘区を設定した。一部,調査の進展に伴い試掘不要とした個所もあり,試掘面積は都合約 $240 \, m^2$ である。ただし,第8調査小区については,その遺跡の現状から考慮して地表観察及び地形測量調査にとどめた。

各小区の試掘区の設定は、次のとおりである。(第3図)

調査小区	立	地	試掘区数	調査	面積
1	「鳶の巣」遺跡の北端部にあた から16mに至る下降する尾根筋		11	約	75 m²
2	「 鳶の巣 」から南西に下った丘	陵台地北東部・梅畑	7	約	20 m²
3	標高21m前後の丘陵台地中央部	・畑地	8	約	69 m²
4	丘陵台地西南の斜面地形が一段 地となったところ・畑地	掘り下げられて平坦	8	約	23 m²
5	「がんど」凹地ほぼ中央部・元	水田地	3	約	9 m^2
6	通称「望の城」の短く北東に延 林	びた尾根丘陵上・山	6	約	24 m²
7	島の最高所「四望眺」から北東 30~21mの尾根筋・柿畑	に下降してきた標高	6	約	18 m²
8	ちょうど尾根の鞍部にあたる 「 び周辺部。山林	石の塔亅の平坦地及		約 1,3	300 m²

4 調査の概要

調査 小区	グリ ッド	面積(㎡)	所	見								
	A	21.75	各区とも、半ばの幅で風化花崗岩層	遺物なし								
	В	7.8	(表土下20~70 <i>cm</i>)まで掘り下げ, 3~4 + 層序を観察した。 遺物なし									
	C 2.03 A	A~Dは現状で山林であるが、20年 ほど前までは畑地として耕作されて	第2層暗褐色土中(表土下約15cm) よりサヌカイト剝片1出土									
	D	() よしみ (図 年 1 (1)) よよ ローバ	第2層暗褐色土中(表土下約10cm) よりサヌカイト剝片1出土									
	E	3	~Kにかけては緩斜面をなし、表土	12000								
	F	3	層下の白茶褐色土層が50~60 <i>cm</i> 厚を 測る。	遺物なし								
	G	3	100.00	遺物なし								
	Н	3		遺物なし								
	I 3	遺物なし										
	J	3		遺物なし								
	K	3		遺物なし								

調査小区	グリッド	面積(㎡)	所	見				
	A-1	2.25	表土下20~40cmのいわゆる地山(黄	サヌカイト・チャート細片各 1出土				
2	A-2	3	褐色土)層まで掘り下げ,第2層暗 褐色土中より遺物を検出した(図版	チャート細片 4 出土				
	B-1	3	物巴工中より退物を快山 した (凶)(() 1(2))。	素焼土器・陶磁器片などのみ出土				
	B - 2	3	しかし,サヌカイト・チャート細片 と素焼土器(性格不明)・瓦質土器・	サヌカイト細片 6・チャート細片 2出土				
2	D-1	3	陶磁器片などが混在した状態である。	サヌカイト細片 5・チャート細片 4 出土				
	D-2	3		サヌカイト・チャート細片各3出土				
	D-3	3		サヌカイト細片14・チャート細片 2 出土(第 4 図・図版 2(1))				
	A	12.15	丘陵台地上を広範囲に確認するため, A~Dは直交するトレンチとした(図	サヌカイト細片3・チャート細片4 出土				
	В	14.70	版 2(2))。各区とも地山(黄褐色土) 層まで15~25cmほどで,第2層暗褐	サヌカイト細片3・チャート細片3及び素焼土器・陶磁片が多数出土				
	С	17.10	色土中より遺物を検出した。ここでもサヌカイト・チャート細片と150	サヌカイト・チャート細片各2出土				
3	D	12.75	点をこえる素焼土器・陶磁器・染付	サヌカイト細片2出土				
	Е	3	片などが混在した状態である。なお、	チャート細片1出土				
	F	3	Bトレンチの直交点ちかくで径 1.5 m, 深さ 0.8 mほどの円形すり鉢状 土坑が認められたが坑内出土物・堆	サヌカイト細片11・チャート細片3 出土(第5図・図版3(1))				
	G	3		遺物なし				
	Н	3	判断した。	サヌカイト細片3出土				
	Α	2.25	丘陵台地の斜面地形を掘削し、西南	遺物なし 素焼土器・陶磁片のみ出土				
	В	3	側に寄せ土して平坦な畑地としている。地山(黄褐色土)層まで20~30					
	С	3	」coの地面(異物色工)層は C20 300 」cmで,表土下の暗褐色土・暗黄褐色	チャート細片 1 出土				
	D	3	土(耕作土層)中より遺物を検出し	チャート細片2出土				
4	Е	3	た(図版 3(2))が,所によって土層 序の撹乱もひどく,サヌカイト・チ	チャート細片1出土				
	F	3	ャート細片・素焼土器片などが同一 ・土層内に混在していた。	サヌカイト細片 2 ・チャート細片 1 出土				
	G	3		チャート細片1及び素焼土器片が多数出土				
	Н	3		サヌカイト細片 1 出土				
	A	3	凹地奥部は湿地状態であるため,ほぼ中央部に場所を選んで試掘(図版4(1))。標高10m前後。南側道路と	サヌカイト細片 2 ・チャート細片 1 のほか,第 7 までに特に素焼土器 ・ 陶器片など多数出土				
5	В	3	は $1m$ ほどの高差がある。 $A \cdot B$ では $95 \sim 105 m$ の掘り下げで湧水がひどく, $7 \sim 8$ 層の土層序を観察した	サヌカイト細片2のほか,第6層までに特に素焼土器・陶器片など多数 出土				
	С	3	にとどまる。	第7層下の位置より船板で仕切った 用水路遺構検出,内部堆積土中より 弥生石鏃1出土(第6・7図,図版 4(2)・図版5(1))				

調査 小区	グリッド	面積(n²)	所	見				
	A	9	山林の地形はさして変容が見受けら	遺物なし				
	В	3	れない。以前に近辺でサヌカイト製 石鏃が表採されたという。しかし、	遺物なし				
6	С	3	堅質の黄褐色地山層まで15~20cmと 浅く,遺物の出土は第2層暗褐色土	サヌカイト細片 5 のほか素焼土器片 十数点出土				
	D	3	中よりのわずかである(図版 5(2))。	遺物なし				
	Е	3		遺物なし				
	F	3		遺物なし				
	Α	3	尾根筋を掘削し、南北側斜面にかな	遺物なし				
	В	3	り寄せ土をして平坦にちかい畑地としたところ。北側斜面にかかるE・	陶磁器片3のみ出土				
7	С	3	Fで黄褐色地山層まで50~90 <i>cm</i> ・6	遺物なし				
	D	3	層ほどの層序が見られるが、他は15	陶器片3のみ出土				
	E	3	cm前後と浅い(図版 6(1))。	遺物なし				
	F	3	·	チャート細片1出土				
8		約 1,300	「石の塔」の平坦地(標高17~18 m) 及び周辺部を調査区域とした。	各所の写真撮影と <u>1</u> 100 地形測量図を 作成(第9図)				

5 主たる調査区

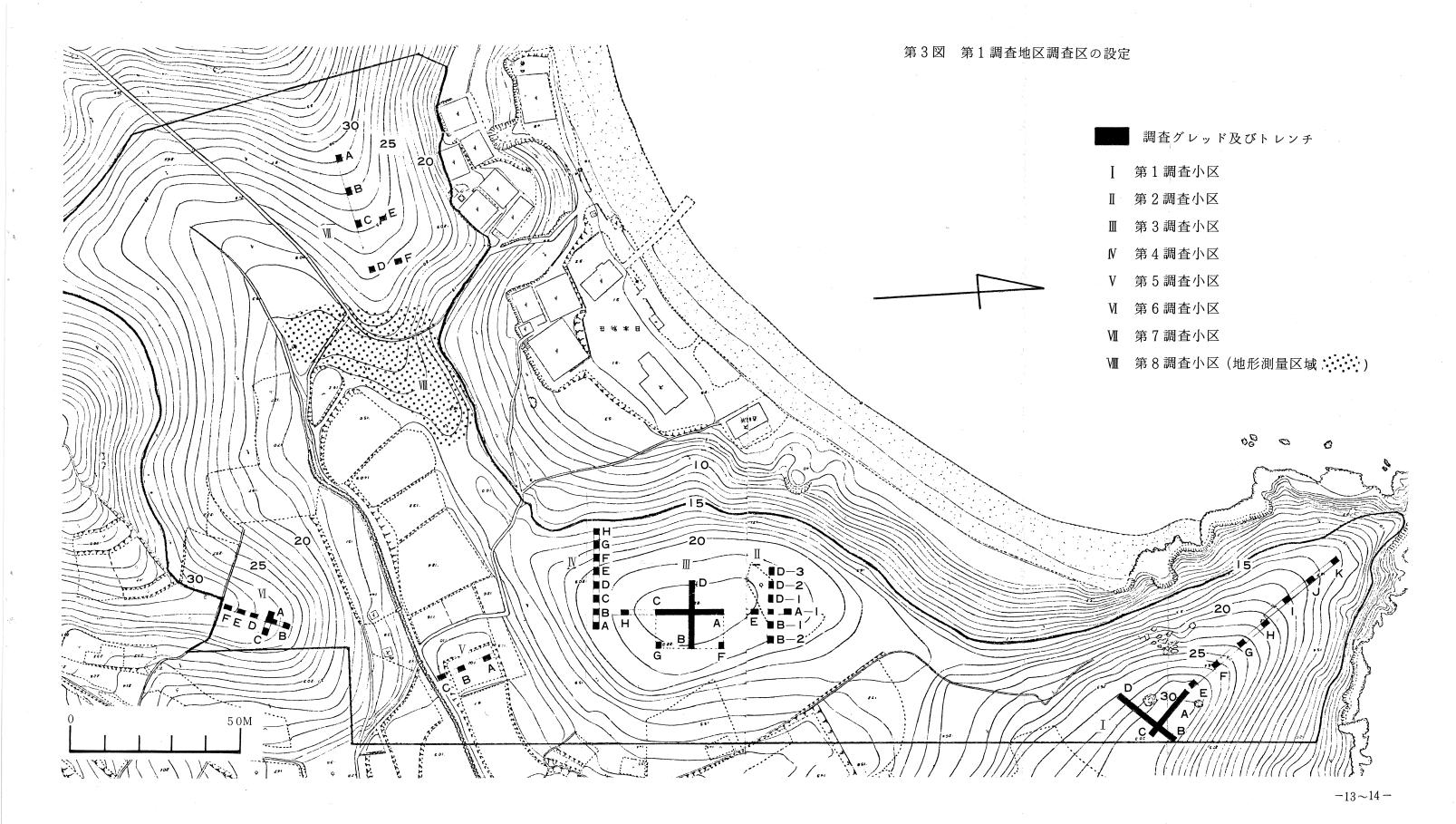
(1) 2 D - 3

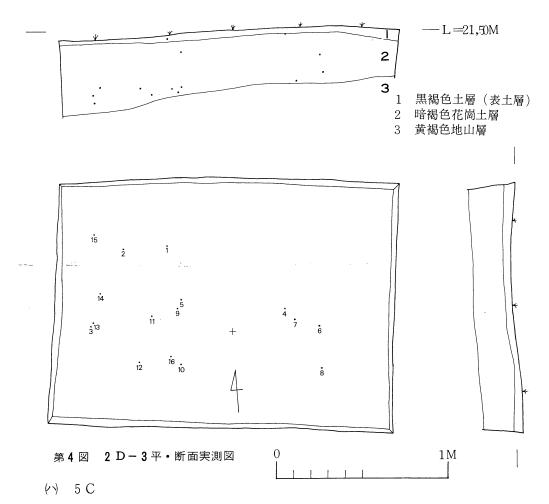
しかし、近辺の地形の変容や土層序の観察からして、同層が原状を維持する遺物包含層であるとはいい難い。おそらく、東側斜面にちかい 2B-2 においてと同様に、他に比べてサヌカイト・チャート細片の出土が多かったのは、畑地開墾時に掘削土が東西側に引き寄せられて混入したためであろう。

(p) 3 F

丘陵中央部の東側斜面にちかい試掘区で、やや傾斜地である。黄褐色地山層までは15~20cmと意外に浅く、区内中程で幾分段づき東寄りに下がる層序から掘削時の様子が分る。

遺物は第 2 層暗茶褐色土中より検出されたが,そのほとんどが区内東半部においてであり,サヌカイト細片 $11 \cdot$ チャート細片3 (第 5 図 図版3 (1) と十数点の陶磁器・素焼土器片が混在した状態であった。こうした遺物の出土状況や現状の地形からみて,ここでもやはり先述の $2 D - 3 \cdot 2 B - 2$ と同様なことが考慮される。





南側道路から一段下がった狭い平坦部で、これより緩い傾斜で凹地内に入る。

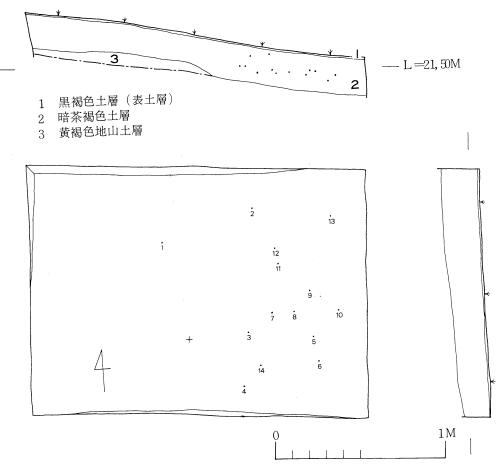
 $80\sim 90$ cmの掘り下げで砂質の堆積土が $8\sim 9$ 層ほどに細分され,南側道路の高まりに沿った層序を示している。その第7層下(表土下70~80 cm)の位置より,背後に丸杭どめをした船板で幅60 cmほどに仕切った用水路の遺構が検出された $\begin{pmatrix} 97 & 20 \\ 200 & 4(2) \end{pmatrix}$ 。堆積土層序からみれば,南側船板の旧状は幅30~40 cmのものであったかと推測され,上開きの傾斜も北側より大きい。内部には $3\sim 4$ 層の砂質堆積土下に青灰色粘質土層が見られ,ある期間流水の用をなしていたことが分る。その設営の時期については,船板やそれに取り付けられていた銅板の一部・釘などの腐蝕状況からみて,さほど時代を遡る遺構とは考えられない。このため,地権者その他島内の事情に詳しい人に問合せたが確実な時期をおさえることができなかった。一部には,明治中頃の設営ではなかろうかと推測している。

ところで,遺構内の黄褐白色砂質堆積土中より弥生期のサヌカイト製無茎石鏃 1 点 $\begin{pmatrix} \hat{\pi} & 6 & \boxtimes \\ \boxtimes \hat{m} & 5 & (1) \end{pmatrix}$ が出土した。長さ $2.4 \ cm$,基部はわずかに凹み幅 $1.6 \ cm$ を測る。かなり精巧な 剝離調整によるものである。

この石鏃は、いうまでもなく近辺より流入したものであるが、先述の磨製石斧がここより東へ約30mのところで出土していることを考えあわせると、凹地周辺部に弥生時代の遺跡の存在が十分に推測される。それが、南側の尾根丘陵上なのか、凹地奥部の山裾部なのかについては、地表観察だけでは推測の域をでず、今後の調査を待ちたい。

なお、凹地内に位置する $5 \text{ A} \cdot 5 \text{ B}$ においては、湧水のため $7 \sim 8$ 層の土層観察にとどまった。その土層序にはあまり変化がなく、ほぼ中層に粘質土層を挟んで上・下に砂質土層が堆積している。上層からは素焼土器・陶磁器・染付片などが混在状態で多数出土しているが、 5 A 第 8 層 $\cdot 5 \text{ B}$ 第 7 層ではほとんど遺物の出土をみなかった。

このように、今回の調査では、凹地の旧状復元や堆積推移を確認するまでに至らなかった。そのためには相当規模の調査が必要であろうし、今後の課題としたい。



第5図 3F平·断面実測図

(二) 第8調査小区

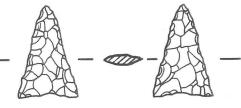
ここでは各所の写真撮影と $\frac{1}{100}$ 地形測量図(第9図)を作成して,今後の調査を検討する資料を得た。

「石の塔」の平坦地は、東西約20m、南北幅が東側の広がったところで15mを測る。北側が自然斜面の状態、東南側は明らかに切岸状をなす。南側岸下の田地とは3mほどの高差をもつ。西南側は、50cmほど一段低下した9×24mの略長方形状平坦地である。また、平坦地の縁辺斜面には石垣積みの一部も見られる。

さて、平坦地の北寄りに、側面に格狭間を、上面中央に浅い窪みの小さな枘穴を刻んだ 方形の花崗岩基礎石が残る(第7図)。上部の石造物の形状については知る由もないが、 故意に4分割されている。格狭間の観察から、中世末期頃にまで遡るものではなかろうか といわれている。

ともかく,この基礎石が「石の塔」と呼ばれる石造物に係るものであり,これがこのあたりの古地名の因ってきたところであろう。

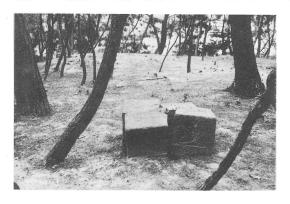
ところで、「がんど」の地名は伽藍堂から の転訛だといわれ、凹地奥部には「しゃかの



第6図 5 C出土石鏃実測図(実大)

もと」・「さいのかあら」の古地名が残っている。「しゃかのもと」とは,「石の塔」の平坦地から西南約50mの五輪塔群が所在するあたりを指す。かつては $5\sim6$ 基の五輪塔があったといわれるが,今は比較的原形にちかい1 基と崩壊した組み石が数個散在する(図版6(2))。それらの十分な時代考察は難しいが,中世末期頃まで遡るものかもしれない。なお,対面する南側尾根裾の「さいのかあら」にも,数基の五輪塔が存在していたという。また,「石の塔」を下った海浜部を「堂の浦」と呼ぶ。

こうした古地名の位置関係や五輪塔群の所在,平坦地の状況などから考慮して,「石の塔」に小伽藍の御堂が営まれていたとすることも,あながち無理な推測ではなかろう。い



第7図 「石の塔」の平坦地

ずれにせよ、この平坦地に何等かの建造物が存在し、それが石の塔を伴うものであったのか、石の塔がそれ以後のものなのか、などについては今後の綿密な調査によって検討したい。

なお、この平坦地東寄りの北側斜面にかかるところに箱式石棺様遺構が2ケ所見られることにも留意したい。東側のは、板状の花崗岩を用い、1石が横位に立ち、斜面すぐ下方に数個の転石がある。これ

より5 mほど離れて, 花崗岩の不整形な割石を箱状に組んだ一部が残る。これらは, 表面 観察だけでは直ちに石棺遺構とは決め難く, なぜ, 石垣遺構とも見受けられない組み石が, このように露な状態で平坦地の一画に残存したのかと疑問がある。

6 遺跡の範囲

今回の調査は、あくまで予備調査の性格上調査の方法や調査区の設定などにもおのずから制約があり、調査地区内の埋蔵文化財の内容を十分に把握できたとはいい難い。

しかし、調査の結果、各調査小区における遺物の出土状況や土層序の観察からほぼ遺跡の概況を知り得ることができた(第10図)。

第1調査小区では、下降する尾根筋はともかく、A~Dにおいて、僅か2点のサヌカイト剥片が出土したにすぎないが、その立地は「鳶の巣」遺跡の北端部にあたり、地形的にみても同遺跡の広がりを考えざるを得ないところである。

そして、従来遺跡として知られていなかった第 $2 \sim 4$ 調査小区では、相当数のサヌカイト・チャート細片が出土し、特にサヌカイト同様に石器の原材として使用されたチャート(薄い青緑色)については、この島で知られていなかっただけに注目される。

たしかに、それらが石器の形態をとるものではなくても、明らかに石器製作の過程で生 じたものであり、今後の本格的な調査によって先土器時代の人々の生活のあとも発見され る可能性も強いわけである。

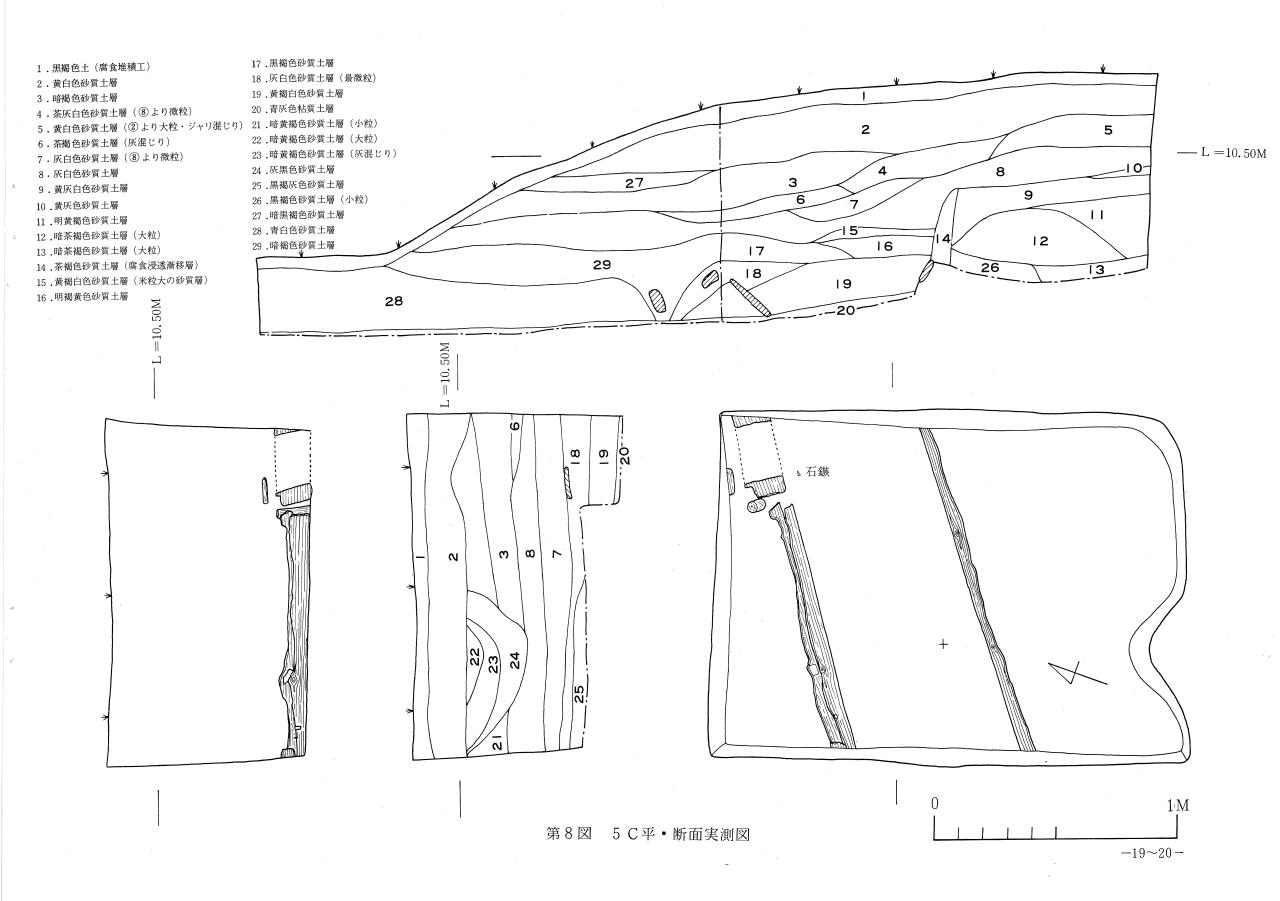
第5調査小区では、凹地の旧状復元という課題を残しながらも、近辺における弥生遺跡の存在が十分に推測できる成果があった。今後はできるだけ広範囲な発掘調査を通じて、単に凹地の旧状復元にとどまらず、周辺部の弥生遺跡の存在、「石の塔」、五輪塔群などに深くかかわる資料を得たい。

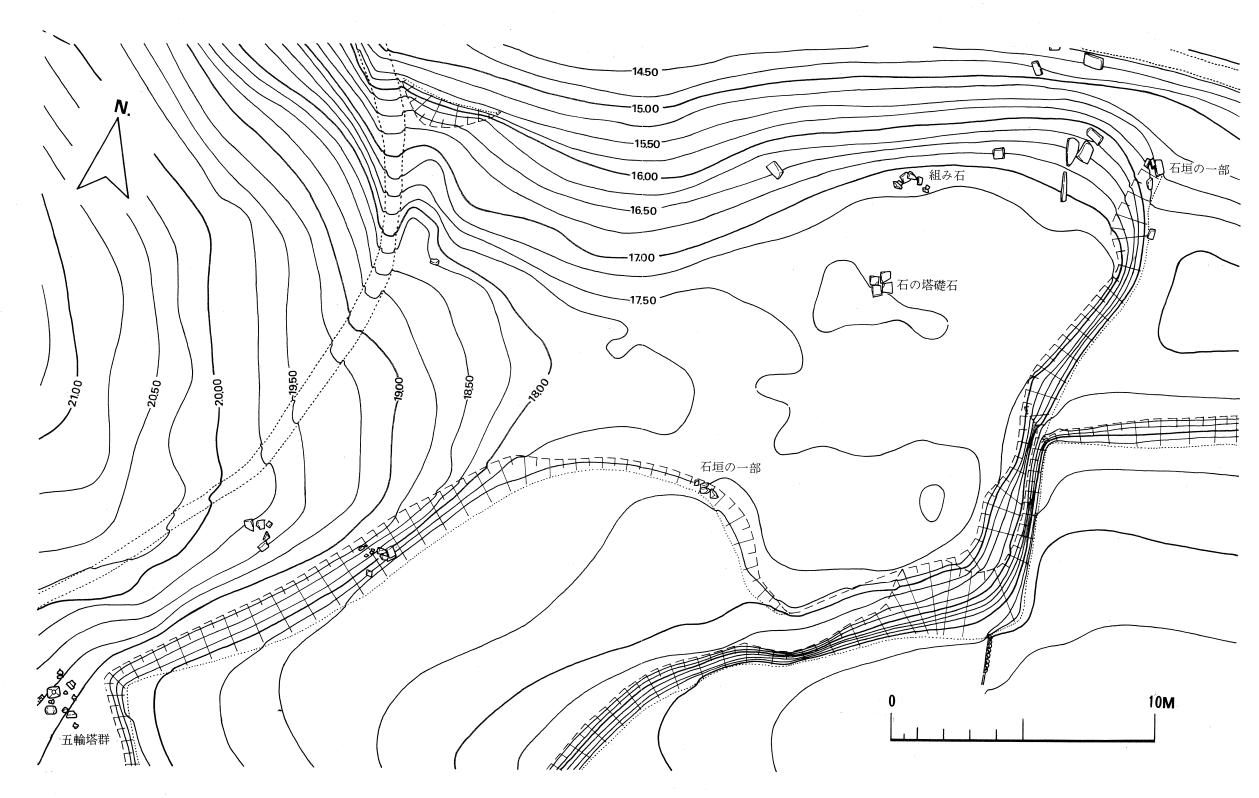
また,第6調査小区周辺部においても,これまで石鏃の表採があったことを考えると石器散布地としての調査を要する。

第8調査小区については、先述のような中・近世遺構の確認のため、全面的な、しかも詳細な調査が必要である。それらは、その時期においてこの島における代表的な遺跡の1つであり、確かな歴史の資料をわたくしたちに与えてくれるだろう。

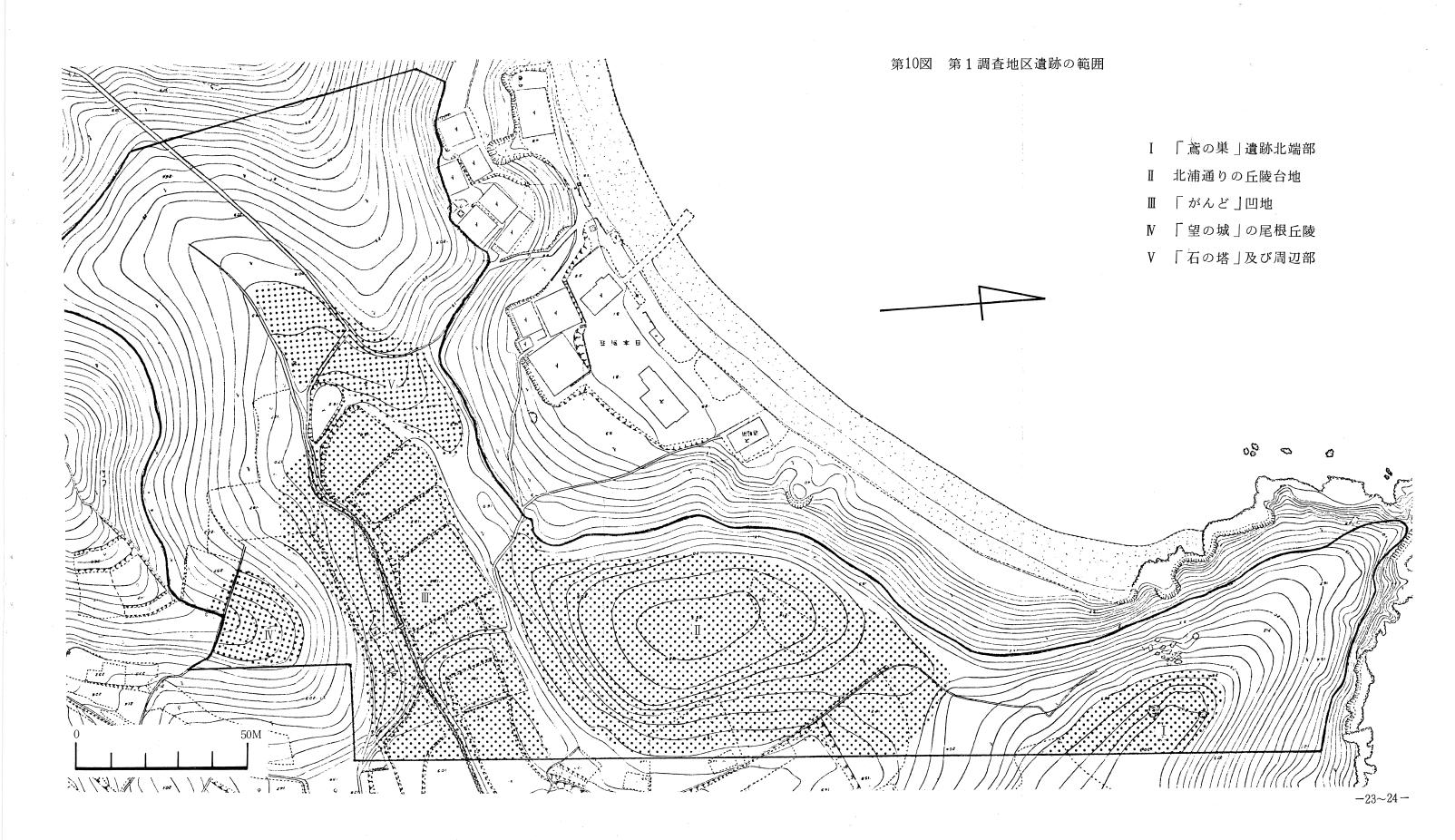
わたくしたちは、たとえ1片の石片や土器片でも疎かに取り扱うことはできない。どのように小さな遺物にも、どのように小さな遺跡にも、かならず歴史を明らかにする貴重なヒントが潜んでいるはずである。

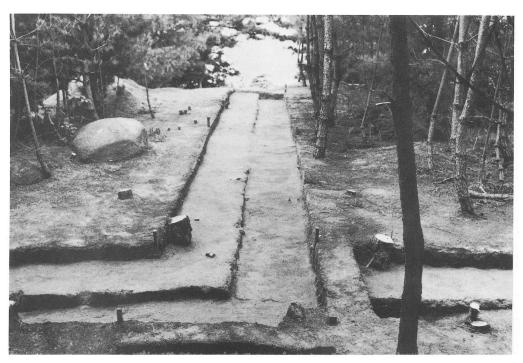
このことを念頭において、今後の調査をどのように実施するかについて考慮したい。

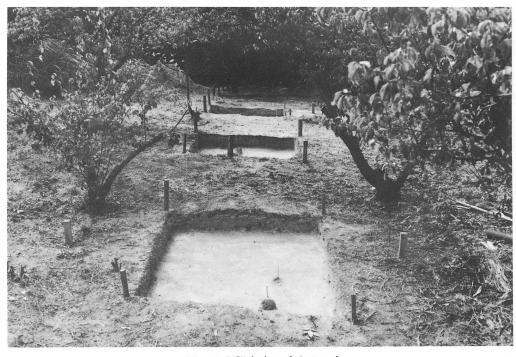




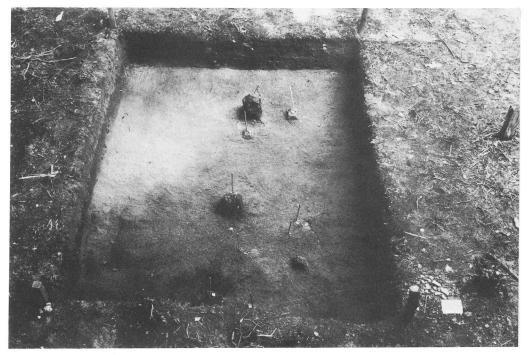
第9図 「石の塔」及び周辺部の測量図



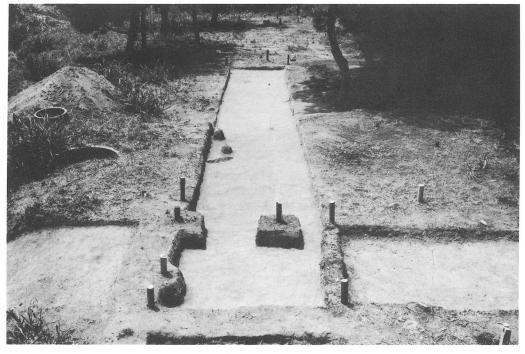




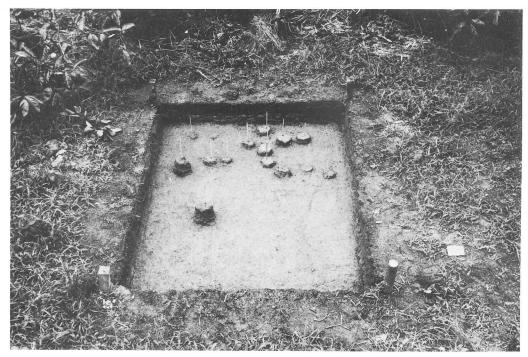
(2) 第2調査小区(東より)



2 D-3遺物出土状態



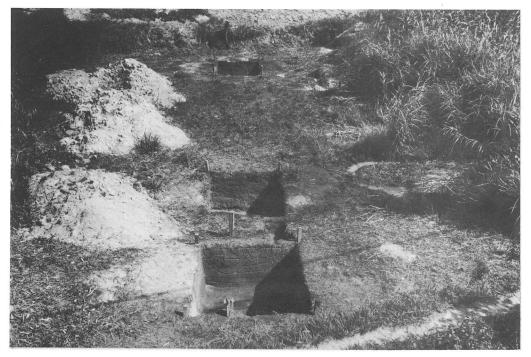
(2) 第3調査小区Cトレンチ(北より)



(1) 3 F遺物出土状態



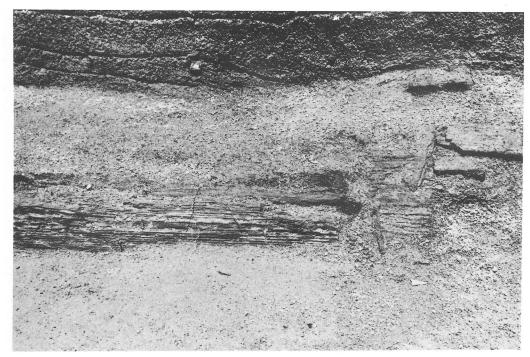
(2) 第4調査小区(西より)



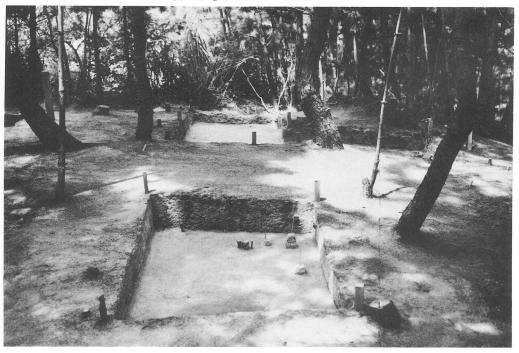
第5調査小区(南より)



(2) 5 C遺構検出状態



(1) 5 C 遺構及び石鏃検出状態



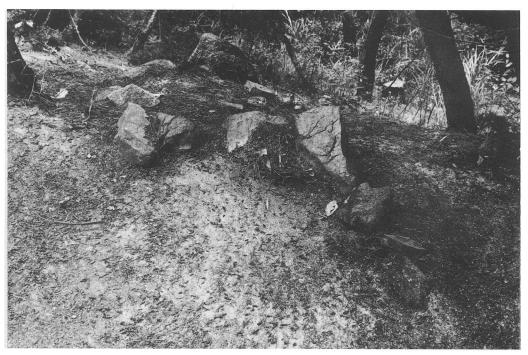
(2) 第6調査小区(南より)



第7調査小区(南より)



(2) 第8調査小区五輪塔群



「石の塔」北側斜面にかかる組み石





(4) 5 C出土石鏃



(5) 「がんど」凹地出土石斧

櫃石島第Ⅱ調査地区(ホウロク石)

_		
目 次		
1. 立 地35		
2. 調査の経過 35		
3. 調査地区の設定… 36		
4. 調査の概要 39		挿 図 目 次
5. 主たる調査区 41	第1図	櫃Ⅱ一3一H調査風景
(イ) 櫃 I - 1 - D	第2図	櫃石島第2調査区位置図
(p) 櫃 ヅ - 2 - A		櫃 I − 1 − D 調査グリッド実測図
(小櫃II-3-C		櫃 I - 2 - A 調査グリッド実測図
(二) 櫃Ⅱ - 3 - H	第 3 図	櫃 II - 3 - C調査グリッド実測図
	第4図	櫃Ⅱ−3−℃調査グリッド出土遺物実測図
6. 遺跡の範囲 72	第5図	櫃Ⅱ−3−Ⅱ調査グリッド実測図
	第6図	櫃Ⅱ−3−Ⅱ調査グリッド遺物分布実測図
	第7図	櫃 I - 3 - H 調査グリッド出土遺物実測図-1
	第8図	櫃 I - 3 - H調査グリッド出土遺物実測図-2
	第9図	櫃 II - 3 - H 調査グリッド出土遺物実測図-3
	第10図	櫃 II — 3 — H 調査グリッド出土遺物実測図— 4
	第11図	櫃Ⅱ-3-H調査グリッド出土遺物実測図-5
	第12図	櫃Ⅱ-3-H調査グリッド出土遺物実測図-6
	第13図	櫃石島第2調査区の遺跡の範囲
	31-2-0	
		図 版 目 次
	図版 1.	(1) 櫃 Ⅱ - 1 - D 調査グリッド(北より)
		(2) 櫃 II - 2 - A 調査グリッド(西より)
	図版 2.	(1) 櫃 II - 3 - C 調査グリッド · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
		(2) 櫃 II — 3 調査区発掘前景
	図版3.	櫃 II - 3 - H 調査グリッド各景 ······ 75
	図版 4.	
		(2) 櫃 II - 3 - Hグリッド全景, 対岸は鷲羽山遺跡
	図版 5.	(1) 櫃 Ⅱ - 2 - A グリッド出土遺物
		(2) 櫃 II - 3 - C グリッド出土遺物
	図版 6.	櫃 Ⅱ - 3 - Ħ グリッド出土遺物 - 1 78
	図版 7.	櫃 Ⅱ - 3 - H グリッド出土遺物 - 2 79
	図版 8.	櫃 Ⅱ - 3 - Hグリッド出土遺物 - 3 80
	図版 9	櫃 II — 3 — H グリッド出土造物 — 4 81

花見山地区 (ホウロク石)

1. 立 地

標高76mの櫃石島最高所の四望眺遺跡から緩やかに蛇行しながら南下する尾根は,石槌大権現のある標高67.3mの地点やホウロク石地区で支脈を発し,櫃石島中央部の山麓地帯を形成する。第2調査地区(ホウロク石地区)の丘陵地は瀬戸内海の島嶼の例にもれず花崗岩を基盤とし,その表層は花崗岩風化土壌であり,殆んどが階段状の畑地に開墾されている。この地区の地形は尾根状丘陵地とそれに挾まれた狭い谷状地に区分されるが,それらの微地形は地点ごとに若干の相違が認められる。

2,3の雑誌に発表されている表採資料の分布地点や今回実施の分布調査に於いて確認 された旧石器の散布地はこの尾根状丘陵地の比較的緩やかな稜線上の平坦部分に立地する。

2. 調査の経過

8月中旬 第II 調査地区、調査地点の設定のため3日間調査区の踏査を行ない、地形に見合った各地点に小区を定め、8月31日櫃石公民館に関係者各位の出席を求め、第II 調査区の調査計画、調査地点などを説明し、承諾を得る。

9月 発掘小区にかかる地権者と共に地番,地目,発掘面積を確認し,発掘用地借上げ契約を締結する。

9月上旬は発掘各小区の立木伐採,下草刈りを発掘区抗打ちに平行して行なう。

第II 調査地区第2 小区(以下櫃II -2 と呼称する)の9 グリッド36 m^2 の調査を、9 月末に終了する。

櫃II-1地区の調査は10グリッド37m²を対象とし作業の都合上,櫃II-1,II-3地区と平行して行ない,9月28日に終了した。

櫃Ⅱ-3地区は, 第Ⅱ調査地区の内で一番旧石器類の散布の多い調査地区

で,櫃 Π -3-Aから櫃 Π -3-Jまで10グリッド56 m^2 を調査対象とした。 9月20日に着手し終了したのは 12月19日であった。櫃 Π -3-Hグリッドの調査は延べ20日以上を要した。

10月 櫃Ⅱ-4,6地区はホウロク石から,南に続く尾根状の調査地区で,



第1図 櫃Ⅱ-3-H調査風景

9月28日に調査を開始し、10月13日に終了した。

櫃 II-5, 7,8 地区は櫃石中学校背後の丘陵裾部の傾斜地に設定した8 グリッド $29m^2$ の調査区であるが、10月6日から調査にかかり、12月18日終了した。

なお,櫃石島第Ⅲ調査地区の調査と第Ⅲ調査地区の調査は調査員,作業員の配置上の都合で10月中旬から併行して実施した。

3. 調査地区の設定

櫃石島第Ⅱ調査地区は第Ⅰ調査地区の「がんど」凹地につづく丘陵端部から,櫃石中学 背後の谷状地までに便宜的に区分されたものであるが,旧石器の散布密度の高いホウロク 石周辺を中心に,尾根状丘陵部と谷状地に区分され,それらの走向に合せて,各調査小区 を設定した。

櫃石第Ⅱ調査地区第1小区(櫃Ⅱ-1と略称する)

この調査小区は標高63.7mの石槌大権現社周辺の高地から北東に伸びる尾根稜線上に定めたもので,櫃 $II-A\sim J$ まで10グリッド $37m^2$ の発掘区である。 $A\sim J$ の各グリッド間の隔りは地形状況に合せて随時変化させている。またグリッドの規模も立木,果樹などの実情に合せて大小にする。

櫃石第Ⅱ調査地区第2小区(櫃Ⅱ-2)

宝珠寺背後の谷状地と尾根状地に定めた調査地区で, $A \sim I$ まで各口 $2 \times 2 m$ グリッド 9 個を定める $36 m^2$ の調査面積である。

櫃石島第Ⅱ調査地区第3小区(櫃Ⅱ-3)

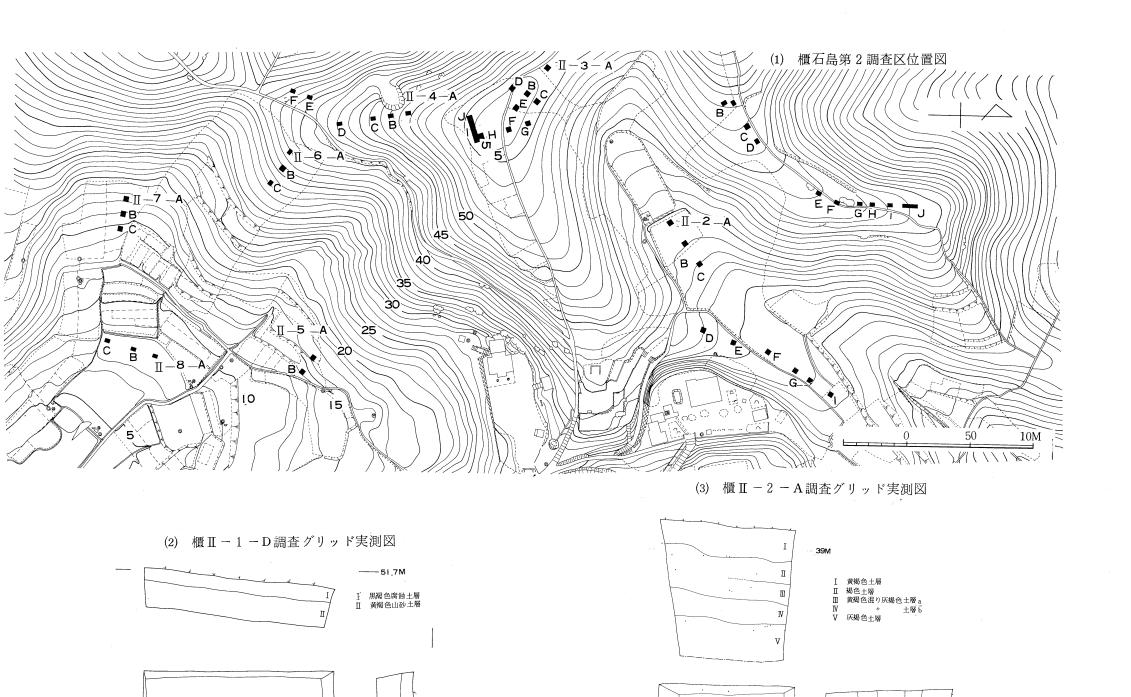
ホウロク石と通称される一帯の尾根状丘陵地で,王子神社門前の鞍部を経て宮崎まで連続する尾根の基部にあたる。一帯は台帳上は畑地とされているが既に放棄されていて,雑草の繁茂がみられるものの,随所に多量のサヌカイト片を認めるばかりか中にはナイフ形石器や尖頭器等をも採集する程で,調査前から旧石器時代遺構の所在が予期された。この地区の調査は一本松のある平坦地付近で尾根が曲折しているため,北方の石槌権現社のほうに続く平坦地に5グリッド20㎡,曲折地点近くではほぼ南北に3グリッドを設定し,南端のグリッドはさらに西方へ発掘区を延長したグリッドを定めた。ホウロク石地区の発掘全面積は54㎡である。

櫃石島第Ⅱ調査地区第4小区(櫃Ⅱ-4)

ホウロク石地区から南に続く尾根が鞍部となる部分に定めたもので、やはり稜線上に尾根の走向に合せて、 $A \sim F$ の6グリッド $18m^2$ を設定した。

櫃石島第Ⅱ調査地区第5,6,7,8小区(櫃石Ⅱ-5,6,7,8)

これら4小区は櫃石中学校背後の三方尾根に挾まれた谷状地の尾根傾斜地と谷底部に定



第2図 櫃石島第2調査地区位置図、櫃Ⅱ-1-D・Ⅱ-2-A調査グリッド実測図

めたものである。第 6 小区は第 4 小区の鞍部から谷に続く傾斜地に定めた 3 グリッド $10m^2$ 調査区でミカン園の果樹の間をぬったような状態である。

第5,第7小区はいづれも緩い傾斜地の畑地に定めた小区で5グリッド $20m^2$ の調査面積である。第8調査小区は,台帳には水田と記される。谷状地の中央部低湿地に定めたもので $3グリッド9m^2$ の調査面積である。

4 調査の概要

各調査区の概要

調査グリッド	面積	出土遺物	遺構	調査の所見
櫃 II - 1 - A B C D E F G	3 4 3 3 3 3		不明ピット	櫃Ⅱ-1調査区は北に伸びる 馬背状の痩尾根に設定したもの であるが,表土腐蝕土層,第2 層花崗岩バイラン土層の2層を みるだけで遺物包含層は皆無で あった。不明ピットとしたもの も植物の影響や地山の微細な変
H I J	3 9	近世瓦質土器片	不明ピット	化によるものと考えられる。
櫃 II — 2 — A	4	サヌカイト片4・チャート片 3・土師器・須恵器・瓦質土 器・青磁片・瓦		平安~鎌倉の下層の土にサヌ カイトを含む土層が堆積する。
В	4	サヌカイト片 3 • チャート片 3 • 土師器片 • 瓦片 • 瓦質土 器片		A~Cグリッドは谷状地に定めたもので埋積土層が深く,遺物包含層に上下の逆転がある。
C D	4 4	土師器片・瓦片 サヌカイト片・弥生式土器片・ 陶器片	不明落ち込み	D~Iグリッドは畑地に定めたもので、近世から現代までの種々の遺物が混在する。
E	4	サヌカイト片・チャート片・ 弥生式土器片・土師器片・須 恵器片・瓦質土器片・瓦片・ 陶器片	不明ピット	全体的に見れば安定した遺物 包含層もなく遺構は所在しない と思われるが、A・B・H等に 発見された青磁を中心に中世土
F	4	サヌカイト片・瓦質・陶器片		器の散漫な散布があるため注意
G	4	近世土器片•瓦片•陶器片		を要する。
Н	4	青磁片・陶器片		
I	4	瓦片 • 陶器片 • 近世土器片		
櫃 Ⅱ — 3 — A	4	 小型ナイフ形石器 1 ・細石核 1 ・二次加工ある細片 1 ・剝 片 2 ・砕片 5	不明ピット	不明ピット近くに細石刃核等 出土。
В	4	横長剝片石核1 • 縦長剝片石		
С	4	核1・剝片2・砕片4 細石核1・ポイント1・ナイフ形石器1・剝片15・砕片20・チャート砕片1		この調査区は調査前からサヌ カイト片の散布がおびただしい 地域で,調査した10グリッド56
D	4			#2の範囲から 5,0 0 0点にのぼる サヌカイト片を中心とした旧石 器時代遺物群が検出された。
E	4	縦長剝片 1・剝片 5・砕片 16		特にホウロク石周辺はその分

調査グリッド	面積,加	出	土遺	. 物	遺	構	調	査	の形	f 見	
櫃Ⅱ—3—F	4	細石刃3・ 剝片11・砕 1・石鏃2	片34 •	1 • 削器 黒曜石剝	1• 巨石 片	側近		遺構の			を中心
G	4	石核 1 • 縦 形石器 1 •	長剝片 台形様				なお 王子神	, この 社に至	こるまで	ごの移	東方の
н	12	片10・4・10 ・ 4・10 ・ 4・10 ・ 5 10 ・ 5 10 ・ 7 10 ・	長射石 器11・ 温加 器 に 器 に 器 に る の の の の の の の の の の の の の の の の の の	器28・小 幾可学形 る剝片18 ドリル 3	型石••••		平坦地 の散布 る。	もやはが著し	くり , ちんく 注意	トヌカ	イト片の要であ
,		再生石器17 る剝片78・ 円礫, 焼石 片 2862	7・細石 細石刃 19・剝	核に関連 43・叩石 片 328・	す 3・ 砕						
I	8	翼状剝片 1 核再生剝片 フ形石器 4 二次加工を 黒曜石 7	·8 · 石 ·切断 る剝片	核 1 • ナ ある剝片 • 削器 1	イ 3・						
J	8	片 327 ・ 砕	片79ほ 核1・ 器1・ 削器1 剝片20	か 縦長剝片 二次加工 ・細石核	1・ あ 1・						
櫃 II — 4 —A B C D E F	3 3 3 3 3 3	土師器片 1 土器片 e 瓦片 2 近世土器片 陶器片 瓦片 瓦片 瓦片	片 1 世土器	片	世		南に伸び が , 表土 みるだけ	る尾根 花崗岩 で包含 る土器	上に定 風化土 層は皆 片は近	E めた 上層の 上無で 上無じ	2層を ∃ある。 ↓降畑地
櫃 II — 5 —A B	4	サヌカイト 2・須恵器 近世土器片	片•近		片		櫃石中 谷傾斜面 が,後世 されない	に定め の混入	たグリ	ット	である
櫃 II — 6 — A B C	3 4 3	陶製土錘 1					櫃石中 傾斜面に 遺物遺構	定めた	グリッ	ドで	√30m の ⁵あるが,
櫃 II — 7 — A B C	4 4 4	須恵器片1 瓦片•近世	• 近世	土器片			櫃石中に に定めた 積が顕著 下げたが、 は検出さ	グリッ で地表 , 以下	ドで, から1 は断念	山砂 . 5 m	を掘り
櫃 II — 8 — A B C	3 3	近世土器片 サヌカイト 土鍋片 2 ・ 近世土器片	片 1 · 近世土	瓦質椀• 器片	瓦•		櫃石中が 定が後で、 た。遺物 遺構は検	リッド , グラ は二次	である イ土層 的堆積	。 婚 が 検 した	表下1 :出され

5. 主たる調査区

(イ) 櫃 II - 1 - D (櫃石第 II 調査地区第 1 小区)

石槌大権現から「がんど」凹地に伸びる尾根稜線上の標高約51.5 mの地点に設定したグリッドである。地目は畑地と記載されているが、十数年来畑地としては利用されず松林となっている。

土層は2層しかなく,その基底部は花崗岩風化の地山である。第1層は旧耕作土で10~15cmの厚さでほぼ水平であり,黒褐色腐蝕土層である。第2層は黄褐色を呈する山砂土層で20~25cmを測り,地山の花崗岩風化土層とかなり凹凸を持って接している。第1層,第2層とも遺物は検出されない。

この櫃 $\Pi-1$ 調査小区では,櫃 $\Pi-1-A$ ~Hまで8グリッドを調査したが各グリッドともやせた尾根上にあるため表土,表土下層,花崗岩風化の地山といった層序を示し,表土層の浅いところでは数cmも掘り下げないで直ちに地山が検出されたグリッドも2,3認められた。遺物は櫃 $\Pi-1-H$ の表土中から明らかに遊離遺物とみなしうる細片化した瓦質土器の破片を1片検出しただけで,ほかには全くその出土は認められなかった。

(□) 櫃Ⅱ-2-A(櫃石第Ⅱ調査地区第2小区)

ホウロク石(櫃 Π -3)から王子神社に向う尾根と石槌大権現から北東に伸びる尾根(櫃 Π -1)に挾まれた谷状地に設けたグリッドである。この地点には10m毎に $4m^2$ のグリッドを 3 箇所設定したが、いづれも堆積土層が厚い。第 1 層は黄褐色土層で耕土である。第 2 層は褐色土層であるが、茶褐色を呈する上層と暗褐色土層の下層に 2 分しうる。上層と下層の境目が不明瞭なものであることや土質が近似した粒状を示すことから合せて第 2 層として取り扱った。耕作の影響は第 2 層上層まで認め得る。第 3 層は黄褐色土混り灰褐色土で地表から約 1 m を測り、35cmの厚さを持つ。第 4 層には遺物は含まれていない。第 5 層は灰褐色土層で有機質の変化したものと考えられる汚れが全体に及んでいてこの土層の上部から須恵器片・土師器片(亀山焼系統の軟質なものも含む)・瓦器碗片・青磁片が出土する。

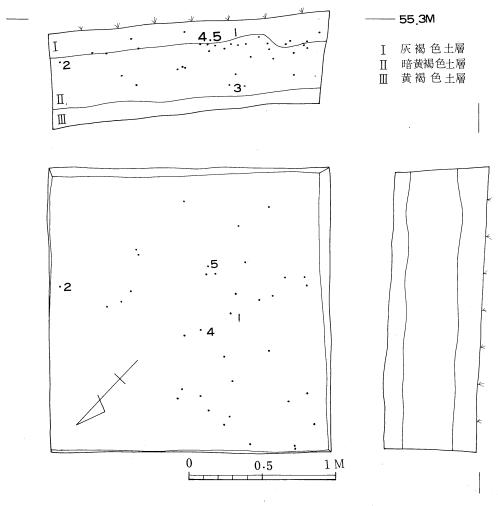
地表から約2m程掘り下げたが第5層の下辺は把えられず湧水が激しいためそれ以下の調査は断念した。

この谷状地に定めた調査区の土層はいづれも褐色系統の山砂土で全般に粒状が粗く、密度も粗く余りしまっていないもので、尾根傾斜面からの堆積が容易に推定された。第5層土層に僅かではあるがまとまって出土した平安後期から鎌倉期にかけての土器群には青磁の細片も検出され注意を引くが、これ等遺物を含む土層がどのようにして形成されたかは明らかでない。

第4層灰褐色土層からは、須恵器片3、瓦器片1(2)、青磁片1、瓦質土器片1の出土が

みられたが,いづれも他所からの堆積でみるべきものは少ない。

須恵器片は甕或いは壷の体胴部の細片 2 片と鉢或いは盤の口縁部の細片 1 の 3 片で,体胴部の 1 片は灰白色を呈し,焼きの悪いものである。口縁部の細片は口縁端部で内外方向に鈍く肥厚するもので,内外面とも器壁は横撫で調整をしていて外面には 1 cm前後の間隔に沈線が入り,その間帯は肉厚に肥厚している。口径はかなり大きいと推定される。瓦器片はいづれも細片であるため器形は明らかでないが高台の退化した指頭圧痕を多く認めるもので終末期のものと考えられる。No.13の細片の内面には水平方向の暗文が施されている。瓦質土器は外面格子目叩目,内面撫で整形で,外面は黒色を呈し,内面は暗い灰色を呈する。青磁片は 2.5 cm大の三角形の細片であるが碗である。口縁端部はなだらかに外反して外横に稜を持ち上辺は丸味を持つ。口縁直下 5 mmあたりから外面には箆描きの浅い陰刻がやや左に傾いて施されているがその全容は明らかでない。舶載品であると推定される。



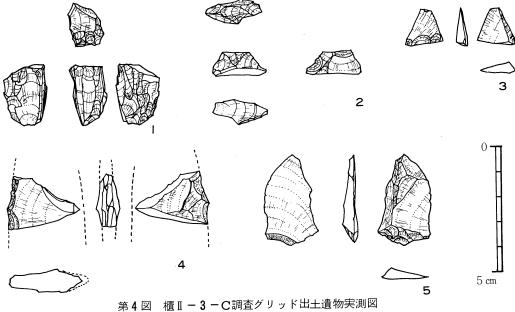
第3図 櫃Ⅱ-3-C調査グリッド実測図

(ハ) 櫃Ⅱ-3-C(櫃石第Ⅱ調査地区第3小区)

ホウロク石と通称される標高55m前後の稜線上平坦地の縁辺に定めたグリッドで、北東 方向に僅かに傾斜していて、その先数mの地点で傾斜角度は急になり丘陵傾斜面に移る。 畑地に開墾されているため地表から約20cm前後の表層は完全な撹乱層と考えられる。

第1層は20cm前後の厚さを持つ旧耕作土層で灰味がかった褐色を呈する粒状の比較的細 い土壌である。第2層は30~35cmを測る花崗岩風化土層で, 黄褐色を基調とするが暗褐色 の小粒状の斑点が上層に多く,下層になるにつれて減少するかたちで認められる。第3層 は第2層に認められた暗褐色の斑点がない黄褐色花崗岩風化土層である。第3層下は花崗 岩地山である。第3層は地山の崩壊土壌であると思われる。

遺物の大半は旧耕作土下層つまり第1層下層と第2層上層表面に密度を高くし,第2層 上層,第2層下層とその量を減少させる。第3層以下には遺物は含まれない。遺物の出土 総数は砕片まで数えて38点でその内訳は,細石核1,小形ブレイド1,不定型ナイフ形石 器 1,ポイント1,剝片 15,砕片 20とチャート砕片 1 である。



細石核は平坦に調整された打面とマイクロブレイト剥離面との角度が70°前後を測るも のである。打面円周は 5 cmで 1.5 cmの間に 6 条の樋状剝離痕が認められ 2 cm程の目的物が 得られたようで、階段状剝離のような剝離ミスのため捨て去られたものと考えられる。側 面は下からと構位からの調整剝離が認められる。現状では打面長 1.8 cmを測り,得られた 石刃長の方が長いのが特長である。細石器製作にはサヌカイトを母岩にしても玻璃質の密 度の緻密な石材が使用されている。砕片の中には同質の小片が数点認められたが,細石器 類は検出されなかった。小形ブレイドとしたものは,円盤状石核のような不定方向からの

剝離によって得られたエッジを有する 4 cm足らずの剥片の基部に二次加工を施したものである。他の1片は宮田山型に入るものと考えられるが先端部が小片のため明らかでない。なお、この小片の断面はクサビ状の鋭い三角形である。ポイントとしたものは鷲羽山遺跡調査略表にある D類のものに類似するが小片であるため法量は明らかでない。

(二) 櫃Ⅱ - 3 - H

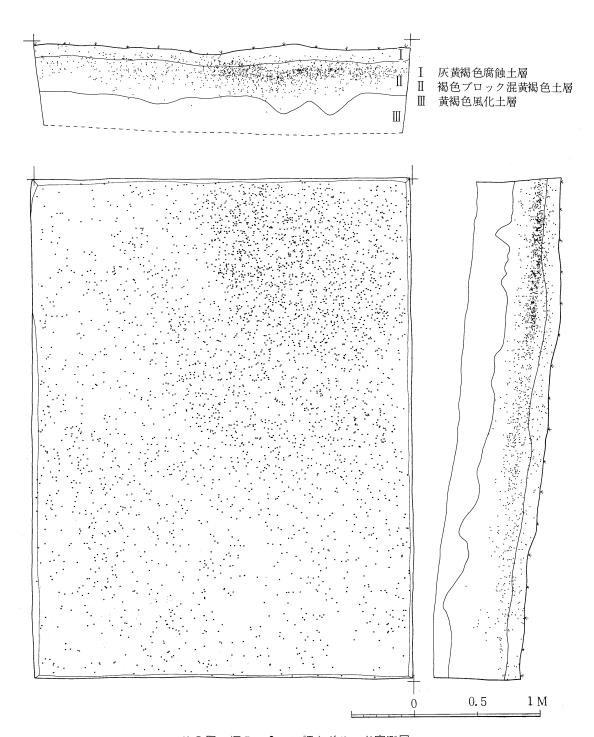
この調査グリッドはホウロク石と通称される岩塊の所在する丘陵状尾根の稜線上の平坦部に定めた $12m^2$ を発掘面積とするグリッドである。この地点は王子神社を経て宮崎に至る尾根を南に伸びて大浦浜背後に至る尾根の分岐する基部にあたり,東に僅かに内海を隔てた至近距離に鷲羽山遺跡を望み,西には丸亀市本島ほか塩飽の島々や,岡山県笠岡市の島々を望む要地である。先述の櫃II-3-Cグリッドとは約30m程の距離を持つ地点で,北から南へ緩く傾斜している。台帳上の記載は畑地とあるが現状は自然地形に近い傾斜を示す雑地である。グリッドは南北4m,東西3mの長方形で別記した櫃II-3-1,櫃II-3-1に東西軸を延長している。

層位と遺物出土状況

この調査地区の層序は第1層,第2層,第3層の3層に分けることができる。第1層は表土層で約15cmを測り,粒状の非常に細かい腐蝕質の花崗岩風化土壌で旧耕作土と見做される。第2層は上層部分では第1層と同質の旧耕作土壌が認められるが,下層部では2mm大の砂粒を含の花崗岩風化土層となり,花崗岩に含まれる鉄分が凝集したものと考えられている暗褐色を呈する斑紋状の土塊が平面で5~15cm大の円形状に,断面で10~25cmを測る縦長のブロック状に認められる。このブロック状の暗褐色土塊の分布は北半つまり高い方に少なく,中央部に多く南半よりに減少するかたちに密度の差が認められる。第2層上層は10~15cm,第2層下層は15~25cmの厚さを測る。暗褐色ブロック状土を含む第2層下層は硬く引きしまった土質である。第3層は第2層に認められた暗褐色ブロックが消失した段階から花崗岩盤の風化土の地山までの約30cmの厚さを測る花崗岩風化レキを含む砂粒の目立つ黄褐色で比較的軟質である。第3層の底面は地山と複雑に入り組んでいて,地山の風化土層であることが明らかである。

遺物は、第1層、第2層上層、下層に認められるが、第1層と第2層上層の1部は旧耕作土層で、撹乱を受けていないのは第2層上層と下層に限られる。

遺物は大半がサヌカイト製品で、縦長剝片・翼状剝片・横長剝片・ナイフ形石器・小型ナイフ形石器・幾可学形石器・削器・彫器・ドリル・ポイント・細石刃・細石核再生剥片・石核が出土し、石質変化の大きいものが多かったが、定型的な石器類は比較的風化が少なく、保存状態の良いものが多い。サヌカイト製品の他に、黒曜石製ナイフ・石刃、叩石、砂岩円礫焼石等が出土した。



第5回 櫃Ⅱ-3-H調査グリッド実測図

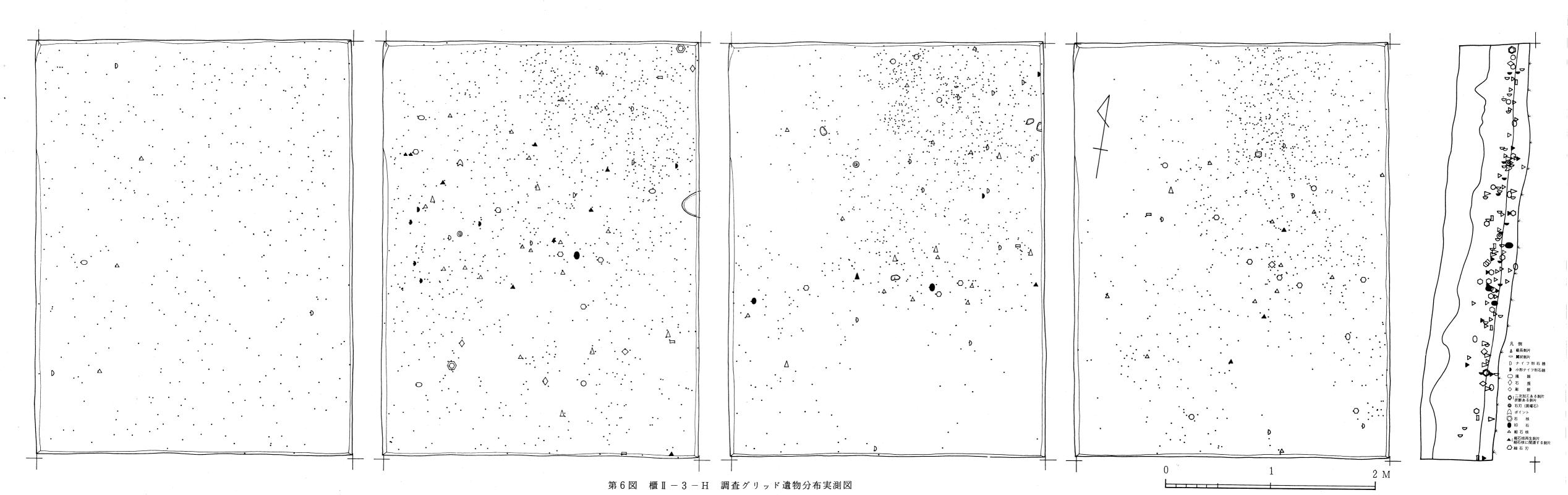
各層位別の出土遺物

これ等の遺物の垂直 分布状況は別表に示す とおりであるが、平面 的な広がりは調査範囲 が限られているため明 らかではないが、層序 ごとにその出土状況を 説明する。第1層は剝 片、細片に混ってナイ フ形石器 3、細石刃 3、

٠.									,											,			
		遺	石	縦	翼	t.	小型	幾可	二次	削	彫	۲	尖	細	細石	細石核	細	剝	砕	цр	円	石	材
		物		長剝	状剣	イフ形	ナイフ	r) 学 形	加工あ			IJ	頭	石	核再生	IC.	石				礫・	サヌ	黒
	曆 序		核	片	片	石器	形石器	石器	る剝片	器	器	ル	器	核	生石器	関連する剥片	刃	片	片	石	焼石	カイト	曜石
	I		-	1	2	2	2		2	1						13	3	59	178			262	1
	Ⅱ一上		2	7	3	7	4	2	7	3	1	3	1	5	2	31	16	140	889	1	4	1,118	5
	11一下	- 1	1	5	2	13	4		5					3	2	8	13	81	911	2	9	1,044	4
	II 一下-	- 2	1	2	1	6	1		4	1	1			6	3	26	11	48	884		6	995	

削器 1 が検出されただけであったが 250点を越える点数のサヌカイト片を検出した。第 2 層上層では、細石器製作にかかる遺物がグリッドの周辺を除いた全域から、ナイフ 形石器 は比較的散漫な形で北半寄りに,小型ナイフ形石器と一部の二次加工ある剝片は,北東隅 部と南西隅部からグリッド西辺の中央部にかけて分布していた。縦長剝片はそれらの石器 群と混在して検出された。第2層上層で検出された遺物総数は1,100点余りで、それ等の中 には他に叩き石、削器、ドリル、黒曜石剝片ブレイド、ポイントが含まれている。第2層 下層は便宜的に上層と下層に分けてその出土状況を説明したい。第2層下層上半を検出し はじめた頃から先述の暗褐色ブロックが検出され始めると同時にグリッドの遺物分布が北 東隅に稠密で距離を隔てるごとにやや散漫になるという変化を示し出すのである。暗褐色 ブロック塊は南東隅から北西隅にかけて散在の主流が認められる。遺物毎分布は,ナイフ 形石器は北東部分に、小型ナイフ形石器もやはり北東隅部にナイフ形石器とともに検出さ れ、細石器関係遺物はグリッドの中央部やや南東寄りを中心とした分布状態で検出される というまとまりを呈す興味深いものとなる。なお、出土遺物の総数は1,050点程である。第 2層下層下半は暗褐色ブロックの下半部にあたるが遺物の分布状況は下層上半部と余り変 化しないが、ナイフ形石器、小型ナイフ形石器の分布が散漫になる反面、細石器関係の遺 物分布がまとまりを良くし,細石核が細石核形成にかかる自然面を残す角礫と細石核調整 の剝片とともに出土するという良好な出土状況で検出された。第2層下層下半出土遺物の 総数は1,000点余りである。

次に断面図と見合せながらその分布状況を総合すると以下の事が言い得る。第1層耕作 土層および第2層上層に於いては種々多彩な石器群が相互に混合して,まとまりを欠く状態でグリッド全域に散漫に分布する。第2層の中位あたりから遺物の分布はまとまりを呈するようになり,ナイフ形石器もその極一部が南半に出土するだけで残りの大半は第3層無遺物層に密着して北東半に片寄って出土するようになる。一方,細石核,細石刃の分布はグリッド中央部,断面図によればナイフ形石器の分布域が終えると同時に非常にまとま



 $-47 \sim 48 -$

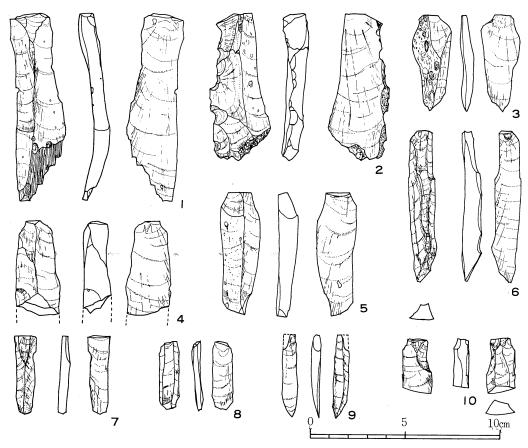
りよく出現し、地形の低い南東部ではその上部に逆転した形で僅かのナイフ形石器の分布を認めるようになる。またナイフ形石器は、国府型ナイフ・宮田山型ナイフに入るもの、井島 I 文化期に入る小型ナイフ形に大別され得るが、断面やその分布に於いては顕著な差を認めることはできない。ただ、小型ナイフ形石器は北東隅に前二者よりもやや狭い範囲に検出され、常にそれ等より上部に検出されていることから、細石刃技法関連のものとの中間的なレベルにあることは銘記しておかねばならない。

遺物の観察

縦長剝片(第7図) 縦長剝片は第2層を中心としてすべての層から出土した。長さ8 cm前後の大型縦長剝片と6 cm前後の中型品と4 cm前後の小型品とに分けることができる。これら図示した縦長剝片は程度の差はあるがいづれもが1条から2条の平行する稜を持っており,断面が台形もしくは三角形を呈するものであり,石刃とすることができるもの(8・9・10)があり問題を孕んでいる。石質は朽木状の風化面が残るものと,虫喰状の風化面を残すものがあり,後者のものが風化が大きい。4 は安山岩の一種であるが,結晶構造が粗いものである。図示した縦長剝片の打面はいづれも平坦打面である。これらの縦長剝片の長幅比は3前後で,図表化してみると大型~小型剝片のいづれもが一直線上に段階的に分布する興味ある結果を得た。これ等剝片のうち二次加工のあるものは2と10だけで2は主要剝片離面と直交する方向からの打ち込みがノッチ状に認められる。10は平坦打面部の隅から調整剝離が3ケ所施され,彫器に加工されているものとも考えられる。6は長さ8 cm・幅14cmを測る細長いもので,その断面は背高の台形を呈し,台形の平坦部分に4個の先行する剝離面を持つ。

翼状剝片(第9回、36・37・39・46) 翼状剝片として完全に図示し得たものは36・37だけで、他の10点近くは、折損していたり、他の石器(ナイフ形石器等)に加工されていたりするものである。 $36\cdot37$ は長 $2cm\cdot$ 幅6cmを測るやや小さい部類に入るもので、36から37への加工工程を示している。37は打面側と側辺にブランティングを認めるもので、半折されて出土地点を異にして検出されたものである。 $39\cdot46$ は、 $36\cdot37$ よりも厚さ・大きさの点で優るものであるがともに破片である。 $36\cdot37\cdot39\cdot46$ 共に打点は同一でネガティブな面とポジティブな面が対称するが、 $36\cdot37$ は打面の調整は無く二面の大剝離面の稜線上にあるのに対し $39\cdot46$ は細かい調整を施した打面である。翼状剝片はナイフ形石器にも認められ(国府型ナイフ)、別項で述べるナイフ形石器の中にも翼状剝片を素材としたものが認められる。また、図示することのできなかったのもかなりあるが、 $36\cdot37$ のような整った例は少ない。

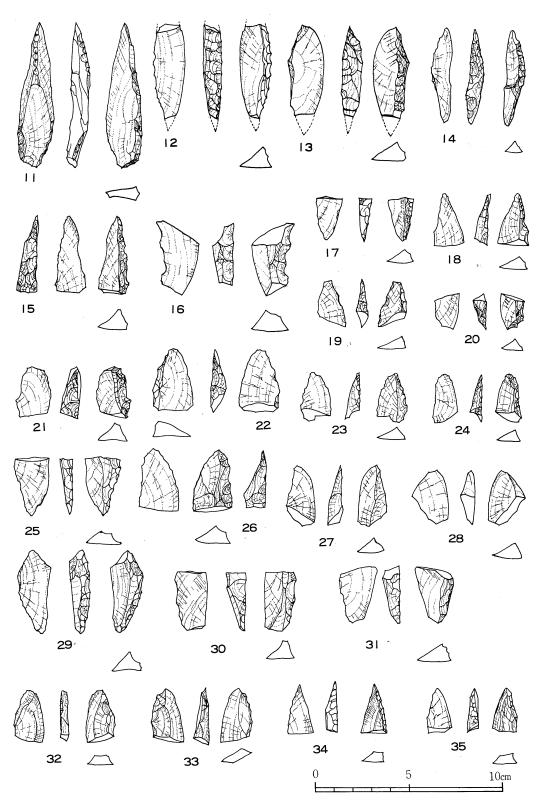
ナイフ形石器(第8図, 第9図) ナイフ形石器と認められるものは36点出土したが、 黒曜石小形石刃の背部をブランティングした小型ナイフを除いて他は全てサヌカイト製で



第7図 櫃Ⅱ-3-H調査グリッド出土遺物実測図-1

ある。しかし、それ等の形態は変化に富み完成品の%~%の大きさに折れたものが多く全形が不明であるため分類に苦慮するが、国府型、宮田山型、井島 I 型と従来呼称されてきたものが主勢で縦長石刃を用いたナイフ形石器は黒曜石の小型ナイフをみるだけである。国府型ナイフは翼状剝片の打面部を取り去ったものとする説に対して翼状剝片の背面のネガティブな剝離面をも取り去り底面のみを残すものまでを含むという説が呈示された。原材から特定の石器を取り出すまでの体系に於いて最終段階の成形の際、素材として形成された翼状剝片をどの部分までトリミングするかによって I 型~I 型までが呈示され、従来、宮田山型とされてきたものや、大型半月形石器とされてきたものが、国府型ナイフの範疇に包摂される可能性があるということである。

完形,もしくは完形に近い状態で出土したのは $11 \cdot 12 \cdot 13 \cdot 14 \cdot 29$ と小型ナイフ 9 点にすぎない。11は長さ7.7cm,幅1.8cmを測る先端の鋭いもので,中央部の断面は五角形,先端部はやや肥厚して三角形に近い方形を呈し,ポイント状の用途が推定される。基部から中央へ場程と先端から中央への稜とがトリミングされている。重量は129を測る。2 は両端を夫々少し欠くが,幅1.75cm・現存長5.1cm,断面二等辺三角形の紡錘形を呈するもので背

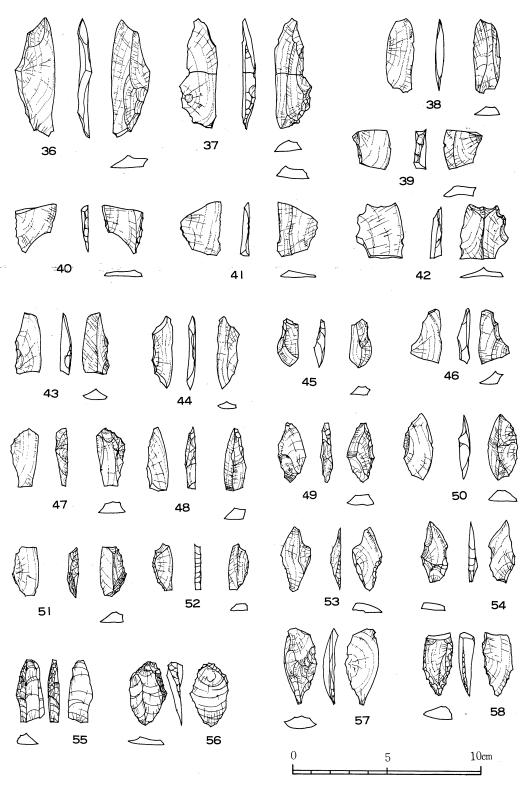


第8図 櫃II - 3 - H調査グリッド出土遺物実測図-2

面のトリミングは鋸歯状である。13は12と同様の形状を示すが長幅比がやや小さく,刃部の彎曲が大きい。背部の加工はやや12よりおおまかである。14はやはり横剝ぎ剝片を使用したものであるが,縁辺は背面の階段状剝離痕のためくびれる。背部の二次加工は,主要剝離面と背面の両側から施されていて,基部近くの稜にもトリミングが認められる。長5cm・幅1cm,断面三角形の小型品である。宮田山遺跡等に出土例がある。29は先端部の¼程を欠くもので,刃部は内彎している。背部の2辺と刃部の下端にかけて二次加工が認められるが,背面には4面の小さな先行する剝離面を残す。断面は三角形に近い方形で腹面が広い。65 θ を測る。

 $15\sim28$ 、 $30\sim35$ は完形の%ないし%に折損しているものであるが、その推定復原長は小さくとも4cmが最小で10cm以上になるものはまずなく、 $5\sim6cm$ 大にその主体があるものと考えられる。断面は腹面の広い三角形かそれに近い方形のものが大半で、背面と腹面の打撃方向がほぼ同一であるものを摘出すれば先述の $12\cdot13\cdot15\cdot16\cdot21\cdot23\cdot24\cdot27\cdot28\cdot30\cdot31$ が上げられ、打撃が対向するものとしては、 $17\cdot19\cdot25\cdot26\cdot29$ がある。また背面に鋸歯状の調整痕のないものとして $27\cdot28$ が摘出できる。しかし若干の程度の差が認められるとしてもこれ等のナイフ形石器は安定した横剝ぎ技法によって意図的に作出されたものと考えられる。

32~35は細部では多少の差は否めないが,長さと厚さの比率が2~3倍の範囲内に納ま るもので背面にネガティブな剝離面と側縁に鋭い刃を持つもので翼状剝片を加工している ものと考えられ国府型ナイフと見做される。34はその典型で背面の打調は細かく丁寧である。 小型ナイフ形石器(第9図) 43・45・47~54は井島下層や鷲羽山遺跡, 宮田山遺跡等 備讃瀬戸の多くの遺跡に認められる石器類で、柳葉形・切出し形等幾可学形を呈するもの で、小型構剝ナイフを中心としたもので井島I文化期として宮田山型に次ぐものとして編 年されているものである。43は基部を欠くものであるが、これ等の内で最大の長さを持つ。 長3.2cm,幅1.4cmを測る断面三角形の柳葉形を呈するナイフ形石器である。45はペン先形を 呈するもので、全周の%に鋭い縁辺を持つ、長15cm・幅1.2cm、断面はひずんだ台形を呈す る。 基部と側縁の下半部にトリミングが施されている。47は背部が山形を為すように打調 されたもので、先端部と縁辺に樋状剝離が認められ、彫器様の用途が意図されたものだろ うか。48は43と同様柳葉形のものであるが,断面は肉厚の平行四辺形を為し,細部加工は 背面の先端部に集中して行なわれている。49は菱形のもので,底辺の上半部を刃部にする。 断面は鋭い台形状を呈し,長3.2cm・幅14cmを測る。背部の打彫は粗い。51・52は半月形を 呈するもので、51は52の大型品と考えられるもので背部の下半に朽木状の自然面を残すが 打痕は切り取られている。52は長2.4cm・幅1.0cm・高 0.35cmを測る。背部のトリミングは背 面から打調するもので、孤状に細かく施され腹面の主要剝離面は狭くなっている。半月形 細石器とすることができる。45・47~49・51・52は幾可学形に外観を整えているが,それ



第9図 櫃Ⅱ-3-H調査グリッド出土遺物実測図-3

等の素材とされている剝片は横剝ぎ技法によるもので、半月形とした51・52はいづれも翼状剝片の剝離技術を残しているものと考えられる。53・54は2辺に加工を認める切り出し様の刃部を持つものでやはり横剝ぎ剝片を利用している。

55・56は黒曜石製品である。55は基部を欠くがほぼ原形に近いものと思われる。長32cm・幅12cm、断面が台形を呈する小型ブレイドの背をつぶした小型ナイフ形石器であるが、さらに1条の新たな樋状剝離が背部に施されている。56は石刃剝離痕を背面に2面持つ剝片の側縁の1辺を主要剝離面側からブランティングしたバックブレイドである。基部は厚く広い打面を残しているが、さらに細部をトリミングしている。刃縁の2辺ともに非常に細かい刃とぼれが認められる。

その他の石器(第9図,第10図)

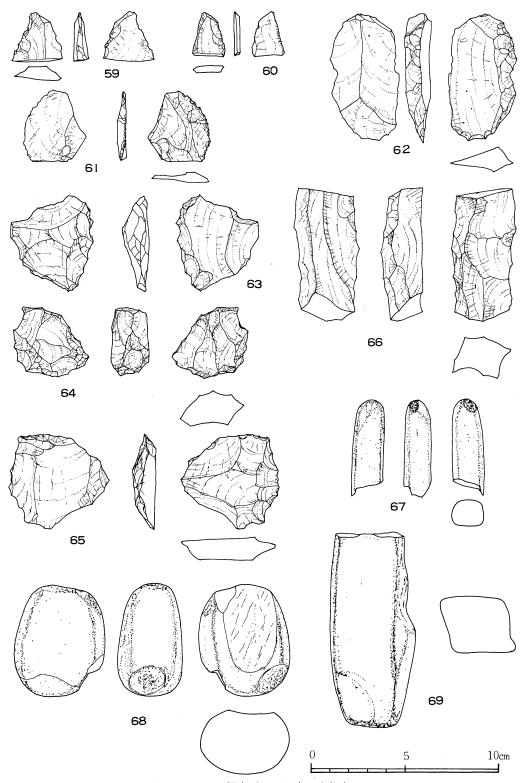
二次加工ある剝片 1部にトリミング等の二次加工を施した剝片は第1層から第2層下層まであまねく存在するが、 $38\cdot40\cdot41\cdot42\cdot44$ は剝片剝離方法に類似点があるもので、40は表側、41は打点側、42は打点側と先端部に細かい打調を認める。また44はナイフ状の形態に刃部を残して周辺が折取られている。 $41\cdot42\cdot44$ の鋭い縁辺には刃こばれが認められる。

削器(61・62・63・65) 61は第1層耕作土中から検出されたもので、最大厚0.5cm・長4cmの非常に薄い削器で曲刃の部分と平坦な他の辺に微細なトリミングを認めるもので、玻璃質の緻密なサヌカイトを用いている。細石器と共伴するものと思われる。62は第2層下層から検出されたもので、長6.7cm・幅3.5cm・厚1.1cmを測る。長側辺の1辺は鋭いエッギを残していて1部に使用痕と思われる刃とばれも認められナイフとすることもできるが、短辺の1方に丸く孤状に調整が施されていること等から削器とした。また側縁の中央部に深い抉りが施されている。63・65は円形削器でともに第2層上層から検出された。63は玻璃質のサヌカイトを母材とした円盤形石核の1辺に背腹両面から調整を施したものである。65は石質変化の激しいもので63と同形同大で5cm前後の大きさであるが調整は片面だけに行なわれている。

彫器(59・60) 59・60は三角形を呈するように下部を折損するが左上方から斜めに樋 状剝離が施されている。59の側縁は左右両辺とも調整が施されているが、60は1側縁のみ に調整が認められる。いづれも横剝ぎ剝片を素材としている。

石錐($57 \cdot 58$) ともに第 2 層上層から検出されたもので、意識的に蝶番剝離状に剝離した横剝ぎ剝片の先端を丸く加工したもので断面は半円形を呈する。57は長41cm・幅1.8cmを測り打面側のみを調整している。58は長3.4cm・幅1.5cmを側るもので打面側、縁辺側両辺にくまなく調整が施され基部は折り取られて作られている。

石核 (66・63) 66は長6.7cm・幅2.7cm・厚2.3cmを測る横剝ぎ剝片の石核で断面は菱形を呈す。実測図右面は調整打面で中央に稜線を為すように長側周辺から調整が施されている。



第10図 櫃II - 3 - H調査グリッド出土遺物実測図-4

左面の中央寄りの左寄りに稜線が認められ、左の主要剝離面は右面の主要剝離面と切り合っている。これ以上の剝離を続けることが出来ないため放棄されたものである。最終剝離痕は階段状剝離になっている左面の右側のものであろう。64は長4cm・最大幅4cm・厚2cmを測るずんぐりとした円形石核で剝離方向面はすべて周縁部から中央に向うものである。調整石核とすることができるが性格は明らかでない。

叩石($67 \cdot 68 \cdot 69$) 67は長 $5 cm \cdot 幅1.5cm \cdot 厚1.4cm$ を測る人差指大の細長い円礫を用いている。先端部の一点に使用痕が集中し、軽く打つもので重量は 18.59 を測る。68は泥岩の円礫で、上下に打痕が認められるが下部の隅に集中的な打痕が認められる。69もやはり泥岩の長さ10cmを測る角柱状の転石で先端部に打痕を残すが、 $67 \cdot 68$ 程顕著でない。

細石刃,細石刃核,その他(第11・12図) 細石核は14点検出された。いづれも玻璃質のサヌカイトを原材としたものである。細石核は第2層上層に5点,第2層下層上半に3点,第2層下層下半に6点と散漫に出土したかのようであるが,その平面的分布を重ねると極めて特徴的な出土状況を呈する。グリッド中央部やや南東寄りの0.5㎡にも満たない極めて狭い範囲のうちに6点が出土し,周辺に4点が散在的に出土した。そして,その側近や周辺から石核の母岩の残片と考えられる調整石核,108・109・111・112・117等数片の細石核再生剝片や母岩から剝出されたものの目的にかなわず捨て去られたと考えられる加工の顕著な剝片113~116他20片近くと叩石68(これは第2層土層上半で細石核の中央部に明らかに共伴の状態で)が限られた1点を取り囲むような状態で出土した。細石器製作の様々な遺物がグリッド中央部に集中的に検出されたのである。

細石核の形状はいくつかのバラエティがあり変化に富むが打面・側面・細石刃剝出面等の 特徴から大まかに4類に分類することができる。

A類(97~99)

打面は長い多角形で周囲から丁寧に打調された調整打面であり、側面および細石刃剝離面の状態はともに円錐形で、打面部と細石刃剝出面の為す角度が65前後であるもので、97・98、やや特異なものであるが99もこのタイプに入る。97は細石刃剝離が短側面の両側から為されていて9条の樋状剝離痕を認める。打面は平坦でなく起伏が激しい。得られる石刃の長さは18㎜・幅は4㎜が最大である。98は打面が横長の5角形を呈し、やはり周囲から打面調整の為された石核である。細石刃剝出面は幅広い短側面に3条認められ打面全周の35%程であるが、長側面の一方にも短い樋状剝離痕3条が認められ、これをも入れると55.2%になり97と外形ともに類似するものになる。右の側面には下部からの二次調整痕が数個認められる。この石核から得られる細石刃は長17㎜・幅5.5㎜のやや幅広の観を呈するものである。99は打面長22㎜に対して高さが著しく低いものであり得られる細石刃の大きさもすこぶる小さいものである。打面はやはり周囲から調整されている。

B類(98) 98—例のみで打面は広く平坦に近く打面形成の主要剝離面を多く残し周辺

からの打面調整は全面積の30%にも及ばない。側面は半円筒形であるが片方は下部から数回の二次調整を施してある。他方の側面は原石から石核を奪取した際の剝離面の一面で二次加工を認めない。細石刃剝出面は短側縁の一方にのみ認められ不整な半円筒形を呈し、最終剝離痕は階段状剝離となっている。他方の短側面は角礫の自然面のままである。

C類(101・103・106) C類としたものは打面が変形した長五角形を呈するもので、その調整も石刃剥出面と長側面の片側だけから粗く打調された程度でA類ほど顕著でない。 $101 \cdot 103 \cdot 106$ ともに細部での変化が多く全体を1くくりにするのは困難であるが、打面の形状と調整の在り方、石刃剝離角の近類性から 1 類型に分類したものである。 101にはさらに別個の石刃剝出面が残されている。実測図の右面左下の部分に 4 条の短かい樋状 剝離痕があり、左面の下部からの大剝離面を打面としたもので、A類の99に近い形状を呈する。 103は石刃剝離面の傾きが検出された10点の細石核のうち最も大なものであり、石刃剝出面の在り方は石刃長とともに D類とするものに近似するものである。 106は細石刃 剝出のかなり進行したものであり、認められる 3 条の剝離痕はともに下半で階段状剝離になっている。長側面の一方に自然面を残す。

石刃剥離 打面 石刃剥出 石刃剥出/ 打面と石刃 打面上 項目 打面長 石刃長 打面全周% 全周 打面調整 長側面観 面 長 面長 面観 番号 痕 数 す角度 み味ある (13+13) 97 15 (13)(5+4) 47 5 5.3 円錐形 (3+3)(20+12)5 5.2 偏円形 58 6.5 23 17 98 長円形 やや丁寧 241 // 99 22 9 54 13 69 4 半円錐形 偏円形 半円錐形 78 20 2 5.6 70 100 (自然面を残す)

2 0.3

2 4.2

231

2 0.0

2 0.0

25.5

3 9.6

3 7.9

101

103

106

102

104

105

109

32

2.3

21

21

21

23

22以上

2 2以上

19

24

2.2

24

18

(5)

4

3

3

3

(4)

6

74

62

52

50

45

55

U158

15

15

12

10

9

14

23

偏五角形

偏四角形

偏五角形

円

長

粗い平坦

//

やや粗い

/ (自然証を残す)

65

60

60

70 楔 形

115

85

92

75

半舟底状

(息然頃₎

")

細石核の観察

重量

3.2

4.8

2.6

12.8

8.8

4.5

3.4

5.7

3.4

3.7

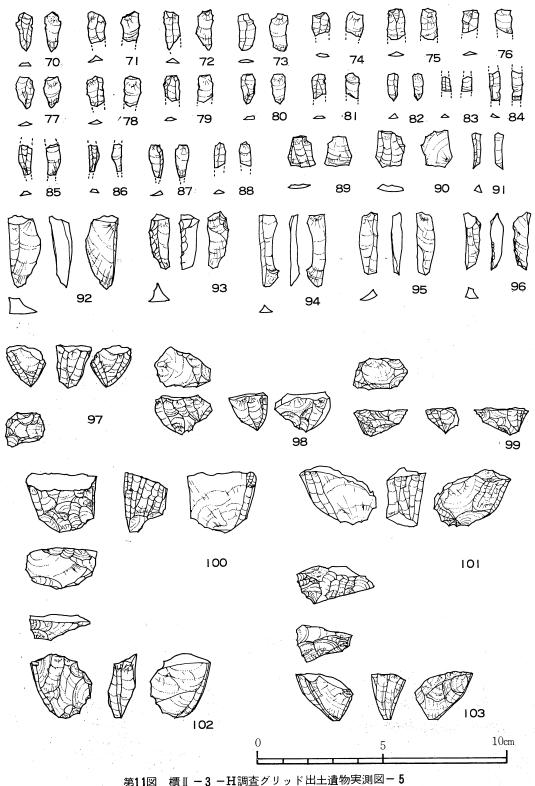
半円筒形

長逆台形

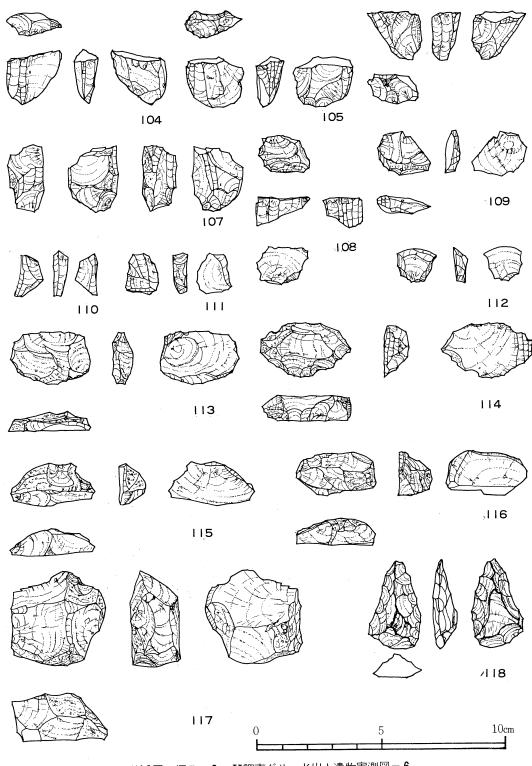
形

楔

D類(102・104・105) Dタイプとした細石核の顕著な特徴は打面の作成と石刃剝出面に表れる。打面の調整は石刃剝出面と側面の一方の両面から行なわれるが粗く簡便なものである。打面の上面プランはいづれも楔形に形成されていてその先端は尖り気味である。石刃剝出面は打面と同様楔形を呈し、石刃の樋状剝離は全搬に長く稜が整ったものになるが3条前後で多くとも5条を数えるだけで石刃剝出面の打点部分の長さは10㎜前後の非常に狭いものとなり、打面全周の20~25%以内に納まる。側面の調整は簡易なもので上方向からの軽易な調整痕を認めるだけで、104のごとく自然礫の表面をそのまま側面とし



第11図 櫃Ⅱ -3 -H調査グリッド出土遺物実測図-5



第12図 櫃Ⅱ-3-H調査グリッド出土遺物実測図-6

ているものさえある。側面の形態は船底形に近いものであり福井 2 ・ 3 層の細石核に類似する点がある。石核形成に於いて効率の高い製作体系の確立があったものと考えられる。

その他の細石核(107・110) 107は細石刃剝出痕のような樋状剝離痕が4条認められるものであるが、ともに実測図右面の水平方向からの石核再生のニュアンスの強い1回の打撃によって打点部分が除去されている。いづれにしても細石核調整の初期の段階に属するものと考えられ最終段階では106のタイプの石核になる可能性があると思われる。110は石刃剝出面の長さ19mmを測る側面が台形状の残核であるが、打面はD類とした石核群のように傾きがあり、上面形が楔形を呈するものである。その他に図示出来なかったものも3点程あるがともに15mm前後を測る小石核である。

石核再生剝片(89・90・108・109・111・112) 石核再生剝片は図示したものの他に1例検出され7点を数えるが樋状剝離面に対して水平に剝離されたものと側面から直交して打たれたものの2種類がある。108は打面全周58mm,石刃剝出面23mmを測る円筒形もしくは半円錐形の細石核の上端部を側面から水平切りしたもので樋状剝離痕を6条認める。109は旧打面部の全周58mmに対し5本の樋状剝離痕を残すもので,石刃剝出面の割合は37.9%でA類としたものに近い比率を得るが打面の調整は進んでおらず自然面を20%程残す。現在する上面形は長円形である。108・109は櫃Ⅱ-3-H出土の細石核のうちではA類に近い形状を呈するが,打面上面形が長円形であることや石刃剝出面と打面の角度が大きいこと等から,むしろ櫃Ⅱ-2-Cで出土した半円錐形の細石核と繋りが深いと考えられる。111・112はともに樋状剝離痕のある細石刃剝出面に対して横方向から剝出されたものである。第11図、89・90は背面に3条ないし4条の樋状剝離を数えるもので、89の腹面の剝離方向が樋状剝離方向と同方向であるのに対し、90は斜下方からの剝離痕が認められるもので、89は細石刃の剝離ミスと考えられるが,後者は厚みもあり細石核再生剝片であり,細石刃剝出面を再生したものと推定される。

細石核製作と関連する剝片(113~117) これらは別項で述べた細石核製作に関連するサヌカイト製剝片石核で、細石核作出の第1工程に於いて原石サヌカイト角礫から打ち出されたものである。117は長幅ともに4cm前後、厚2cmの角礫残片であるが実測図中央の調整された平坦面を打面として表裏の大剝離面が剝出され、次いで各方向からの剝離が為されている注目すべきものである。113・115・116はいづれも背面に自然面を残すものである。113・115はそれが剝出される以前の先行する不定方向の剝離痕が認められるものである。116は腹面の剝離作業によって作出された後、更に二次的加工が施されたものである。114はこの剝片の作出に先行する主要剝離面を背面の中央部に残すもので、さらに剝片剝出の腹面から背面の中央に向って同辺が二次加工されている。これ等の残片は細石核素材を1個のサヌカイト角礫から作出して行く過程を明らかにするための貴重な遺物で、他に顕著な剝片だけを取り出しても背面、腹面の主要剝離痕が平行するもの5片、

直交ないし斜交するもの 4 片、剝片作出後分割されているもの 4 片、分割の際に打ち剝がされたスポール 2 片、背面の全体を礫面とするもの 4 片が数え上げられる。また、107の例のごとき段階には達していないものの僅かの二次調整を加えるだけで、細石核となる資料が 3 点数えられる。

細石刃(70~96) 細石刃は50点余り出土した。石核や石核調整にかかる剝片の出土量からすれば、少なすぎる観がするが、充分な注意のもとで精査した結果である。これ等の細石刃は長12~25㎜・幅25~ 7㎜・厚1~25㎜の中に入るもので、長15~20㎜・幅4㎜・厚15㎜前後のものが標準的なサイズである。形状はやや不揃いで、平行する稜と縁辺を持つものは数少なく、大半のものが断面三角形を呈し、2稜以上持つものは稀である。出土した細石刃の中で全形をとどめるものは図示した70・73・77・80・82・87だけでこれ等に共通する特徴は両側縁が平行せず長さが短かく、先端部が急に幅狭になるというところにあり、細石刃としては劣悪なものとすることもできる。折断されているものが大半であるが打面側を折断するものは少なく先端部を切断する例が多い。石材は玻璃質のサヌカイトである。

細石刃と関連する剝片($93\sim96$) この櫃II-3-Hグリッドより検出されたこの項でまとめている石器は細石刃よりは長・幅・厚のいづれを取っても2まわり大きいものばかりであり、背面や腹面の一部に樋状剝離痕の他に別方向の小剝離痕を認める $93\cdot96$ 、腹面が内彎する $93\cdot96$ という特徴が認められるものである。こうした特性を示す石器群は細石核から石刃を連続して剝離する前段階に於いて、その剝出面を整えるために意図的に打ち出されたものと考えられている。また、96のように二次的に微細な調整痕が認められることが多いため他の石器に転用されたと考えるむきもあるようだが、接合資料が得られない限り、可能性をあげておいて今後の調査に期待すべきである。92は玻璃質のサヌカイトを原材とするもので小石刃剝離に近い状態に剝離されたもので、或いは 図版にだけ掲載した一群と関係あるものと考えることもできる。しかし、小石刃文化の存否は限られた範囲、この調査区だけからは断定的なことは言えないが、別項でふれた黒曜石製のナイフが小石刃を素材としていること等からこの種の石器が存する可能性があることを付記しておく。

ポイント(第12図, 118) 変形気味の三角形を呈する長3.6cm・幅2.1cm・厚0.8cmを測り、断面が三角形に近いものである。同類のものは高知県不動岩屋洞発見の大型二等辺三角形石鏃として報告されているものと類似するが、その断面形が薄い杏仁形であるのに対して事例は肉厚のやや不整な三角形状を呈する点で問題があるものの、石鏃とせずにポイントとしたものである。素材には流理の粗いサヌカイト片を用いて虫喰い状の自然面を僅かに残している。実測図右の主要剝離面を¼程残すやや平坦な面と左側の山形に肥厚する面はともに左右の側辺と底辺から中央部に向けて行なう調整剝離によって細部が形成されているが、左面の方が剝離が緻密である。

まとめ

(1) 石器群の出土状況について

櫃II-3調査地点は櫃石島のほぼ中央部にあたる標高56m前後の花崗岩を母岩とする丘陵状尾根の基部に立地する。尾根の基部は幅が約20m・長さ約40mの比較的広い平坦地形を為していて,ここからは櫃石島北端の「かいとく鼻」や「鳶ノ巣」や櫃III-2調査区,さらに王子神社を経て宮崎鼻のいづれにも尾根づたいに容易に往来することができ要地である。

この調査地点では、10グリッド54㎡の試掘調査を実施して、サヌカイトを原石とする縦長剝片・翼状剝片・横長剝片・ナイフ形石器・小型ナイフ形石器・幾可学形石器・小石刃・削器・彫器・石錐・ポイント・細石刃・細石核再生剝片・石核・細石核・性格不明の土器片が無数の剝片、砕片の中から検出された。また、他に二次加工の施された性格不明の石器片も数片認められた。櫃II-3-H調査グリッドに於いてはこれ等の石器群の大半が重層して検出された。それ等の出土状況は先述したとおりであるが、資料の整理が進んでゆくにつれて、尾根上に立地することや畑地耕作のために旧石器時代の遺物・遺構の大半が破壊されていて、層位的な出土状況やまとまりのある分布状況は期待できないと半ば諦めていた想念が覆されていった。小範囲の調査に限られているためなお問題は残るものの、次のような層序と遺物分布状況をみた。

出土遺物の層位ごとの内訳は表示したとおりであるが、北から南西寄りに傾斜する地形を勘案してみるに、畑作の遺物の撹乱は第2層下層以下には及んでおらず、地形が高いためにいくらかは深く掘り起こされた部分があるにせよ、この地点での遺物の分布は比較的良好な状態であるものと考えられ、ナイフ形石器と翼状剝片は第2層下層上半下半ともに出土したが、グリッド北東寄りにその分布の中心があり、小型ナイフ形石器(一部には美事な幾可学形に整形されたものもある)や小石刃とともに検出されたが、断面図に図示したとおり全体的にみればナイフ形石器・翼状剝片はそれらより下位に第3層と密接して分布し、その数もはるかに多い。これらの一群に混じって縦長剝片石核・縦長剝片・削器・彫器が検出された。小型ナイフ形石器は小石刃、二次加工ある剝片の一部とともにやはり第2層下層上半と第2層下層下半に出土した。第2層上層に於いては細石刃と混合した状況で検出されたが第2層下層に至ってはこれ等の石器は数少ないがやはり北東寄りに分布の中心を持ち、細石刃の出土が稀になり明らかに層序を分かち、むしろナイフ形石器に接触するような状況であった。細石刃関係遺物の出土は第2層上層ではグリッド北東半を除いて全域に分布するが第2層下層上半以下に於いてはその分布はグリッド中央東寄りに集中し、細石核・細石核再生剝片・細石核素材の分布が顕著となる。

第1層と第2層の1部の遺物出土状況は明らかに後世の撹乱であり、断面図からこの第 1層と第2層の出土遺物を消去し、東北から東西に傾く地形を勘案して、第3層の上面の ラインを投影すると、まとまりの良い出土状態が明らかになる。ナイフ形石器の分布域はグリッド北半に片寄り、その上面に密着して小型ナイフ形石器が重なり、さらにその上部に細石刃関係石器群が被さるという整然とした垂直分布状況が複原される。こうした分布状況は夫々の他の遺跡に於ける編年体系に矛盾することなく、整然としているばかりでなく、夫々特徴的な文化期のまとまりをユニットとして把え、各ユニット群が時期を隔てて重合していると考察することが出来る。また、普通こうしたユニットは数m前後の規模を持ち、限られた立地条件のもとに関連する他のユニットとともに特定のまとまりを示す状態で所在すると指摘されていることから、櫃II-3調査区一帯にはこうしたユニット群の存在が予期され、同じ島内の旧石器時代の遺跡の在り方と、関係を持つものか重大な問題が今後実施される本調査の課題として残されたのである。

(2) ナイフ形石器と縦長剝片などについて

断面が三角形を呈するナイフ形石器は従来宮田山型と名称され国府型ナイフに後続する ものとされて来たのであるが、奈良県と大阪府にまたがる二上山の集中的な踏査等の新た な成果が蓄積され、宮田山型とされているもののうち、柳葉形を為し、鋭い縁辺を刃部と し、背部を打調したもの(紡錐形、半月形とも述べられる)は先項で触れたように、国府 型ナイフの1タイプに入るものと考えられるのではないかという意見が提出された。また 瀬戸内技法による石器群の出土する遺跡からは縦長剝片の出土例が多くナイフとして二次 加工されているものが認められるという意見も出されている。本調査地に於いて第2層下 層から翼状剝片折損品とナイフ形石器、縦長剝片が検出された。翼状剝片石核は出土しな かったものの第2層上層と第2層下層上半から縦長剝片の石核が夫々1点づつ検出され, その石核にみる剝片剝出痕が長 $3\sim 4\,cm$ ・幅 $13\sim 2\,cm$ を測り、本遺跡出土の小型品がこれ とほぼ同大であり、石目の構造と自然面の風化状況が類似することから、本遺跡に於いて 縦長剝片が製作されたと考えられ翼状剝片など瀬戸内技法による石器とが共時的に存する 可能性が認められる。ナイフ形石器のうち背面にネガティブな剝離面を持つものは国府型 ナイフの典型とされてきたもので本遺跡に於いても数こそ少ないが(全体の20%),柳葉 形のナイフ形石器と伴出している。ナイフ形石器の項で述べたように長さ4~1*0cm*大を測 るそれ等の柳葉形を呈するナイフ形石器の内訳は@打点が対向するもの 5 点, ®打面が同 ─線上にあるもの10点,ⓒ 打 面が 背部 にある が 必ずしも同─線上ではないもの2点, ④打面が背面中にあるがリングの大きさの異るもの1点,と4類に分類できるが、打面側 から縁辺までを幅とし背部の厚さとを比較し幅/厚を取ると, b 類のものは1.5~2倍のう ちにその主体があるのに対し, a 類のものは1.5~2.5倍の間にばらつき,数少ない c 類は 2 倍前後、1点しか出土しないd類は25倍となり、それらのいづれもが1.5~3倍の範囲に入 るという結果を得、これ等の石器がかなり安定した制作技法に依るものと見為すことがで きる。打点の対向するもののうち内彎刃のものが「ふたがみ」に指摘があるように翼状剥 片の底面がネガティブなものであるとすれば a 群との関係が理解でき,また26のごとく底辺にあたる部分に 3 面以上の剝離面を持つものは底辺の再生が一度ならず実施された結果とすればやはり a 群との関連が理解でき a 類の亜流とされ,まとまりのある a 類を国府型ナイフとすることが可能であるならばその他のものが,従来国府型ナイフとされてきたものと,新たに国府型とした a 類とのうちに包摂されることになる。さらに従来国府型ナイフとしたものは背部のトリミングが紡錐形のものより少ないのは自明の理と考えられ,厚みのある翼状剝片の底面部を残すだけに加工したものが $a \sim d$ 類のナイフ形石器を作の素材とされたと考え,比較的薄く剝離することの出来た翼状剝片が本遺跡に於いては狭い意味の国府型ナイフに加工されたと考えることができる。

ここで先の項で横剝剝片の石核とした石核66(第10図)が問題になるのであるが、この 石核は先述したとおり最終剝離が階段状剝離となり廃棄されたものであるとともにこれ以 上の剝片の採取は不可能である最終形態であり,その最終剝離面の法量が長2.4cm・幅 7 cm になり、本遺跡に於けるナイフ形石器の主体を占める石器群の法量と矛盾する点がなく、 やや異形といった観を呈するこの石核をこれ等のナイフ形石器の石核と見做すことができ る。この石核の形態的特徴をさらに細かく観察すれば、背面の中央の稜線部分は左右の側 縁からする同規模のやや細かい剝離痕によって形成されたものであるが、自然面と考えら れる一面を残していることに気付く。また、石核の短側辺はともに菱形に近い平行四辺形 を呈するが、一方の短側辺は背面の稜線上から小口切りされている。さて、こうした石核 を翼状剝片採出のための定型的な調整石核とすることができるか否かが問題となるのであ るが「ふたがみ」によれば同一打面に2枚の翼状剝片剝離痕があるもの、相対する二辺か ら剝片が剝出されているもの、同一剝離面の上下から打撃している、錯向状の剝離痕が認 められるもの,さらに打面転移の認められているものが特異な例として示されている。ま た,倉敷考古館研究集報4の「香川県坂出市櫃石島採集の石器」に図示された打面と剝離 面が交替するもの、石核の上下両方向から剝取したものとされるやや不定型な石核や同集 報 6 「鷲羽山採集の石器と土器」に図示される,同類型の石核がナイフ形石器の石核として 示されている。本遺跡発見の石核がどのものと深く関連するかが問題であるが、全体的な 印象や外形は同じ備讃瀬戸の鷲羽山,櫃石島の例の方に近似した外形を示すため,不定形 横剝石核とすることができる。しかし,本遺跡出土の石核は明らかに打面調整と考えられ る同規模のやや小さい調整剝離を腹面の2個の大剝離痕の打点側に認めることが出来るた め実見して比較した結果によるものではないが、やや不規則な他の備讃瀬戸の石核類より は,より整えられた石核とすることが出来る。また,先に引用した「ふたがみ」の翼状剝 離石核でも9㎝前後の法量を測る小型の類型に入るもののうちにはかなり剥片剝離の進行 したものには本例と類似した外形を呈するものがあり、それ等小型類型に入る一群との関 連も全く否定されるものでなく、特に相対する2辺から剝片が剝離されるもの等やや特異

な例等に於いては、備讃瀬戸の不定型石核とされてきたものとの類似性が高いものと言う こともできるのではないかと思われる。

瀬戸内技法をいま仮りに翼状剝片剝出の前段階に於ける盤状剝片作出,盤状剝片から翼状剝片石核の調整という段階までの広いものにその範疇の内包を拡大すると,翼状剝片石核と備讃瀬戸の不定型石核はかなり親近性を持つものとなるのではないか。つまり,同一線上を打点として剝片剝離が進行する典型的な瀬戸内技法と,それ以外に認められる変質的な剝片剝離の為されたものとの差位が残るだけである。二上山に於いては石核が未だ剝片剝離の充分可能な段階に於いて廃棄されていることが多いこと,盤状剝片の11~15cm大のやや大きいもののブランクが認められること,翼状剝片の類型に最大幅の長さに優る一群の存すること等の翼状剝片素材の盤状剝片や翼状剝片石核のバラエティと備讃瀬戸の諸遺跡に認められる不定型石核の中に問題がいまなお残されているように考えられる。

例えば、翼状剝片石核からの翼状剝片剝出がもはやこれ以上できない最終段階に達したものの形態、翼状剝片石核を翼状剝片から作出する過程に於ける半割および翼状剝片石核として選択される部位とその他の切り捨てが可能性としてあること、翼状剝片石核から翼状剝片作出過程の中程に於いて打面の転回が可能性として残ること等であり、これ等の可能性と、サヌカイト原産地に於ける素材となる大型剝片と石核の形状や出土状況と、それを搬出し使用する原石産地と距離を持つ一般的遺跡に於けるそれ等の形状・出土状況は変化を持つのではないかという問題の相関をあげることができる。櫃石島・鷲羽山・宮田山・井島等備讃瀬戸に面する遺跡は、サヌカイトを産出する、国府台・坂出市金山・同城山等の遺跡と一定の隔たりを持っていて、それ等の問題を考慮に入れなければならない遺跡である。

櫃II-2-H出土の問題の石核がかなりまとまりのあるナイフ形石器の石核であることが正しいとすれば,この石核は,同質的なこれ等の石器を整然と剝出した石核であり,先述の翼状剝片石核の諸問題と考え合せれば,この石核を翼状剥片石核の最終段階のもので,もはやこれ以上剝片奪取が不可能であるまで,徹底的に剝片が剝出されたものであるとすることができる。そしてこれ等櫃II-2-H出土のナイフ形石器の主体を為す石器の断面が多少の差はあるがおおよそ三角形を呈し, $4\sim6\,cm$ 大の長さを測るというまとまりのよいナイフ形石器の所在により,従来宮田山型とされて来たものと国府型ナイフとの隔障が取り除かれることになるのである。

断面形が菱形に近い平行四辺形を呈する本地点出土の石核と類似するものを先述の鷲羽 山採集のものや同櫃石島内採集品の中にかなり見い出すことができることから、必ずしも これ等の石核を不定型石核として宮田山型ナイフの全てを不定型としているのは問題で、 少なくとも半円形(紡錐形・柳葉形)として分類されたものは定型的なナイフ形とするこ とができ、狭い意味の国府型ナイフとの親近性が強く、国府型ナイフを4類に分類する「 ふたがみしの分類に従うならばこれをも国府型ナイフとすることが出来るのである。

ここで、本報告に於いてなお多くの問題の残ることは否めないが、広く瀬戸内技法のナイフ形石器とされるものを出土する2つの遺跡を対比して、国府型ナイフと、かなり変化に富む宮田山型ナイフの差は原産地を中心とした2つの分布域の地域差とすることができるのではないかという事を提案しておきたい。また、本地点に於いて定型的なまとまりを呈して出土したナイフ形石器の大半が⅓または½に折損して出土したことは、やはり他遺跡に於いて指摘されるように問題であり、意図的に折断が為され、その残部が遺跡外へ伴出された可能性が大きいことの結果と指摘することもできる。1点ではあるが7.7cmを測り先端断面が三角形に近い方形を呈する横剝剝片の基部と先端に近い1部分をトリミングして成形された横剝ナイフ形石器は、他の半月形を呈するナイフ形石器とその性格が明らかに異なり、最近指摘されているようにナイフ状ポイントとすることが出来、東日本地域に於ける類似の加工の認められるものとの関連があると推測される。

(3) 細石核とそれに関連する問題について

本地点に於いて検出された細石核は、先述したように4類に分類できるが、さらに視点を変えることによって多くの問題が浮き彫りにされ、細石刃文化の類型や空間的、時間的問題と深く連結するものであることが明らかになる。

打面の調整と細石核の外形との繋がりについてみるならば、調整のゆきとどいたA類の ものは打面の側面観が円錐形,もしくは半円錐形を呈し,打面部は水平的であり, B 類は 打面調整こそ大まかであるが、その側面観はA類に余りかけ離れることのない半円錐形を 呈し、打面部は同様に平坦で水平であり、C、D類とは大きく異っている。C、D類とし たものについては同様の観点から観察を試みてみると、D類はいづれの打面も僅かな調整 だけによるもので、その上面形は打面と剝離面の為す角度のバラつきにもかかわらず背幅 の狭い楔形を為し、先端部に狭い側面を持つことは決してないのに対しC類は同様に打 面調整が粗く上面形が楔形に近い形状を呈するものの、その楔形の先端部にあたる部分に は短側面を有し、D類との間に若干の変化する点がある。しかし、C、D類の細石刃剝出 面をみるならば、ともに数少ない樋状剝離痕を認め、長側面の外形が舟底状を呈すること や、打面全周に対する細石刃剝出面の打点部長の比率がいづれも光~¼の範囲にほぼ納ま ることなど類似点が多く、A、B類と大きく変化している。また、これ等の細石核の出土 状況を比較すると、A類(B類を含めて)は細石核再生剝片、細石核の作成に関連する剝 片類の分布は中心の長径70cm前後の長円形を呈する範囲内から出土したのに対し, D類・ C類はその範囲内に重なるものも認められるが、南東、南西に飛散して検出されるという 出土状況であり、A・B類がほぼ同一時期に於いて同一地点で細石刃を剝出している可能 性を示すのに対し、C・D類はその可能性に疑いを持つことを否定するような在り方では 出土しなかった。

以上指摘したような変化と同似性が $A \cdot B$ 類、 $C \cdot D$ 類に観取されたのであるが、使用された石材、剥出された細石刃長(樋状剝離痕の長さ)に於いては余り変化することなく、ともに例外を除いて玻璃質の結晶の緻密なサヌカイトを用い、長 $17mm \sim 24mm$ の範囲にはいるやや短い石刃を得たものとすることが出来る。サヌカイト角礫を素材とするところからくる石刃の長さに対する制約が厳然としたものであったことは否めない。

さて、こうして大略2類型、細分してA・B・C・Dの4類に分類することのできる 細石核群と細石核再生剥片,細石核の祖型作出を作出する過程の剝片類との関連に於いて 本地点の細石器文化をみてみると、検出されたいづれの細石核再生剥片もC・D類に入る 可能性が少なく、A·B類型に属するものと判明する一方、やや詳細に紹介した細石核に 関連する剥片類はむしろC・D類の細石核群と関係することが明らかになり両大類型の間 『に細石刃製作に於いて,かなり隔りのあることが判然となってくるのである。細石核再生 剝片(108・109)は半円錐形を呈する細石核B類(100)に近似し,A類・B類が併存 する遺跡の認められることから、B類の細石核からの細石刃奪取が進行する過程に於いて 108・109のような打面に平行して打面を取り去った細石核再生剝片や90・111・112の ような樋状剝離面を取り去った細石核再生剝片がそれぞれ必要に応じて除去されていき。 A類のごとき小型の円錐形を呈する石核が最終的に残されることになるのではないかと推 測される。一方細石核に関連する剝片としたものには側面形が舟底状を呈するC・D類と 関連の深いものが数多くあげることができる。これ等の剝片の種類は千差万別であるが、 先述したような数類に簡約でき、それ等がかなり密接に関連していることが、接合例をみ ない現段階に於いても指摘できる。そこでやや早計であるが、C・D類の細石核の祖型の 形成過程を復原すると次のようになる。

①、117にみるように玻璃質の径数cm前後のサヌカイト自然礫を原材に求め、不整形な 突出部等を任意な方向から打ち取り、外観が球形に近いものを作り出す。②、面取りによって打撃面を得る場合とそうでない場合の差が考えられるが、117について復原すれば、全体の場前後の長さを横から水平切りして広い打面を形成する。③、この打面から厚さ 1 cm~1.5cm大の舌状の剥片を剥出する。この剥出は打面を反対側に転移して続行される。④、③の段階の後円礫は底面及び側面の一部に自然面を残す不整な多面体になるが、再度突起する部分を打ち欠き形を整え、前の①に於けるようにもはや自然面を多く残すものは認められなくなる。求める細石核の祖型の理念にかなう部位を選定し、その第 2 段階の多面体を打割する。⑤、不要な細部を打ち取り素材を調整する。⑥、打面を平坦に調整するがさほど丁寧に行うものではない。⑦、打割された残部がさらに意にかなうものであるときにはさらに周辺を切り最終段階の素材を形成する。大略の階梯を推定したが、③段階以後、異なる 2 方向への過程が展開されるが、得られる細石核はその側面形が舟底状を呈しその上面観は概、楔形を呈するものが意図されているようである。③の段階によって得られた

舌状を呈する長円形に近い準備された礫の表面部から得た素材剝片は側辺の片面に自然面をかなり残し,裏面は剝離の際の1回の剝離面だけであることさえある。⑧,さらにこの剥片は半割され,打面が形成される。④段階以後に於ける石核形成に於いて,②で得た打面から③に於けると同様に輪切状に打ち出す場合と②の打面に平行するように次の剝離が行なわれる場合の2例があり,接合によらなければこれ以後の過程の推測は困難であるが以後⑤,⑥,⑦の階梯が踏まれるものと考えられる。

②の打面形成後,縦割に打割してそれをさらに上下に半割することによって得られた最終素材の打面部を調整して作り出されたものがD類,⑦のような段階を経て作出された細石核がC類であると考えられる。 $C \cdot D$ 類に於ける長側面や打面上面観にみられる共通性はこのように同一素材から 2 種類の工程を経て同一時期に於いて作出された兄弟関係にあるという仮定によってかなり 明解 に理解でき,接合資料を得ない段階に於いてではあるが,こうした細石核の製作体系が考えられることを紹介しておきたい。 さらに,このような製作体系による $C \cdot D$ 類の石核形成に於いてこそ先述した細石刃スポールや細石核製作と関連する剥片の様々な形態が理解されることになるのである。 なお,このような製作体系によって得られる細石核の数は 1 個の数cm大の自然礫から,少なくとも数個,多ければ 1 0個以上が数えられ,驚異に値する製作技術としなければならない。

(4) 石器の編年的な問題について

(1)(2)(3)に於いて櫃石島中央部に位置する本地点によって明らかになった石器の出土状況 やナイフ形石器・細石核製作の問題についてやや性急な感はあるものの,気付かれる諸々 の問題点を略述し、本遺跡の性格の一端を明らかにしたが、これ等の複合する各石器の編 年上の問題と、分布地域の問題について気付いた点を記す。本地点に於いては縦長剝片・ ナイフ形石器・小型ナイフ形石器(幾可学形に近いものを含めて)・小型 石刃・円錐形な いし半円錐形細石核・半舟底状ないし舟底状細石核がまとまりを持つ状況で出土し,夫々 の石器文化のユニットが重複して所在するのである。その他に、掻器・彫器・石錐・最古 段階の土器を伴出する尖頭器、二次加工ある剥片等も出土し、それ等各期の石器文化との 関連も問題になる。ナイフ形石器の編年は国府型から宮田山型,井島I型が大綱として立 てられているようであるが、最近、国府型ナイフと宮田山型ナイフの編年上の問題につい て必ずしも前後関係にあるものではなくて、同時期にあるのではないかという意見が提出 され、新たな波紋を呼んでいる。本地点に於いても翼状剝片と狭義の国府型ナイフととも に半月形(紡錘形)のナイフ形石器が検出されて共時態であることが明らかになり,さら にそれ等定型的ともいえる半月形のナイフ形石器の石核と瀬戸内技法の問題との絡みから、 宮田山型とされて来たもののうち、この半月形の石器は「ふたがみ」にあるように国府型 ナイフの一類型に含まれる可能性が大であると考察した。しかし,備讃瀬戸の諸遺跡の宮 田山型ナイフの中の背部のトリミングのある石器についても,必ずしも底辺が大きな1回

だけの剝離によるものでないかなり不整形なナイフ形石器や,打調が主要剝離面の打点側 のみならず、先端部、さらに刃部に及ぶものもあり問題は残るようである。例えば「香川 県坂出市櫃石島採集の石器」や「鷲羽山採集の石器と土器」に於けるものの中にも井島I 型の小型ナイフに相似する2辺にトリミングのある石器や切り出し状の石器・縦長剝片を 素材とするもの等がむしろ主体と為すような状態で,不定型なる石核とともに出土してい る。仮りに(2)に於いて先述したようにそれ等の石器の大半が必ずしも不整型でなく,石核 にも断面が菱形に近い平行四辺形のもののようにまとまりのあるものがあること等から. それ等を瀬戸内技法による国府型ナイフの一類型であるとしても、未だ問題が残るのであ る。大阪府に於ける調査に於いては、国府型ナイフと宮田山型ナイフ(塚原型とされる) の層位的序列は得られないが分布域は後者の例が2例と数少ないものの,かなり異なるこ とが指摘されていること等から国府型ナイフと宮田山型ナイフが同時期のものであったと するにも問題があるのだが、本地点に於いては、国府型ナイフと従来宮田山型としていた 半月形ナイフとの間に年代的な隔りを認めることは不可能であることを指摘し、むしろ地 域的な変化であることと考えられることを記しておきたい。しかし,国府型ナイフとみな した本地点の半月形ナイフや本地点出土の国府型ナイフはともに $3 \sim 6 cm$ 前後の小型品で あるため、逆に国府型ナイフから宮田山型ナイフの変化を推考しうる余地もあり、即断を 許さないような現状であるとも言える。

井島 I 型に属するナイフ形石器は国府型ナイフとした半月形(紡錘形)ナイフの分布に重なるような状況で検出された。櫃II-3-Hに於いて小型ナイフ形石器としたものの中にはかなり整った菱形,半月形を呈する小形ナイフもみられ,これ等の幾可学形に近い石器文化の祖源が備讃瀬戸内部に求められるのか或いはそれ以上に広範な地域が求められなけれがならないのかが問題となるが数少ない出土例しかみない現段階に於いては何とも言いようが無い。その他の小型ナイフは小型柳葉形を為すものや切り出し状のもの,ペン先形のもの等があり概,井島 I 文化と同一であり,出土状態に於いて先述のナイフ形石器と密着するものの明らかに I 時期に割することが出来ると言ってさしつかえない。また,井島 I 文化期に入る石器群と国府型ナイフの一類型に入るとしたナイフ形石器の分布範囲の相重なることから,前者と後者の間に余り長期間の年代差を置くことはできないとしなければならない。

また第9図38・40・41・42・44に示した二次加工ある剥片は横剝剝片を切断したものと考えられ、トリミングなり切断によって作出された背部の反対側の縁辺には使用による欠損と考えられる刃とぼれが認められる。これ等は備讃瀬戸の遺跡群からは未発見であるが、台形様石器としてさしつかえなく、九州諸地域(宮崎県船野、佐賀県馬渡島切立、長崎県堂崎、福岡県諸岡、長崎県百花台等)の遺跡群との深い関連が問題になる。ナイフ形石器から細石刃文化への変遷過程に於ける重大な問題点とされて、その伴出品や形状等について

の研究が進行しているが、本遺跡に於ける出土状況はナイフ形石器(国府型、井島型)との繋がりを示しているようであるが後者の文化期に属する可能性も否定し去ることも出来ない。用様にその組み合せが問題となる石器として黒曜石製の石刃を加工したナイフ(バックブレイド)と石刃の基部周辺をトリミングした石器がある。これ等は小形石刃とされているものを素材としていて、四国にはその産地の見い出せない黒曜石を石材としていることからも明らかに九州地域との関連が考えられる。百花台№層文化や鹿児島県上場遺跡、熊本県石飛分校、佐賀県原等の文化層との関連が考えられ、長崎県福井7層や上場に認められる横剝ぎに近い剥片とも関連し、瀬戸内遺跡群の石器文化と九州諸地域の石器文化の細石器文化以前の深い繋りを台形様石器とともに示すのである。この黒曜石製の石刃と出土状況に於いて最も関連するのは、前携の台形様石器とした二次加工ある剥片であるが、井島よ文化にこの台形様石器を介して繋るものと考えられる。

削器・彫器および石**錐**はナイフ形石器の2類型のいづれかに属するものであるが、その分布状況からみるにそのいづれにも組み込むことが可能であるため、現段階に於いては判断を保留しておかざるを得ない。

ついで問題になるのは細石刃文化であるが,櫃 $\Pi-3$ H調査地点に於いては, $A\sim D$ 類の4類の細石核が検出された。また,それ等とどのように関連するか明らかでない小型の細石核も検出された。従来備讃瀬戸に於いて紹介されている細石核の類型は玉野市出崎の半円錐形を呈する細石核,井島・鷲羽山の半舟底状の細石核(石刃剥出面は一辺のみ,或いは板状細石核と呼ばれるもの),小形の不整型な細石核の三種類である。

A類は円錐形の外形を呈する細石核で2辺に打面全周の55%を占める細石刃剥離面を持ち、半円錐形を呈する出崎出土のものとはやや様相を異にする。むしろ九州地方の出土例や(野岳、原、唐津周辺遺跡)、はるか離れた中部地域の長野県矢出川遺跡のものに類似する。B類は長側面裏側が一回の剝離によるままで調整をみず、打面が平坦なもので打面調整痕は全体の¼程の半円錐形を呈する石核で下部から長側面に対する調整が顕著である。福井4層と類似するが、同例のものは原、さらに矢出川に於いて見い出される。なお鷲羽山上層出土の板状細石核とも関連があるとも言えるが定かでない。C類は樋状剝離痕の少ないもので打面は下傾気味のもので、D類とも深い近親性を持つものである。類似する形態の石核は、板状細石核とされた備讃瀬戸の各地域の石核と類似するとともに九州(百花台、原、上場、門田、諸岡、唐津周辺遺跡)の半舟底形石核と呼ばれるものに酷似する。D類は準備された石核を縦割に分割してできる舌状の偏円形の素材を半割して製作されたもので、細石刃剝出面と打面全周の比が20~25%に入るものであり、福井2、3層に於けるに変らぬ整然とした技法によるもので細石刃剝出の効率の最も高いものと考えられる。

以上、 $A \sim D$ 類の各細石核の類型を再述し、それ等と他遺跡に於ける細石刃文化との関連をみてきたのであるが、 $A \sim D$ 類への変化は石核製作の単純化と、細石刃剝出の能率化

をその背後に感じさせるものがあり、それ等の変遷過程が他遺跡の層位的発掘事例によって推測されはするが、本調査地点に於いては相互に密接して重複した状況で出土したため明らかにすることは出来ない。ただ、円錐形および半円錐形を呈するA・B類と、半舟底状、舟底状を呈するC・D類は明らかに技法的な差が認められると共に、前二者の出土状況と後二者の出土状況が重合するにしても、相異なることによって若干の時期差を予測することも可能であると言い得る。また、従来半舟底状或いは板状の細石核とされたものとC・D類の類似性は、打面全周と石刃剝出面の比率やそれ等の外形に於いて明らかである。このように備讃瀬戸の1調査地点の細石器文化を考察するとき円錐形・半円錐形細石核と半舟底状・舟底状細石核の性格の差は、漸進的な文化の発達から説明されるよりも、むしろ外部からの強い影響によるものとする考察の妥当性を示すものであると考えられるのである。

以上のまとめによって必ずしも層位的出土状況を示した遺跡とすることはできないにしても、本調査地点に於ける石器時代の変遷を次のように示すことができる。縦長剝片、翼状剝片、国府型ナイフ(宮田山型ナイフとされていた小型半月形ナイフを含めて) サ島 I 型ナイフ (宮田山型ナイフとされていた小型半月形ナイフを含めて) サ島 I 型ナイフ (宮田山型ナイフとされていた小型半月形ナイフを含めて) サ島 I 型ナイフ (宮田山型ナイフとされていた小型半月形ナイフを含めて) サル 島 I 型ナイフ (宮田山型ナイフとなる) であること、井島 I 型ナイフに小石刃、台形様石器が伴なうことが指摘され、ナイフ形石器文化から、最終末の細石刃文化までの編年の大綱が認められる。また、各地の洞穴遺跡出土のポイントが最古の土器文化と深く関連することから、今後備讃瀬戸の旧石器時代遺跡の中から土器文化が検出される可能性が大きいことも指摘することが出来るのである。

今回の調査は瀬戸大橋架橋に伴なう埋蔵文化財の予備調査の一環として行なわれたもので、発掘面積が限定された小範囲に限られているため多くの問題点を残すのは事実である。今後、瀬戸大橋架橋工事も行なわれることや、工事に伴なう埋蔵文化財の本格的な調査を前にして櫃 $\Pi-2-H$ 地点の旧石器文化の様々な問題をとりまとめたものである。

6. 遺跡の範囲

ホウロク石遺跡 1

石槌大権現の所在する標高 67.3 mの稜線上平坦地からホウロク石周辺の比較的平坦な丘陵地に立地する。遺跡の面積は約10,000 m²で、ホウロク石周辺に特に濃密な分布が確認され、旧石器製作遺跡としての可能性が高いと考えられる。またホウロク石から宝殊寺を経て櫃石小学校に向う低丘陵状尾根にもサヌカイト片が認められ注意を要する。

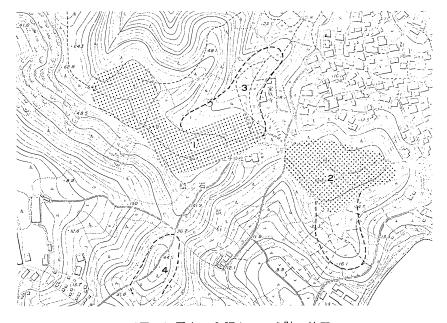
。王子神社東遺跡 2

王子神社と1つ鞍部を隔てた標高 35.1mを最高所とするなだらかな低丘陵の平坦地に立地し,約 $10,000 \, m^2$ の広まりを持つ遺跡である。ホウロク石周辺と同様最高所周辺には多量のサヌカイト片の散布が認められ,やはり旧石器製作遺跡の可能性が高い。またこの遺跡から南方に伸びる低丘陵状尾根にもサヌカイト片の散布が認められる。

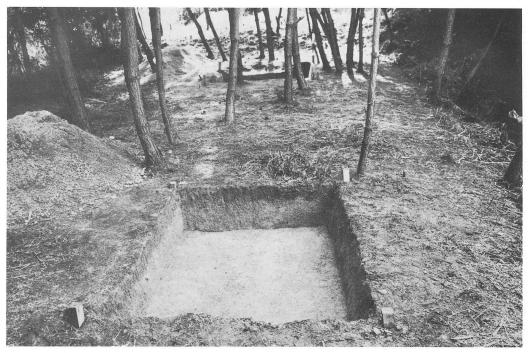
。その他

宝殊寺背後のホウロク石北裾の谷状部は表土下数m以上が流土による埋積谷であるが、 その堆積土層中に平安期と思われる遺物包含層が埋蔵されているところから、この谷状地 のいづれかに当時の遺構の所在が予測される。 3

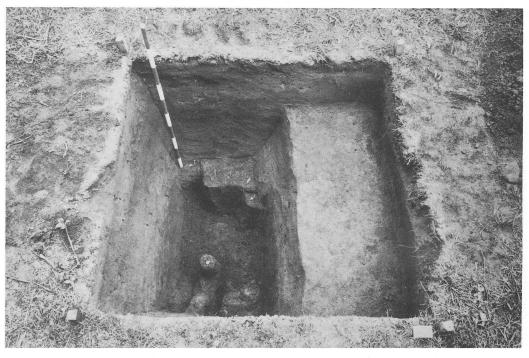
また、ホウロク石遺跡の南方約300mの地点は標高45m前後の丘陵高所であり、比較的平坦部も広く東に第III調査地区の第1小区、南に第2小区が続き、各々に旧石器包蔵が確認されているため注意を要する箇所である。また、この高所北西部には方形壇状に築かれた社が所在する。



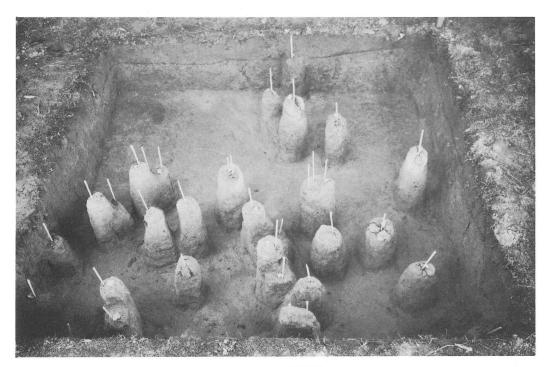
第13図 櫃石島第2調査区の遺跡の範囲



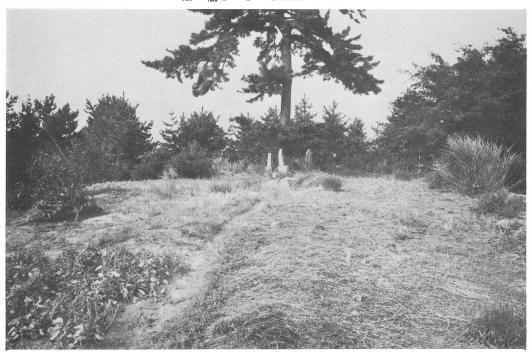
(1) 櫃 I - 1 - D調査グリッド(北より)



(2) 櫃 II - 2 - A調査グリッド(西より)



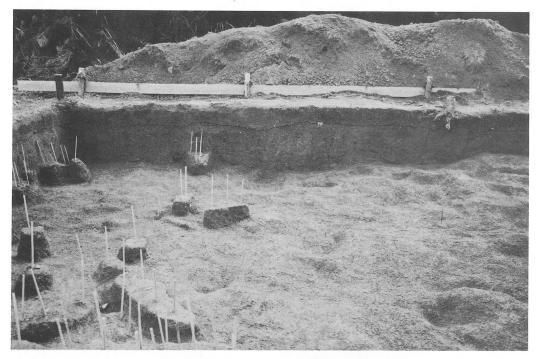
(1) 櫃 **I** - 3 - C調査グリッド



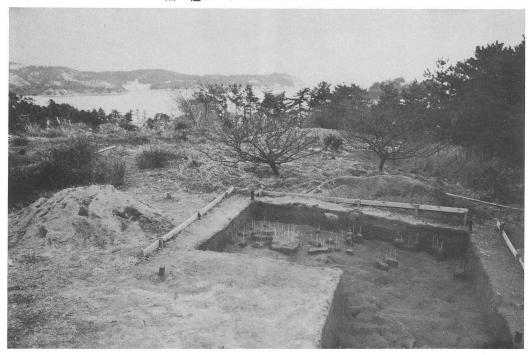
(2) 櫃Ⅱ-3調査区発掘前景



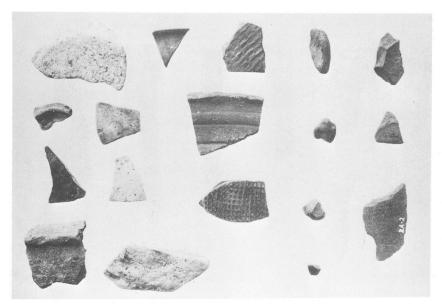
1 第1層遺物分布状況 2.3.4 第2層遺物分布状況 5.6.7.8 第2層下層遺物分布状況 櫃 II - 3 - H 調査グリッド



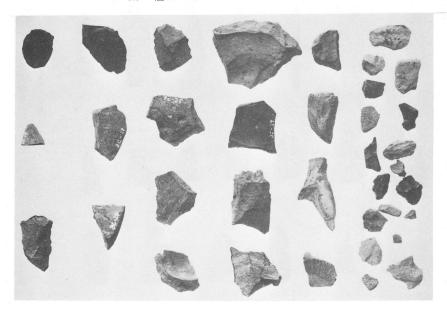
(1) 櫃 🛚 - 3 - H 第 2 層下層(北から)



(2) 櫃 II - 3 - H グリッド全景 対岸は鷲羽山遺跡

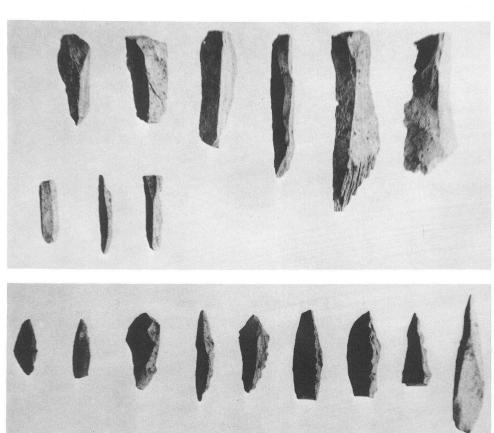


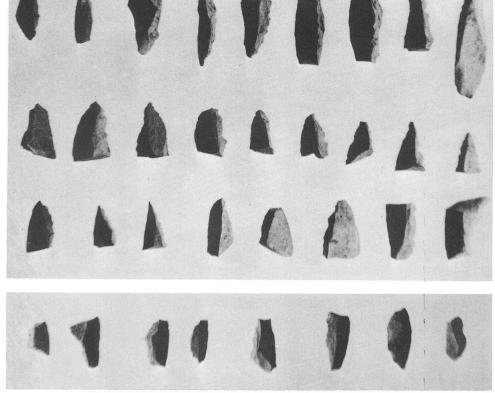
(1) 櫃 II - 2 - Aグリッド出土遺物



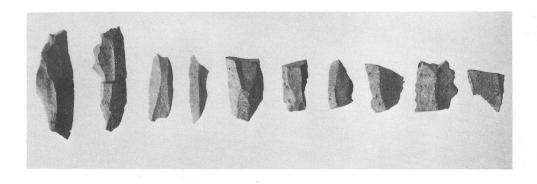


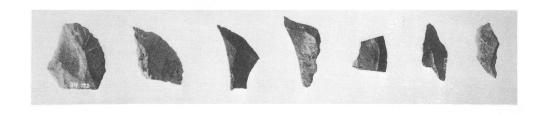
(2) 櫃 I - 3 - Cグリッド出土遺物

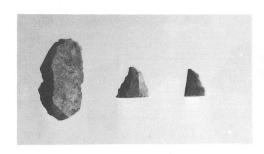


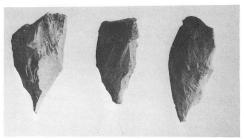


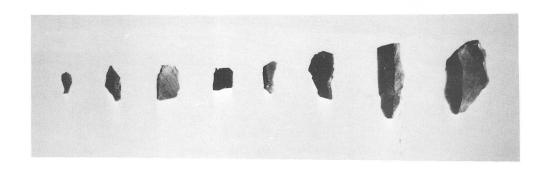
櫃 II - 3 - H グリッド出土遺物 - 1



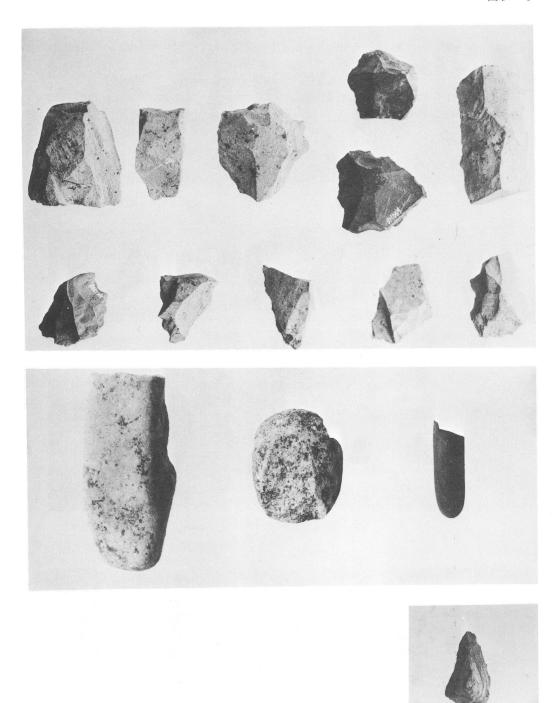






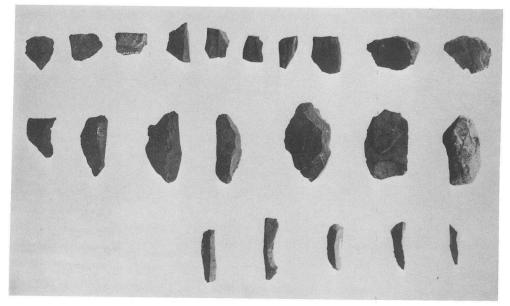


櫃 II - 3 - Hグリッド出土遺物 - 2



櫃 Ⅱ - 3 - Hグリッド出土遺物 - 3





櫃 II - 3 - H グリッド出土遺物 - 4

櫃石島第Ⅲ一北調査区(大浦浜)

目	次	揷 区	1 目	次
1. 立. 地 ·	85	第1図	櫃石	島第3調査区位置図
	過······ 85	第2図	櫃Ⅲ	-1-K調査グリッド実測図
		第3図	櫃Ⅲ	-1-K調査グリッド出土遺物実測図
3. 調査地区	の設定87	第4図	櫃Ⅲ	- 2 - C • E • F 調査グリッド実測図
4. 調査の概	要 ·····89	第5図	櫃Ⅲ	- 2 - C • E • F 調査グリッド出土遺物実測図 - 1
5. 主たる調	査区92	第6図	櫃Ⅲ	- 2 - C • E • F調査グリッド出土遺物実測図 - 2
(イ) 櫃Ⅲ-	1 - K	第7図	櫃Ⅲ	- 2 - C • E • F調査グリッド出土遺物実測図 - 3
(□) 櫃Ⅲ-	2 - C•E•F	第8図	櫃Ⅲ	-5-B調査グリッド実測図
(小 櫃Ⅲ-	5 - B	第9図	櫃Ⅲ	- 5 - B調査グリッド出土遺物実測図
(二) 櫃Ⅲ-	6 – C	第10図	櫃Ⅲ	-6 -C調査グリッド実測図
, ,,	8 – A	第11図	櫃Ⅱ	- 8 - A調査グリッド実測図
		第12図	櫃Ⅲ	-8-A調査グリッド出土遺物実測図
	9 – A	第13図	櫃Ⅲ	- 9 調査グリッド実測図
6. 遺跡の範	i囲 ·····115	第14図	櫃Ⅱ	- 9 調査グリッド遺構実測図
			(1)	縄文時代土拡状落ち込み実測図
			(2)	土器棺実測図
		第15図	櫃Ⅲ	- 9 石鏃
		第16図	櫃Ⅱ	- 9 調査グリッド出土遺物実測図 - 1
		第17図	櫃Ⅲ	- 9 調査グリッド出土遺物実測図 - 2
		第18図	櫃石	島第3調査区の遺跡の範囲
		図 版		
		図版 1	(1)	櫃石島第3調査地区全景(大浦浜)117
				價Ⅲ-1調査区全景
		図版 2		櫃Ⅲ-1-K調査グリッド(西から)······118
				櫃Ⅲ-2-C・E・F調査グリッド-1(西から)
		図版 3		櫃Ⅲ-2-C・E・F調査グリッド-2(西から)…119
				櫃Ⅲ-5-B調査グリッド(西から)
		図版 4	(1)	櫃Ⅲ-6-C調査グリッド断面図(東から)·······120
				櫃Ⅲ-8-A調査グリッド(西から)
		図版 5		櫃Ⅲ-9調査グリッド各景121
		図版 6		櫃Ⅲ-1-K調査グリッド出土遺物122
				櫃Ⅲ-2-C・E・F調査グリッド出土遺物-1
		図版 7	(1)	櫃Ⅲ-2-C・E・F調査グリッド出土遺物-2····123
				櫃Ⅲ-5-B調査グリッド出土遺物
		図版 8		櫃Ⅲ-8-A調査グリッド出土遺物(縄文式土器)··124
		図版 9		櫃 Ⅲ - 9 調査グリッ ド出土遺物 - 1 · · · · · · · · · · · · 125
		図版10		櫃Ⅲ - 9 調査グリッド十器棺を構成する土器 126

大 浦 浜 地 区

1. 立 地

櫃石島第Ⅲ調査地区の大浦浜地域は櫃石島東岸に発達した大浦浜浜堤部とその後背湿地、および、それ等を取り囲む低丘陵といった変化に富む地形を呈する。

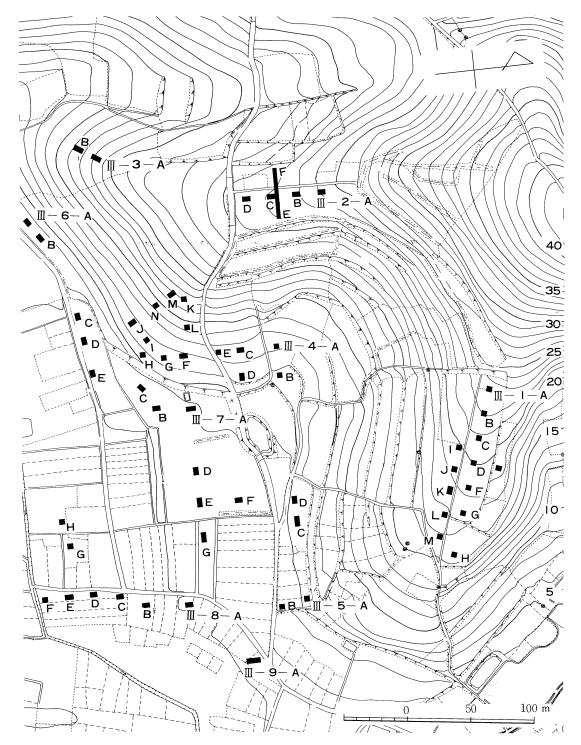
大浦浜は約1㎞を測る南北に孤状に広がる遠浅の砂浜であるが,その中央部約300 mは 浜堤状の地形を呈し,その背後に後背湿地を形成する。この浜堤部の一部は大正末期頃の ガラス製造原材採取のため削り取られているが,南基部の「たてわ」から「すか」とよば れる中央部にかけて2mの等高線に沿って明瞭な高まりを残している。また櫃石中学校か ら「すか」までは明らかな浜堤部は認められず,むしろ,背後の山裾傾斜面からつづく緩 やかな傾斜を示す平坦地となっているものの同じく標高2mの等高線をたどると「すか」 と呼ばれる中央部の浜堤に接続することが理解される。櫃石中学校から「かりもし」「す か」「たてわ」にかけてのこの浜堤部一帯には,おびただしい量の師楽式土器の散乱とと もに縄文時代から歴史時代にかけての各種の遺物の散布が認められ,浜堤部の生成ととも に連綿とこの地に生活を営んだ先人の足跡が求められる。

大浦浜浜堤部背後の平地は現在畑地に使用されているが、一度降雨すれば水浸しの状態になる低湿地で、低地奥部の溜池から大浦浜防波堤に抜ける水路の縁辺は常に水はけが悪く畑地の溝などには水溜りが認められる劣悪な土地条件である。後背湿地が畑地に利用され始めたのはさほど古い時代に遡るものではないと考えられる。浜堤部に近接する部分と丘陵裾部には中世土器片、サヌカイト片などの散布が認められるが、低湿地中央部には遺物の散布は認められないこともそのことを暗示していると思われる。

大浦浜地区の丘陵部は大浦浜背後の低湿地を三方から取り囲むように連続する北半の丘陵部はいづれも標高44.5 mの高所から派生する尾根状地からなるが,南の丘陵は関ノ浦に通じる標高 6.2 mの峠を隔てている。これ等の低丘陵地のうち大浦浜に突出する尾根状地には旧石器の散布が知られる。

2. 調査の経過

- 10月 10月中旬にホウロク石地区(櫃II)の調査に平行して発掘地区の下見分を行ない,櫃III 1.~櫃III 9 まで 9 調査小区を設定し,調査計画を立案して,10月25日に関係各位に出席を求め調査計画を説明し,承諾を得,翌10月26日から調査を開始した。10月26日~10月30日に大浦浜各区の座標を定め,各小区の杭打ちを行なう。調査面積は327 ㎡である。
- 11月 櫃 \square -1, \square -2, \square -4, \square -5, \square -8, \square -9の各調査小区の調査を実



第1図 櫃石島第3調査区位置図

なお,大浦浜調査地区の南半の調査地区は大浦浜後背の低湿地のほぼ中央を貫通し,大浦浜防波堤水門に流出する用水溝以南と対象したもので,III-10~III-12の3調査小区に区分し,20グリッド,129m0発掘面積であるが,これらの調査の開始は翌52年1月以降に実施した。

3. 調査地区の設定

櫃石島第Ⅲ調査地区は今年実施の調査地区の内で最大の規模と範囲を持つものであり、調査期間も年末・年始にまたがるため、地区を南北に2分する排水路によって南北に区分した。南半部は52年にその実施期をあてた。また調査対象地区の一部を52年度予定であった第Ⅲ調査地区と代替した。

櫃石島第皿調査地区は丘陵稜線上に 2 小区,丘陵傾斜面に 4 小区,丘陵裾から低平地に 7 小区の計13調査小区に細分した。地形上の特質に見合わせて尾根主軸に平行させて設定した-1 、-1 、-1 と低湿地に隣接するものの丘陵傾斜面の-1 - -1 は独自なグリッド設定基準線を設けたが,他は国土地理院の座標系に合わせた南北・東西にグリッド設定基準線を置いた。櫃-1 調査小区は櫃石中学校西の標高 -1 15~23 -1 の丘陵尾根

上の平坦地に設定したもので東西に細長く平行する 2 条のグリッド設定基準線により13 グリッド $54m^2$ の発掘面積である。丘陵稜線上であるが,畑地に開墾されている櫃 $\mathbb{H}-2$ 調査 小区は櫃 $\mathbb{H}-1$ と基部で連結する南北方向にその走向を示す標高 $20\sim25m$ の丘陵尾根上の平坦地に設定した調査小区で南北と東西の十字のグリッド設定基準線によって6 グリッド $54m^2$ の発掘面積である。東西軸20m は幅 1.5 m の細長いトレンチによるものである。

櫃Ⅲ — 4 調査小区は南半部の丘陵傾斜面の東に面する傾斜面に定めた調査小区で,国土地理院の座標系に合わせた南北線を,それに特定の角度で交差させた基準線によって14グリット66 ㎡の発掘面積である。

櫃III-5調査小区はIII-1と同一丘陵の南傾斜面に定めた調査小区であるが、畑地としての開墾が徹底して行なわれている地点である。東西に3グリッド,南に1グリッド定め, $20m^2$ の発掘面積である。

櫃m-7調査小区は,m-1,m-2の丘陵部から集水した水脈が低湿地に流入する地点に定めた調査小区で,地目は水田と記載されているが,現在放棄された荒地である。標高は $2.2 \sim 2.5$ mと低湿地にあっても比較的高い地形であるが,水はけは悪く滞水気味である。東西軸と南北軸に沿ってグリッドを設定し, $48m^2$ を発掘範囲とした。

櫃皿 -8 調査小区は大浦浜堤背後の低湿地に定めた調査小区で標高 $1.5\sim 2.0~m$ の低湿地である。周辺は櫃石島民の重要な葉畑となっていて表面土の排水は良好であったが,発掘してみると表土下 $40\sim 50~cm$ で滞水するため調査は難行した。やはり,国土地理院座標に合わせて 8 グリッド $37.5~m^2$ を調査範囲とした。

櫃m - 9 調査小区はm - 1 調査小区の定められた軸に走向を示す低丘陵の先端部に接する低地に定めたグリッドでm - 1 の面積を持つ。標高は 2.3 m 前後と他の低地に定めたものよりも高い。

櫃Ⅲ-10,11,12は別記するところによる。

4. 調査の概要

各調査区の概要

			各	調	査 区 (の 概	要				_	
調査グリッド	面積	出	土	遺	物	遺	構	調	査	の	所	見
櫃Ⅲ-1-A	$4 m^2$	剥片 1 ·	砕片 1									
В	4 "	剝片1 •	砕片 1	• 近t	世土器片							
С	4 "	須恵器・ 器片	師梟式	土器月	十・近世土			この調査区は標高15~25 mの 丘阜状の尾根稜線上平坦部に定 めたものである。 A~Cと I グリッドは地山が				
D	4 "	サヌカイ 須恵器片 近世土器	1•瓦	質土器	土師器片 1・ 器片 1・中 滋 1)							
E	4 "	サヌカイ 片	ト剝片	2 • 1	中近世土器							
F	4 "		1 • 剝		長剝片 2 ⋅ ・砕片30 ⋅			浅く遺物の包含は認められない D~H、J~M~尾根を下るに 従って、堆積土層が深く畑地耕 作の過程で平坦化されている。				られない。 を下るに く畑地耕
G	4 "	掻器 1・ 使用痕あ 片99・(近世土器	る剝片 チャー	1 • 5	• 石核 1 • 剝片11 • 砕 † 1) 中	花崗社	崗岩石組	遺物はサヌカイト製器を多く行み注意を要するが、畑地耕作にため大幅に撹乱されている。 十したサヌカイト製品の多く				
Н	4 "	剝片11• 師器片	砕片44	• 須Ā	惠器片•土			風化が大きく二次加工等の観が困難なものが多い。 また、この尾根の南傾斜面				
I	4 "	鉄片					相部にはサヌカイト剝片や「 土器片の散布が認められる。	片や中世				
Ј	4 "				曜石砕片 1• 寛永通宝)			れる。				
K	6 "	石核1 · 細石刃 •			る剝片1・ 剣片32							
L	4 "	縦長剝片 横剝片 1			• 砕片22 • 器片							
М	4 "	削器 1 · 33	石核 2	• 剝)	片 9 • 砕片							
櫃Ⅲ - 2 - A	6 "	サヌカイ 核 2 • 象 器片	ト円礫 川片 4 ・	2 • <i>i</i> 砕片	横長剝片石 7・近世土		石が露 る小ピ	この調査区は標高高 とから南にはびる尾尾 に定めたものが後 に定めたものが後 に定めたものが後 で傾斜を変でがます。 が即は比較られる。 が期待される。				
В	6 "	ナイフ形 刃1・約 片11・迂	£長剝片	4 • 5	器 1 · 細石 剝片 9 · 砕					【は標高20~25mの なだえ 民担の 東田地		
C	6 "	1 • 細石	到2 •	二次	・ポイント 加工ある剝 卆片・円磁・	小ピ	·y ト		で前さられ	5る。平坦部のή きでゆるくその5 せている。北半1 1気味であるが項		
D	6 "	細石刃 1	· 縦長 · 焼石 1	剝片	イント2・ 16・剝片40・ 岩円礫1・		土層 4 数える		況の	良い包含層		
E		2・ポイ	ント 1 別片・砕	•削 炉•	•翼状剝片 器1・細石 黒曜石片2• - ト片	小ピ	_ツ ト					
F		石核2・	・縦長象	片 9	• ナイフ形							

調査グリッド	五建	出土	遺物	遺構	調査の所見
調宜グリット	面積			退 件	調 宜 り 別 兄
櫃Ⅲ −2 −F		石器 1・ポイント 細石刃 3・細石核 削器 2・剝片・砕り 円礫・焼石・黒曜	調整剝片1・ †・叩き石・		
櫃Ⅲ-3-A	6 m²	剝片1・ 砕片1			Ⅲ - 2調査区の尾根の先端部
В		剝片 4 · 砕片 5			傾斜部で定めたものである。 石組みは30~50cm大の花崗岩 自然石によるもので、人工のも のか、自然のものか問題である。
櫃Ⅲ-4-A	4 "	サヌカイト片・土 器片・瓦質土器片	師器片・須恵 ・近世土器片		
В	4 "	サヌカイト片・チ 師器片・須恵器片 片	ャート片・土 ・中近世土器		この調査区は大浦浜背後の低
, C	6 .//-,	サヌカイト片・土民器片・近世土器片	師器片・須惠	100	湿地を望む標高 5~10mの南面 する傾斜地に定めたものである。
D	6 "	サヌカイト片・土筒 器片・師楽式土器 椀鉄釉陶器椀1・ 土錐	☆・輸入白磁		谷状地に定めたA・B・Dグリッドでは山地の堆積土層が深く、 Bグリッドの下層は伏流水のためグライ化した土層が検出される。
Е	4 "	サヌカイト片・土色	师器片		E~Nグリッドにかけては,
F	6 "	近世土器片			後世に持ち込まれた近世土器や 部分的に散見するサヌカイト片
G	4 "	近世土器片			を除けば全く遺物は認められず、
Н	4 "				遺構の所在はないものと考えられる。
I	4 "	近世土器片			Jグリッドに認められた石組
J	6 "	サヌカイト片・須 土器片		石組み	みは人工のものと考えられるが その性格は不明である。
K	4 "	サヌカイト片・近	世土器片		
L	4 "				
M	6 "	近世土器片			
N	4 "	近世土器片			
櫃Ⅲ -5 - A	4 ",	瓦質土器片 1 · 不知 石器 1 · 近世土器	定形ナイフ形	,	
В	4 "	サヌカイト片16・ 土師器片・須恵器 器椀1・鉢1・擂 1・土錘2・焼けた	片・瓦質土 鉢 1 ・亀山焼	石み出された。 石み出するとので 大を用いる 大を用いる 組状 に20cm おいた に20cm おいた に20cm おいた に20cm おいた に20cm おれた に20cm おれた に20cm おれた に20cm おれた に20cm おれた に20cm おれた に20cm おれた に20cm おれた に20cm に20cm おれた に20cm に20cm おれた に20cm おれた に20cm おれた に20cm おれた に20cm おれた に20cm に20cm おれた に20cm は20cm	この調査区はⅢ-1調査区の 南傾斜面の裾部に定めたもので 標高2m前後の大浦浜よりやや 高い。 中世の土器が落ち込み状遺構 に伴って出土し、その内に輸入
C		サヌカイト片 7 ・ 土 土師器片 4 ・ 須恵 磁 1 サヌカイト片15・土	器片•輸入青	が た。 と 状 で 表 は で 表 に い い で ま に の ま に の ま に の ま に の に の に の に の に の に の に の に の に の の に 。 に の に 。 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。	陶磁器を含むてと等問題のある地域である。 現在は平坦に畑地が耕やされているが、その下部に旧状の傾斜が残り、その傾斜に対して何らかの遺構が残存している可能性が高い。
D	6 "	サメガイ FA 15・土 師器片20・須恵器片 土錘 9 ・輸入青磁	「•瓦質土器片•	及仏路ら込 み(浅いU 字溝か)	<u> </u>

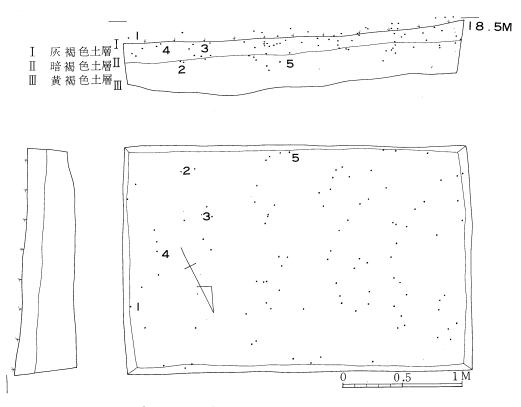
	7.54				T						
調査グリッド	自由槓	出 =	上 遺	. 物	遺	構	調		の.	所	見 ———
櫃Ⅲ - 6 - A	6 m²	サヌカイト片 須恵器片 1 鏃 1 (弥生L) 片	• 輸入陶器	:片1・石							大浦浜背
В	6 "	サヌカイト片 須恵器片3・ (弥生四基式	· 瓦質土器				後の奥部 斜地と低 ある。 顕著な・	湿地は	定定	めた	する緩傾 調査区で 強出され
C	4.5 "	チャート片く	4 · 近世土	器片			なかった	が,堆	主積_	上層	がかなり
D	4.5 "	チャート片 2 楽式土器片	2 • 近世土	器片•師			深く, そら 含む層が する。				
Е	4.5 "	近世土器片									
櫃Ⅲ - 7 - A	8 "	サヌカイト片 須恵器片10・ 世土器片									
В	6 "	土師器片 2 ・ 土器片 6 ・ 遅	∮ 須恵器片 ☑世土器片	1 • 瓦質		3 7		背後の標高12 定めた調査区			
С	6 "	サヌカイト片 須恵器片 7 • 世土器片	† 1 • チャ 瓦質土器	- ト片 1• 片 3 • 近			いす層の層色混合層さの出れ低至き認細土多り、あれてがのりがよれでも別はい土名の、あいた。	地表下 地であ 層を取	「1 n 5 る。 又る。	m前行。表示	後で湧水 土から3 ロック状
D	6 "	チャート片 2 質土器片 4 •	· 土師器 近世土器	片3・瓦 片	*			られ、	その	の下が	層は暗灰
E	8 "	サヌカイト片 瓦質土器片 2 近世土器片	72・土師 2・輸入青	器片 3 • 磁片 1 •	-			はグラ 。遺物 層の暗	ライイ オのフ 音〇É	とし、 大半に 色土原	ている場 は粘質土 暑に検出
F	6 "	土師器片 2 ・ 土器片 2 ・ 近							覚乱る	されたも	
G	8 "	チャート片 1 恵器片 5 • 瓦 土器片	•土師器瓦質土器片	片 6 • 須 2 • 近世							
櫃Ⅲ-8-A	6 "	サヌカイト片 縄文式土器18 恵器片 2・師 入青磁片 2・	8・土師器 5楽式土器	片20・須 片 1・輸							
В	6 "	サヌカイト片 縄文式土器片 須恵器片 1・ 近世土器片	73 • 土師	器片 1 ・				で後の低平地に設す、地表下50cm程			
С	4.5 "	縄文式土器片 近世土器片	1 • 須恵	器片 1 •				2層・	第:	3層1	は砂質土
D	4.5 "	土師器片 3 • 土器片	須恵器片	4 • 近世				少土層 器は第	到以了 第4層	下砂原 堇 • 釒	暑が続く。 第5層中
E	4.5 "	サヌカイト片 3・土師器片 近世土器片	- 2 • 縄文 - 10 • 須恵	式土器片				定文第	土岩		
F	4 "	サヌカイト片 須恵器片 5 • 世土器片	2 • 土師 瓦質土器	器片 3 · 片 1 • 近							
G	4 "	土師器片1 • 土器片2 • 近		3 • 瓦質							

5 主たる調査区

(イ) 櫃Ⅲ-1-K

櫃石島第皿調査区第 1 小区は大浦浜に突出する標高 20m 前後の低丘陵状尾根の上部平坦地に定めた調査区である。 $\mathbf{II}-1-\mathbf{K}$ はそのほぼ中央部のやや南寄りに定めた $2\times 3m$ の長方形グリッドであり,南に僅かに傾斜している。標高 18.5m の高さを測る。この平坦地は古くから畑地に開墾されていて, $\mathbf{A}\sim\mathbf{H}$ グリッドは現在も畑作に使用されている。

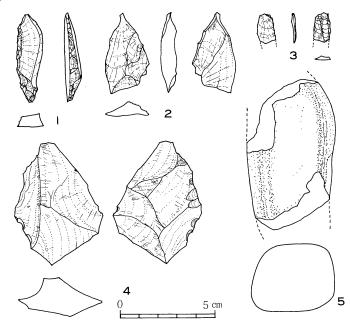
第1層は表土耕作土で灰褐色土で土壌の粒は細い。第1層中にはサヌカイト砕片とともに中近世の土器片が若干混っていたが耕作土で撹乱が激しい。第2層は明るい褐色土層で下層になるにつれて黄褐色気味になる花崗岩風化土層で粗い石英粒や花崗岩の小角礫が希に認められる。第3層が地山で地層基盤である花崗岩の崩壊土層であるがやや粘りがあり、風化度合は進んでいると考えられる。第2層中にサヌカイト剥片、砕片、砂岩円礫が検出されたが、顕著な遺物は認められないものの縦長剝片、横剥ぎ剝片の折断された小片、Mブレイドと二次加工(ブランティング)のある剥片も認められる。円盤状石核とされる不整形な小型の石核も認められ今後の注意を要する。



第2図 櫃Ⅲ−1 - K調査グリッド実測図

この調査グリッドの出土品は第1層に混入する近世の土器片を除くと他はすべて石器製作にかかる遺物で、不定形石核2、二次加工である剝片1、フレーク32、細石刃1、砂岩礫1が数えられる。石質はサヌカイトであるが、竪縞状の節理の目立つ石質のやや悪いものと、やや緻密なものがあり、前者は石質変化が大である。不定形石核としたものの1は表裏両面とも周辺からの不定方向の剝離痕を持つもので、円盤状石核とすることもできる。

二次加工ある剥片は,長さ4.6 cm,幅 1.4 cm,断面台形を呈するもので,基部と側片の一方にトリミングが施されている。フレークは殆んどが横剝ぎ利離によるもので1部を除き石質変化が大である。細石刃は1片だけであるが,表に3条の竪縞状剝離痕が認められる。先端が認められる。先端が認められる。先端がが折断されているが,現長1.5 cm,幅 0.8 cm,厚さ 0.2 cmを測る。砂岩礫は両端を欠いているが,現長 8 cmを測る隅丸



第3図 櫃Ⅲ−1−K調査グリッド出土遺物実測図

角柱状の円礫である。ハンマーと考えられる。なお,櫃Ⅲ - 1 調査区全体の旧石器時代遺物を他の調査グリッドの出土遺物や表採品等から列記すると,縦長剝片・翼状剝片・ナイフ形石器・横剝剝片・ポイント・細石刃等の瀬戸内地域の各期の石器があげられる。

(ロ) 櫃Ⅲ - 2 - C • E • F

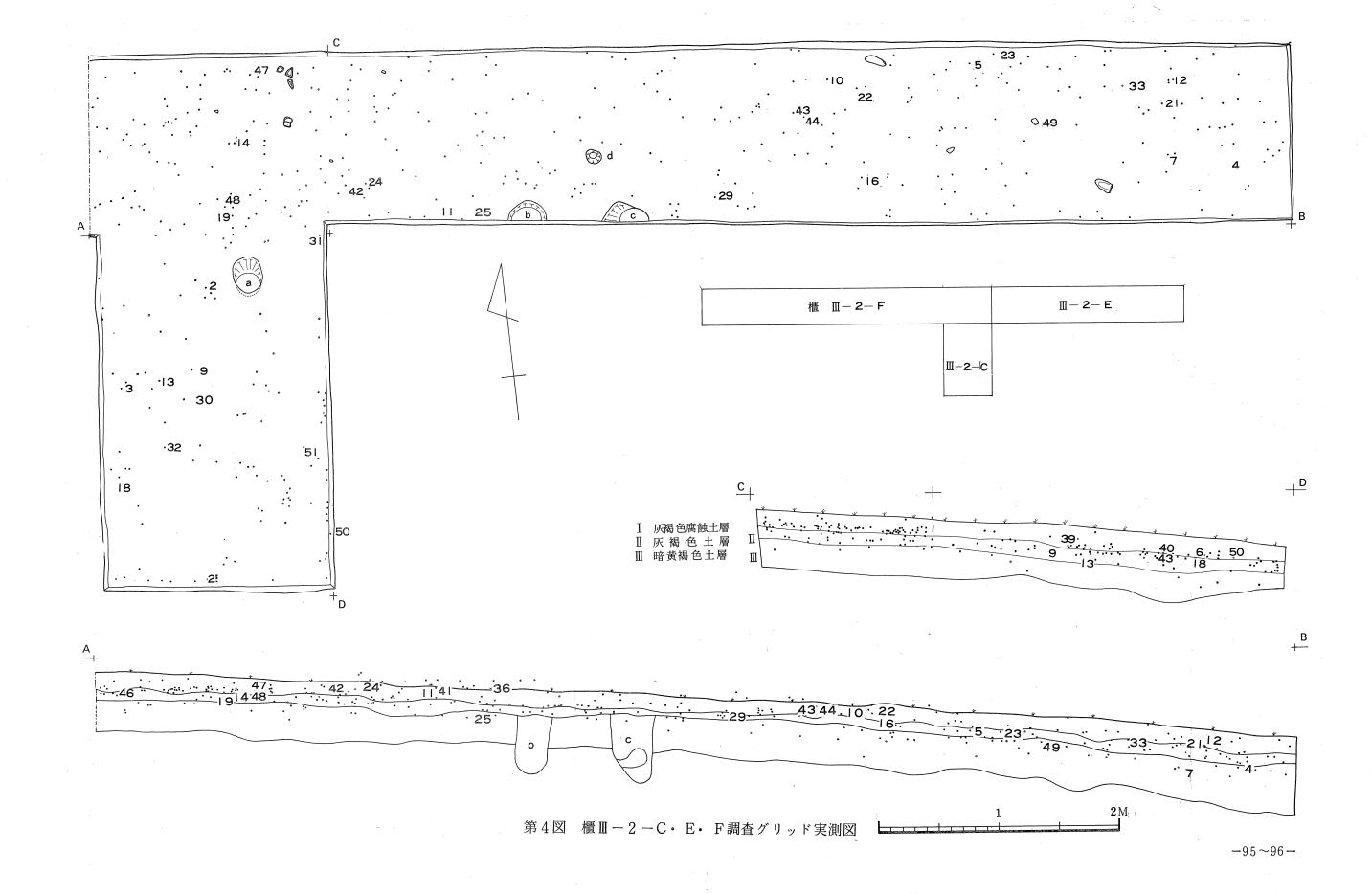
櫃III-2調査小区は櫃石中学背後の標高 44.5mの高みから東に櫃III-1 調査小区を定めた尾根が派生するのに対して南生する尾根上に立地するものである。さらに西方には同じ高みから一条の尾根が派生し,「せきの浦」まで伸びて大浦浜から「せきの浦」に通じる小地溝に面する。この調査小区を定めた標高 20-25m の尾根稜線上には比較的平坦で旧石器時代の遺構が立地するのに好しい地点であるが,現在東西二条の畑地が狭長に耕やされ,表土部分の撹乱は否めない。III-2-A-Dまで 33mを測るがそれらのうち A-B までは2層の層序を分つだけであるのに対しC は 3 層,D は 5 層を数え尾根稜線上を下傾するにつれて層序を増す。このことは畑地開墾とその後の耕作による切り盛りの二次堆積の事実を明瞭に示しており,III-2-A-B が削平され東西の傾斜面と稜線上下位のC,D 地点

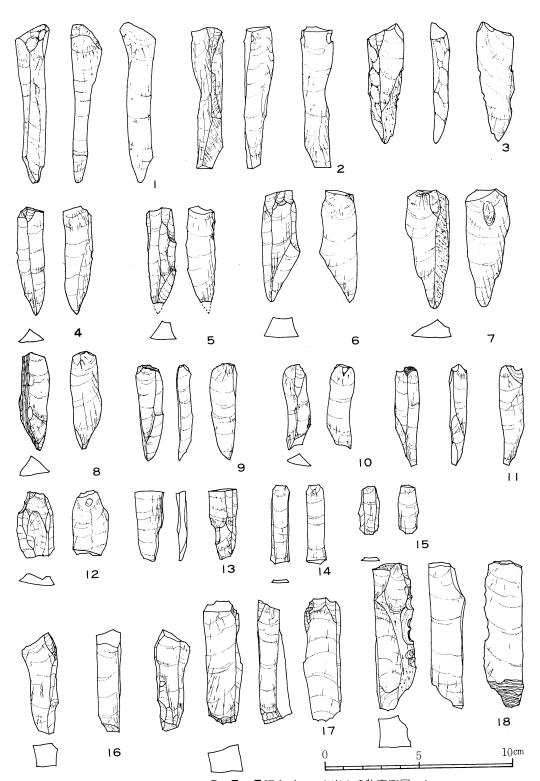
に盛ったことが窺われる。 $\mathbf{II}-2-\mathbf{C}$ は平坦地のほぼ中央部に定めたもので, \mathbf{E} ,Fはこのような細い尾根に如何なる形状で遺物の堆積が為されているかを知るため,予備調査であるが敢えてトレンチを拡張したものである。東西の \mathbf{E} F トレンチの断面は,第1層灰褐色腐色土層(耕作土)・第2層褐色土層・第3層鉄分斑の多い暗黄褐色土層の3層に分けられる。地山は黄褐色を呈する花崗岩風化バイラン土層である。出土した遺物の大半は第1層・第2層からで,第3層出土の遺物は少ない。

調査グリッドは東西に細長いT字型の33㎡の面積であったが、櫃Ⅲ-2-C・E・Fグ リッドともに小ピットが検出された。cグリッドの北半よりに検出されたaピットは、上 縁型35cm,深さ37cmを測る円形のピットで第2層中半から地山面にかけて掘り込まれたも ので、垂直よりはやや南に底が片寄っている。Eグリッドに検出されたb・c・dピット はともに第3層上面から落ち込んでいる。b·c両ピットは地山を掘り込んでいるが、グ リッドの壁面にかかっているため全容は明らかでない。bピットは径30cm強・深さ50cmを 測り,断面が釣鐘状を呈する。 c ピットはb ピットから50cmの側近に検出されたが,b ピ ットより深く掘り下げられていて径35cm・深さ55cmを測る。埋土は上部が黒褐色土、中位 が褐色土混り暗褐色土、下部が暗褐色土の三段階が観察される。dピットはb・cピット の側近に検出されたが,径15cm,深さ10cmの浅いものである。図示できなかったFグリッ ドの西よりにも、径 $30\sim40$ cm、深さ $20\sim30$ cm程のピットが検出されたが、 $C\cdot E$ グリッド 検出のものとは数mほど離れている。 $a \cdot b \cdot c \cdot d$ 各ピットの関係は $b \cdot c \cdot d$ が $1 m^2$ の範囲内に検出されたこととa・b・c各ピットの規模が類似することが指摘しうるだけ で、その性格は明らかでない。なお、C・E・F各グリッドのいづれのピット中にも、遺 物,炭化物等は検出されない。また,小ピット以外には遺構らしきものは認められなかっ た。

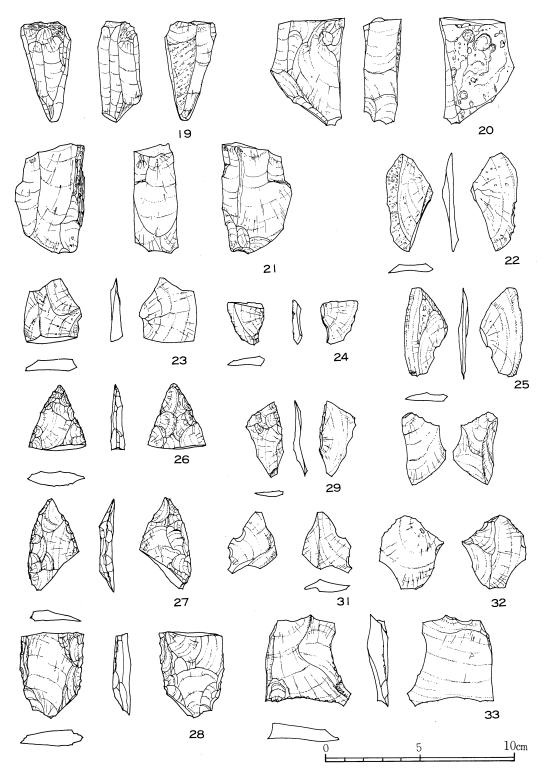
遺物はサヌカイト製石器を中心に、円礫・剝片・砕片を含めて総数 600 点近くが出土した。石器の種類は、縦長剝片・翼状剝片・ポイント・削器・二次加工ある剝片・細石器・叩き石・焼石が数えられる。しかし、遺物の分布状況には顕著な特徴は見い出せず、むしろ包含層は畑作のため相当撹乱されていると考えられる。

縦長剝片($1\sim15$)はCグリッドとEグリッド東半部にまとまって出土した。縦長剝片に用いられたサヌカイトは朽木状の自然面を呈するものが多く,いずれも長幅比の大なるもので,正面に 1条から 2条の稜を持ち側縁は平行し,それ等の断面は三角形もしくは台形状を呈する。長さ 8 cm 前後の大型のものと,長さ $5\sim6$ cm の中型のものと,長さ 4 cm 以下の小型品とに 3分し得る。大型品と中型品はともに長幅比が大きく,長さ 4 cm 前後の小形品の一群はさらに 2 種類に細別できる。長幅比の 2 前後のものと,14・15のように断面が台形で肉厚の非常に薄い剝片刃器とも言うべき長幅比の大きいものであるが,その数量

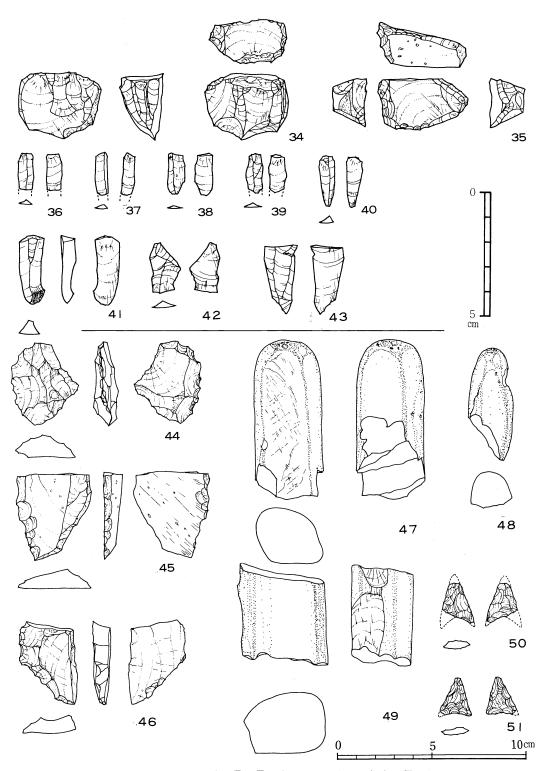




第5図 櫃Ⅲ-2-**C・E・F**調査グリッド出土遺物実測図-1



第6図 櫃Ⅲ-2-**C・E・F**調査グリッド出土遺物実測図-2



第7図 櫃 $m-2-C \cdot E \cdot F$ 調査グリッド出土遺物実測図m-3

は全体の10%に満たない。 $16 \cdot 17 \cdot 18 \cdot 19 \cdot 21$ は縦長剝片を剝離した石核である。 $16 \cdot 17 \cdot 18$ は細い角柱状を呈し,その断面は方形に近く, $17 \cdot 18$ の両者は上下方向からの剝離が行なわれていて,打面は調整されている。19は角錐状を呈する石核で,5 cm前後の中型品を剝離したものと考えられる。打面形成は風化の大きいため確信は把めないが,調節打面であると思われる。21は長さ6 cm,幅4 cmを測る石核であるが剝片剝離面の背面に朽木状の自然面を持ち,縦長剝片の剝離は一方面から短冊切りに行なわれていて,鈍角な方向からの打撃が推定される。21の石核の剝離が進行すれば,最終的には $17 \cdot 18$ のような角柱状の形態をした残核が残されると考えられる。

縦長剝片のうち3・4・6・9・14・15は調整打面,2・5・10・12は平坦打面,1・7・8・11は自然面をそのまま打面にしている。全体的にみれば平坦打面のものが最も多く,調整打面のものの数は少ない。剝片の一面に自然面を残すものもかなりある。二次加工痕や使用痕の認められるものは無かったが,風化のため細部の観察の不可能なものが多いため明言はできない。

翼状剝片($22 \cdot 24 \cdot 25$)図示し得た翼状剝片は3点で, $22 \cdot 25$ は風化が激しくチョークのように瓜で割ることができる程である。打面部の調整痕は22にかすかに認められるが,25は打点部が平坦なことと自然面を一部に残していることが観察できる程でそれ以外は明らかでない。長さはともに2.3 cm,幅は5 cmから6 cmとほぼ等しい。24は長さ2 cm,幅は推定4 cm強であると思われるやや小型のものである。打点部分から半折しているが打面は了寧に調整されている。 $22 \cdot 25$ は底辺のカーブが比較的ゆるいのに対して24の底辺のカーブは鋭いといった相異も認められる。

ポイント 26・27・28はいづれも木葉形を呈する幅広のポイントの一部であるが,夫々変化があり,原形の大きさも異なるようである。26は先端部の切損品であるが,断面は整った紡錘形を呈する。側辺からの細部加工が全面に及んでいて主要剝離面を一部も残さない。現存部分だけでは重量は 6.3 gを測る。27は側面観からするとポイントに入れるのに難のあるもので,ドリルであるとすることもできる。左右の側辺は主要剝離面からの細部加工は了寧であるが表面にも大剝離面を残すし,裏面の細部調整は大まかであり同様に大剝離面を残す。28は基部から中央部にかけて残存するもので,その断面は不整な紡錘形である。表面には27と同様 Negative な剝離面を 30 余り残すが裏面は二次加工により大剝離面は見当らない。周辺からの細部加工は26ほどは了寧でない。27・28の現存部分での重量はそれぞれ 6 g・18 gを測る。

23・29・30・31・32・33は横剝ぎ剝片であるが,必ずしも同性格の剝片ではなく夫々変化がある。32はトリミングがあり掻器と考えられる。

細石核,細石刃 $(34 \cdot 40)$ 34は玻璃質のサヌカイトを原料とした細石核であり,平坦打面であるが打点部分は細かく調整されている。打面銅は 8.1~cmを測り,短側面の一方だけ

に細石刃剝離面を持つもので、5条の樋状剝離を数える。他の3辺のうち1方の短側面は 自然面を残し長側面は調整剝離が行なわれている。

35は細石核としては使用されていないが細部に二次加工痕を残し 2 条の樋状剝離が認められる。また,図示しなかったが他に同質のサヌカイト角礫を裁断した石核形式の第 1 段階の剝片も認められる。36から 4 は細石刃であるが,その巾は $6 \sim 7$ mmで長さも 2 cm前後の小型品であるところに特徴があり,先端部を欠くものもある。40は黒曜石を原料とする。 $41 \cdot 43$ は小形石刃で,41は頂部に打面調整痕を認める。43は 3 条の稜線を持つ黒曜石製

削器(44・45・46) 44は円盤状石核を再加工して孤状の側面に二次加工を施したものである。46は外側の2辺に二次加工を了寧に施したもので,その先端は鋭く調整刀様の使用も考えられる。他に1点大形横剝ぎ剝片を用いてその縁辺を二次加工したものも出土し

叩き石他(47・48・49) 47は一方の端部を欠いているが,長方形の砂岩質円礫を用いた叩き石で,端部の先端に打痕を留める。48は現存長6cmを測る小型のもので,花崗岩円礫を素材とした叩き石と考えられる。49は上下端と側辺の1部を欠く石英斑晶の大きく顕著な火成岩円礫であり,面は非常に円滑で人工的な磨製を思わせる程であるが性格は明らかでない。

石鏃($50 \cdot 51$) いづれも凹基無茎式に属するもので風化が激しく,周辺は丸味を帯びている。50は長さ $2.3 \, cm$,51は長さ $2 \, cm$ を測る。

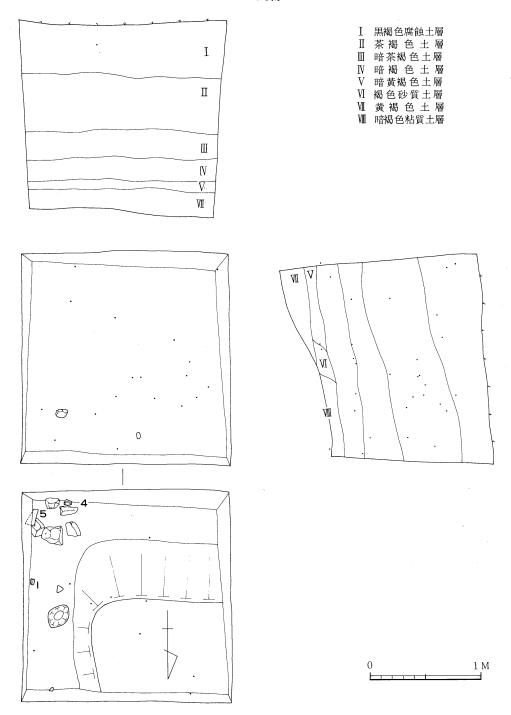
櫃Ⅲ - 2 - C・E・Fグリッドの出土遺物は以上述べた通りであるが、同調査区には、国府型ナイフ・富田山型ナイフ・井島 I 期の石器も少量であるが発見されている。しかし全体的にみれば縦長剝片の量が多く、同石核の出土もかなりあるところから石器製作趾の検出が将来期待される。

(小 櫃Ⅲ - 5 - B

品で先端に尾留をとどめる。

この調査グリッドはIII-1調査区の立地する尾根裾の南面する傾斜面の裾部近くの緩傾斜地に定めたものである。日当りの良い傾斜面は全て畑地に階段状に耕作されていて遺構の立地の予期される部分も大幅に切り取られたり、埋蔵したりしている。III-5-B調査グリッドは、尾根裾部が大浦浜に接する山裾部分の南面した箇所に定めたもので、遺構の所在が期待されたものである。

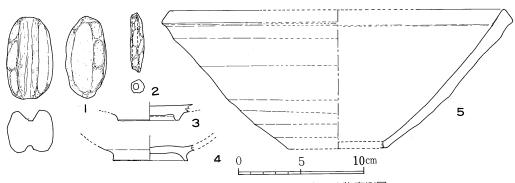
このグリッドは地表から黄褐色粘質土の地山まで約2mを掘り下げたがその間に無遺物層の第3層を挾み8層の土層に分けられる。第1層は現耕作土層で約 $30\sim50cm$ を測る黒褐色、腐蝕土層で土壌の粒状は細い。第2層は茶褐色土層で約50cmの厚みである。第3層は灰



第8図 櫃Ⅲ-5-B調査グリッド実測図

味がかった暗茶褐色土層で20~35cmの厚みを測り、遺物を全く含まない。第4層はその上層部に10片近くの遺物を含む暗褐色土層で、粒状は比較的細い。第5層は暗黄褐色土層。第6層はブロック状に入る褐色砂質土層,第7層は黄褐色土層で南から東半部の溝状落ち込みに堆積した土層である。第8層は4層と6層に接する土層で暗黄褐色を呈する粘質土層であり,第6層,7層はこの土層を切り込んだ落ち込みに堆積する。第8層より下は黄褐色を呈する粘質土層で地山層と見なされる。第3層の無遺物層より上で検出され、遺物は比較的新しい時期に例えば階段状の畑が形成された時期に2次的に堆積したものである。第4層はそれ以前のある時期の表層であると考えられ腐蝕の度合も大きいし、遺物も堆積しているが撹乱が認められる。第5層から7層中には須恵器片から瓦質土器片が含まれ、東南部のコーナーには円形に石組み状の配石が認められその間から瓦質の鉢形土器と土師器碗が検出された。これ等の土層の堆積する落ち込みはグリッド東部から南部にほぼ上字型に検出されたが現状で45cmの深さが測れるがその性格は明らかでないが、中世以後の遺物が含まれず、土師器碗、瓦質土器鉢の形態から平安末期~鎌倉期にかけての年代が得られ、注意を要する。

第1層,第2層中の出土遺物は,チャート片,瓦質土器のほか,近世の土器片等が明らかに新しい撹乱によって二次堆積したもので,みるべきものは出土しなかった。第4層上面には土錐片1,土師質土器片3,瓦質碗1,サヌカイト片2が検出された。サヌカイト片は3cm足らずの横剝きの剝片を加工したナイフ形石器で,断面は3角形を呈し,短辺には背部にブランテングがある。また刃部基部よりに二次加工が認められるが,或いは使用痕かも知れない。他の土器片は平安末から鎌倉期にかけての細片である。碗は高台のふんばり気味の土師質土器片と底面の幅広い粗略な粘り付け高台の瓦器碗とであり,後述する溝状落ち込みの出土遺物と同種類のものとみてよい。



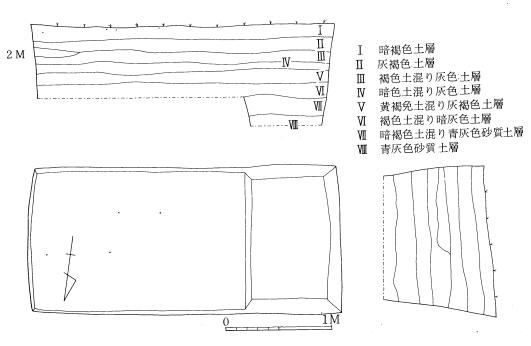
第9図 櫃Ⅲ−5−B調査グリッド出土遺物実測図

第7層出土遺物は、L状にトレンチの隅に認められた溝状落ち込みから出土したものである。鉢1、土師器片1、土師器碗高台部分1、瓦質碗高台部分1、土錐1が出土した。鉢と土師器碗は大形礫を組んだ径40cm前後の円形配石の石の隙間に出土した。鉢の体部は

直線的に外上方向に伸び口縁端部は角ばり気味で外傾して,下端は鈍く稜を為す。粘土組積み上げ後ロクロ整形したものであるが,外面中央部は横撫でが為されているものの指頭圧痕が多く認められる。体部下部は篦削りが行なわれている。灰黒色を呈するが断面は灰白色で焼成は悪い。土師器碗は高台径 6 cmを測るものであるが上部は明らかでない。高台は外横方向にふんばるが器壁は薄く,横撫で整形されている。黄白色を呈するが断面は暗黒色である。瓦質土器碗は高台径 5 cmを測る。高台は粘土紐粘り付け後,内外面を軽く横撫でするだけで高台底面は狭広一様でなく,一部に回転台の板目が残る。碗は底面は平坦で左廻りに放射状の板目が11~12本残る。四形である可能性がある。他の土師器片 1 は甕もしくは壷の体部の小片であるが形態は明らかでない。土錐は長径 6.5 cm,幅 3.2 ~ 3.6 cmを測るが幅の広い側面に上幅で約 1.5 cmを測る深い溝が掘り込まれている。

(二) 櫃Ⅲ - 6 - C

この調査グリッドは大浦浜背後の低湿地の北奥部に定めた 1.5×3 mの長方形グリッドで,丘陵裾部と接する標高 2.2 mを測る。現在ミカン園に造成されていて地表の水はけは良い方であるが地表下数cmの深さに地下水が滞水している低湿地である。III-6 調査小区には他に西方40mを隔てたA,B 2 グリッド,東に10m毎にD,E 2 グリッドを開いた。D,E は以下C について述べると全く同様の堆積土層を示すが,A,B は標高 3.5 mの山裾緩傾斜面に定められたグリッドで,山砂の堆積が認められC,D, E グリッドとは異な



第10図 櫃Ⅲ-6-C調査グリッド実測図

った土層を示す。

表土から約1mを掘り下げ湧水のためそれ以下の調査は断念したが,その間に表土層を含め8枚の層序を得たが遺物を含む文化層は検出されなかった。以下断面図に従って列記する。第1層は表土層で暗褐色を呈する耕作土である。第2層は耕作床土にあたり灰褐色土層を呈する。第1層とともに粒状の細い耕作土壌である。第3層は褐色土混り灰色土層で褐色土は粒状に混入していて,上記2層が水田土壌であったことを示している。第4層はトレンチの北半部には認められない土層で第3層にみられた褐色土がさらに黒ずんだ暗褐色土混り灰色土で数cm~10cmの厚さを測る。第5層はこれまでの土層の土壌が粒状の細かい砂粒の少ないものであったものが,一度に粒状を大きくする土層であるが低湿地の土壌に山砂が混入したとみなされる黄褐色混りの灰褐色土である。第6層は褐色土混り暗灰色土で,第5層の灰色土が黒ずんだ以外は粒状粘性ともに同質である。第7層は堅果状に暗黒褐色粘質のブロックが混じる青灰色土層で水分を多量に含む。第8層は第7層に認められた堅果状のブロックが認められない青灰色土層である。第7層,8層の青灰色土は比較的粒状の細い砂質土である。

以上8層を数える堆積をみたが,第1層,第2層は旧耕作土,第3層,第4層は旧耕作土の床土。第5層,第6層は灰褐色土として同一系統であるし,第7層,第8層は青灰色土層の上下として一層に数えることができる。土層は第4層が南半にしか認められないことを除くと他はほぼ水平に重なった整層状況を示し水との深い関連が考えられる。

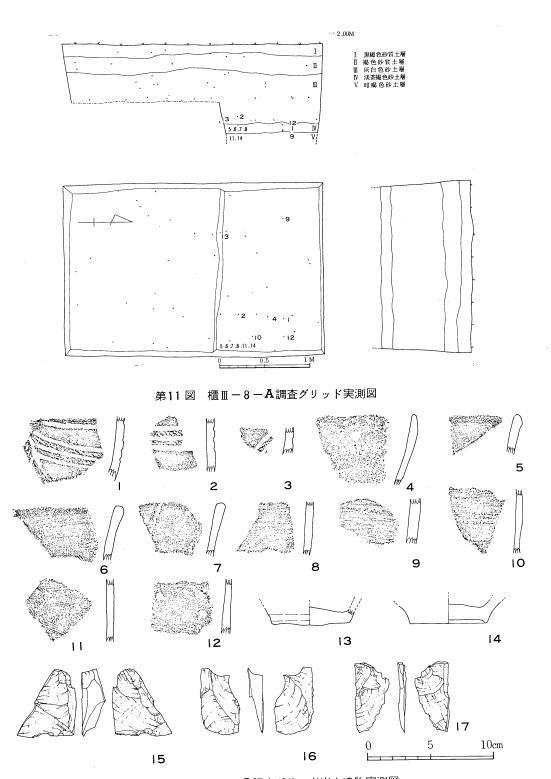
表土中にチャート片を4片検出したが、これ等は中近世の土器片とともに二次的移動によるもので、遺物包含層は発見されない。

(ホ) 櫃Ⅲ - 8 - A

III-8調査小区は大浦浜背後の低湿地のほぼ中央部に設定したもので, $A\sim H$ までの 8 調査グリッドを開いた。各グリッドの出土遺物は別記したとおりであるが,III-8-A, B,C,Eに於いては縄文後晩期の少量の土器片の出土をみた。

III-8-AはIII-8調査区の北端にあり舌状丘陵状尾根の先端裾部から約40m程離れている標高約 2.0mの現在畑地に使用されている低平地に定めた $2\times3m$ の調査グリッドである。層序は表土 第 1層から湧水のためそれ以下の調査を断念した第 5 層まで約 1.1mの間に 5 層を分つことができる。第 1 層は耕作土の上層で黒褐色砂質糖層であるが粒状は細かく有機質に富む。第 2 層は耕作上下層で褐色砂質土層でやや粒状が粗い。第 3 層は灰味白砂層で $50\sim60cm$ の厚さを測る。第 4 層は淡褐色砂層で砂粒は第 3 層よりもさらに大きく、この層から湧水が激しくなる。第 5 層は第 4 層とほぼ同質の砂粒からなる砂質土層であるが,色調が幾分紫味がかったような暗褐色に変化する。

遺物は第1層,第2層,第3層にチャート片,サヌカイト片,中近世土器片,須恵器片,



第12図 櫃Ⅲ-8-**A**調査グリッド出土遺物実測図

土師器片が出土したがいづれも二次的移動によるもので周辺の磨滅,風化が激しい。これに対し,第 3 層と第 4 層の境界から第 4 層にかけては磨消縄文と条痕文土器とサヌカイト 剝片の出土がみられ縄文時代後期の遺物包含層と考えられる。第 4 層は約10cm前後であるが第 3 層と第 5 層の境は不明瞭である。しかし,土壙,pit などの遺構や生活面と考えられる。堅くしまった面は認められず近くの遺構からこの第 3 層下面から第 4 層にかけて移動してきたものと考えられる。しかし第 4 層は縄文式土器の単一層で近くに縄文時代後期の遺構の所在が容易に予測され,注目に値する。

サヌカイト片、チャート片 第1層から第4層まですべてに渡って出土したが、第1層、第2層、第3層のものはいづれも二次的堆積によるもので、削片、破片が大半である。第4層出土のサヌカイト剝片は非常に大まかな剝離によるもので、使用痕の認められるものは認められないものの、縄文後期の土器片と伴出していることから、同時期の石器製作にかかる剝片であると云える。

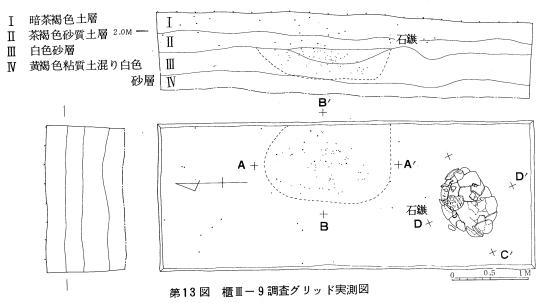
チャート片は5片出土したが,すべて第1層からの出土で二次的移動によるものである。 。縄文式土器片 第3層下層と第4層に集中的に出土した。湧水のためグリッドの40% だけしか掘り下げていないためその全体は把え得ないが,福田KIIとされる磨消縄文のある 土器片3片と同時期と考えられる巻貝による条痕のある土器片,無文土器片からなる縄 文時代後期の土器群の出土がサヌカイト剝片を伴って出土した。 1.2.3 は磨消縄文式土器 で,孤状の3本平行線の沈線によって画された部分にのみ縄文を残し,他は丁寧に磨かれ ている精製土器であり,土器内面も丁寧に磨かれている。

条痕文のある土器片は 6 ケ所に散乱して出土した。条痕のあり方は,平行に連続するものと,条痕が鋭角に斜交するものがあり,内面にも条痕を認めるものとへラ状工具によって磨かれているものがあるが,別個体のものが,同一個体の部分差であるのかは明らかでない。III-8-A-14,13 は条痕文ある土器の底部であると考えられる。13 は底部の中央部が,レンズ状に肥厚するもので底部に指頭圧痕を残す。胎土は多量の砂粒を含む。14 は内底部は同様に肥厚するものの底部は縁辺に 3 mm程の同縁を残し上げ底気味になっている。胎土は $1 \sim 3$ mm 大の砂粒を含むが,39程ではない。また,III-8-A 耕作土中に輸入青磁片,伏坏型の小形のシラク式土器片,土錐が中近世の土器の中に混って検出された。青磁片は体部から底部に移る部分であるが時期は不明である。

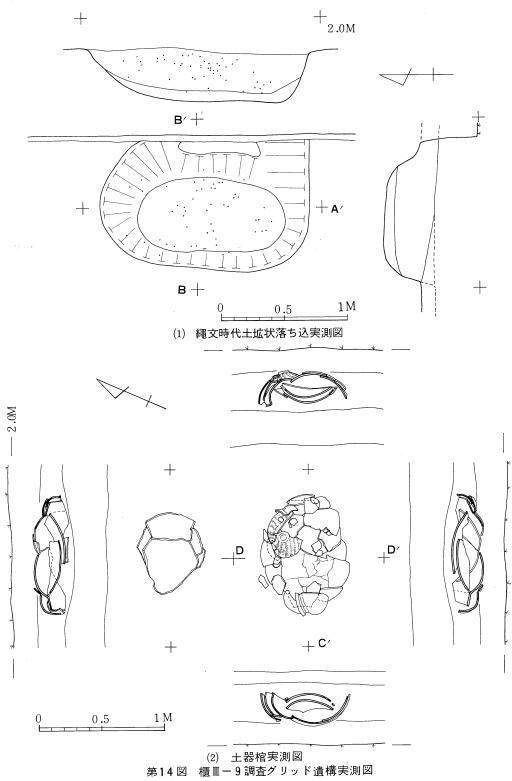
(\sim) III -9 - A

この調査グリッドは大浦浜調査区の北端にあたる。この調査区は大浦の中央部に西から東の方向へ突出した標高20m前後の小丘陵状尾根の先端裾部の緩傾斜地と大浦浜浜堤部の接する地点に定めたもので,浜堤背斜面と山裾の低地との中間点である。標高は約2.3 mで、かりもし「刈藻干」と通称される地域である。南北5.5 m、東西2 mの長方形トレン

チによる発掘区である。地形は北側が高く、南に緩く傾斜する。土層断面も地形とほぼ等 しく、北に高く南に低く緩く傾斜している。第1層は畑地の耕作土で約20~30㎝の厚さを 測る暗茶褐色土で砂がちであるが粒状は比較的細かい。第2層は耕作土にみられた有機質 の汚れが漸次少なくなる明るい茶褐色土で砂質土である。この第2層の上端をやや下ると ころからトレンチの東より中央部に縄文式土器を主体とする遺物群を伴なう土壙の落ち込 みがある。なお第1層と第2層との間には土層の相互浸透する漸移層を分つことも可能で ある。第3層は白色砂層であるが、第2層との間に多少の出入りがあり粒状は粗い。第4 層は第3層と同様に白色砂層であるが縦長に黄褐色の塊状の凝結土層が混入している。 遺物は第1層耕作土中には中近世の土器に混って磨消縄文や条痕文の認められる縄文式土 器が混入していた。またこの耕作土中からは手づくねの管状土錐も5個体出土したが時代 は新しいものと考えられる。第2層は耕作土の床土にあたるが、第1層と同様撹乱の事実 は否定できない。出土遺物は土師器片、サヌカイト片、チャート片と弥生中期後半頃に比 定される凸基式で肉厚が大である石鏃 1 点が検出された。また第 2 層には壷型土器 1 と甕 型十器2と鉢型土器2を組み合せた土器棺葬が認められ注目される。第3層,第4層中か らは遺物は全く出土しなかった。第3層は縄文式土器を伴なう土壙状落ち込みのある砂層 であるが、それ自体には遺物は検出されなかった。第4層は鉄分を多量に含む粘質土のブ ロウクが含まれる白砂層であるがやはり遺物は全く含まれていない。



土壙状落ち込みトレンチの東壁面外にさらに延長するものでその規模の全容は明らかでない。トレンチ中央部に第2層を切り込んだ状態で長さ165 cm,幅95cm,深さ45cmを測る楕円形に土壙状の落ち込みが検出され、これが東壁寄りにさらに深さを一段浅くした状態



で続く状態で検出された。遺物の出土はこの落ち込み上層の暗褐色土層とその底面の茶褐色のいづれにも認められるがその大半は表土層に続く暗 色土層から検出された。表土層とこの土壙状落ち込みとの埋土土質の相違はさほど顕著でないが,縄文式土器の分布は全体を通じてこの土層上層以外に認められないので縄文期の遺構とすることができる。なお壁面部分での落ち肩と底部との差が僅かに10cm前後を測るだけであるためさほど東壁外へ大きく延長するものではないと言える。

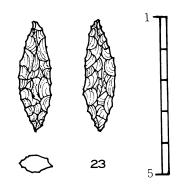
組み合せ土器棺 トレンチの南寄りの第2層中に顕著な掘り方は認められなかったが,第3層の白砂層を僅かに掘り凹めた状態で棺の底面を置いた土師器5個体によって組み立てられた土器棺が検出された。上部からの圧力によって天井部が下降していると思われる以外全く損傷のない原形で検出された。棺の主体は土師器大形壷を用いたもので,体胴部を大まかに割り取った土師片を4枚内面を上に向け,重ね合せて長さ65cm,幅50cm程の底面を形づくり,その上部に今度は体胴部から頭部にかけての四半球状の砕片を内面を内に向けて4枚相重ね合せながら長さ85cm,幅60cm程の卵型に覆い被せているものである。棺はさらに甕形土器2個体の肩部以下のやはり大形の砕片と鉢型土器2個体の四半砕された砕片を持って外護している。外護は全周の¾を巡っている。その序列を復原すると主体部分の脇腹部の隙間を叩目のある大形の鉢形土器で塞ぎ次いでさらにその外周を甕形土器片で外護する。主体部分の長軸の両端部は大型壷形土器の口縁部より成っているが,その部分は複合口縁の鉢形土器の四半形の破片で塞ぎ,さらに甕形土器の体底部の破片で外護している。

出土遺物

第1層,第2層の遺物は縄文式土器片,弥生式土器片,サヌカイト片,チャート片,歴 史時代の土器片がみられたが,耕作土中で撹乱が激しい。

縄文式土器は 7 片出土したがいづれも小片である。磨消縄文を施した口縁破片はその上端を内外両方向に肥厚するもので、口縁直下に深い沈線が施されている。福田 $\mathbf{K} \mathbf{I} \mathbf{I}$ と呼ば

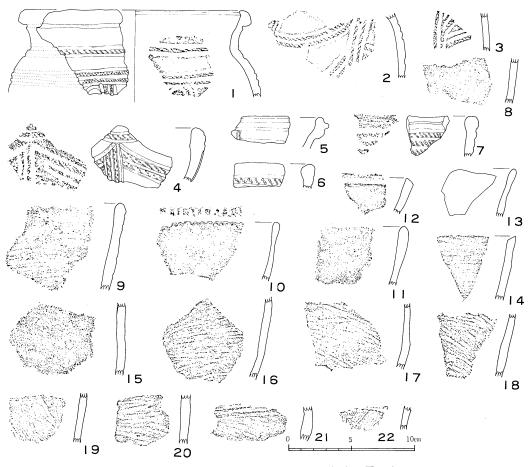
れる深鉢型土器に入るものである。また 2条の沈線間に縄文を残し他は磨消したものも認められるが,中津式としても良いが小片であるため不明である。 条痕文土器も 2 , 3 認められるが,いづれも赤褐を呈する器壁の外面にのみ貝殻条痕を施している。土師器片は平行の印目文を残す小片にすぎず,土器棺に使用されたものが 1 部移動したものと考えられる。サヌカイト片,チャート片は夫々数片が数えられるが,いづれも砕片であり,二次加工痕は認められない。



第15図 櫃Ⅲ-9 石鏃

石鏃は凸基無茎式に入るもので長さ $3.6\,cm$,幅 $1.1\,cm$,厚さ $0.5\,cm$ を測る大形品で,最大幅は中央部にあり基部は鋭く尖り尖基式のつくりである。なお,重量は $2\,g$ を測る。

土垃状の落ち込みの出土遺物 縄文式土器片とサヌカイト片が出土したが,縄文式土器は磨消縄文系と条痕文系と無文系に大別できる。磨消縄文系は3本の平行沈線の間に2条の縄文帯を残し,他は丁寧に磨り消した福田KII式と呼ばれるもので,口縁部で外反させ口縁端部を内外は張り出すものや,口縁端部が丸く肥厚して波状口縁になるもの,口縁



第16 図 櫃Ⅲ - 9 調査グリッド出土遺物実測図 - 1

端部が内面に肥厚するものの三種があるがいづれも鉢型土器と考えられる。条痕文系の土器片は最も多量に出土したが,内外両面とも貝殻条痕を施すものと外面にのみ条痕を施し,内面は磨いているものの 2 者に分けられる。条痕は斜め方向に施されたものが多く,方向は一定でなく斜交するものも認められる。内面の磨きはヘラ状工具によるものと考えられるものが多く一部には円礫によるものと考えられるものもある。無文系の土器片は 4 片あるがいづれも原形は不明である。口縁端部が斜下方に平坦に撫でられているものは福田 K

Ⅱに認められるもので内外面ともに磨かれている。口縁端部が鈍く尖がり気味なものは赤頸色に焼き上がっているが小鉢のような器形と思われる。器壁に僅かに指頭圧痕が認められる。口縁上縁に数cmおきにヘラ状工具により刻目があるものは胎土にも砂粒が多く器表の処置が全く認められない粗製土器で晩期に入るものと考えられる。

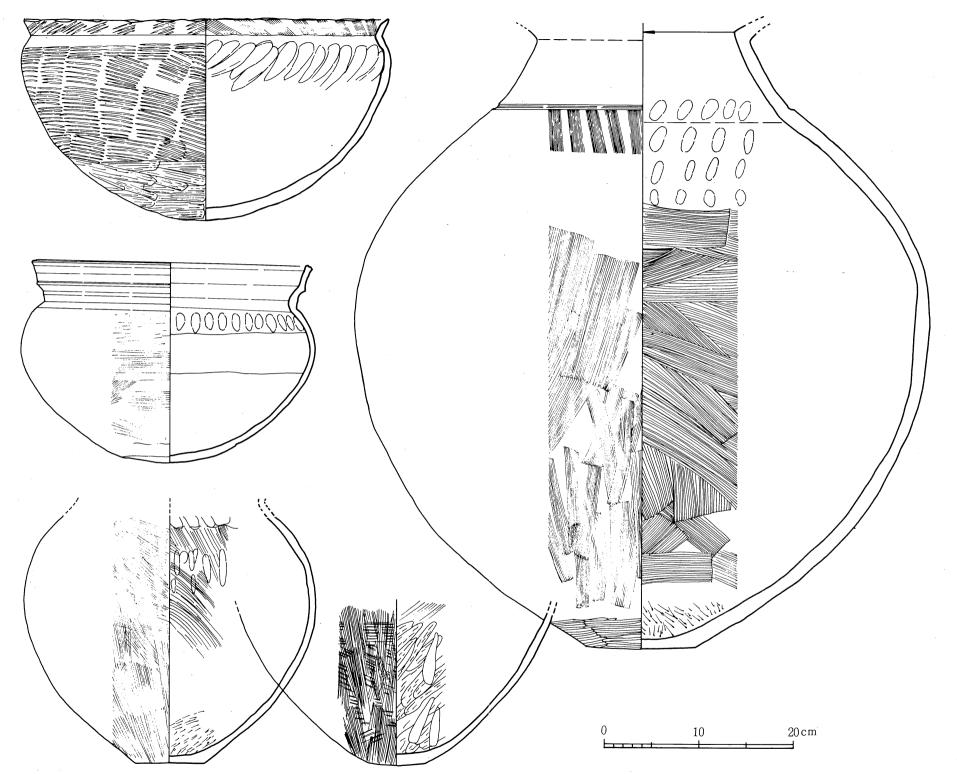
組み合せ土器棺の観察

・甕形土器 土器棺の外周を保護する状態に検出されたもので胴体部を残すものと胴部 下半のみを残すものの2個体である。

前者は現在高26cm, 胴部最大幅29cm, 底部径 7.5 cmを測るかなり胴の張った形態のもので,外面にはハケ目,胴体部上半はハケ目の上を撫で調整している。内面は底部から胴部下半にかけて縦方向の荒い箆削り,その他は左上りのハケ目が残っている。後者のものは,底部径 6 cmを測るもののその底部は平坦でなく丸味を持っているもので外面は左上りの叩目,中央部寄りに水平方向の叩目が,縦方向のハケ目の下に残る。内面は,やはり胴下半部までが斜方向の箆削りが認められる。いづれも胴部の丸く張っているもので古式土師器に入るものであろう。

・鉢形土器 鉢形土器は土器棺主体部の土師器の長軸両端部を伏せていたものと、土器棺主体の腹縁の空隙を伏せていたものの2個体あり、ほぼ復原し得た。

前者は口縁部がやや開いて、斜め上方に立ち上がる複合口縁式のもので、胴部の張りが強く丸味を持ち、胴部最大径は口縁部径とほぼ同径である。底部は丸味を持つもので、平底の痕跡を殆んど残さないものの径 7.5 cm程の底径を敢て測ることができる。口縁端部に浅い一条の沈線が残り、口縁内外面と体部上肩部分に横撫で調整が施されている。口縁立ち上がりの外面には凹線かとも思える凹地みが周囲を巡る。頸部は強くくびれ短いが、横撫でによると思える凹部が認められる。頸部には接合痕が残る。胴体部の内面は、胴下半が撫で整形、最大径を持つ中央部上半には横方向の箆削りが撫で整形の下に認められる。後者は叩目がある鉢形土器で、口縁径39cm前後、高さ20.5 cmを測る肩の張る半球形に近い



第17図 櫃Ⅲ−9調査グリッド出土遺物実測図−2

大形品である。口縁部は頸部からくびれて外上方向に強く傾いていて,その断面形は丸味のあるコ字形である。口縁内面は左上がりの箆磨きが施され,外面は右上がり叩目を残しているものの成形時の指頭によるおさえ圧痕が明瞭に残っているうえに,その端部は指頭圧痕を各所に残し,撫で等の調整は施されていない。胴体部外面は,左上がりの叩目が底部の箆削りの部分を除いて全面に亘っている。また,胴体部上端の頸部との接点には横撫で調整が叩目の上に施されている。胴体部内面は下部の箆削り痕をかすかに残す部分も一部あるが,全面丁寧に横撫でされている。底部には巻き上げ成形痕を明瞭に認められる。同例の遺物は,田井深山遺跡に鉢形土器,片口形土器が認められ,近幾の土器との関連が強いものとされている。

土器棺の年代は、壷形土器、甕形土器等の形態から玉泊6層、上東才ノ元ピット併行期 の古式土師の年代が得られる古墳時代初頭とすることができる。

6. 遺跡の範囲

。大浦浜遺跡 (1)

南北300 m,東西約50mの大浦浜浜堤部に立地する縄文時代から中世までの複合遺跡であるが,各々の分布は浜堤全域に亘るものではなくて,各時期ごとに偏在したような遺跡



第18 図 櫃石島第3調査区の遺跡の範囲

の変遷が考えられる。今回調査によって得られた所見や従前から知られている地点などからして、先述のようにいささかの偏りはあるもののやはり浜堤部全域を遺跡範囲としなければならない。約15,000 m² に亘る。

∘大浦A遺跡 (2)

櫃石中学校背後の東西になだらかな丘陵地形を示す稜線上平坦地に認められる旧石器包蔵地である。丘陵先端部に稠密な分布が確認された。遺跡の面積は約1,500㎡を測る。

·大浦B地区 (3)

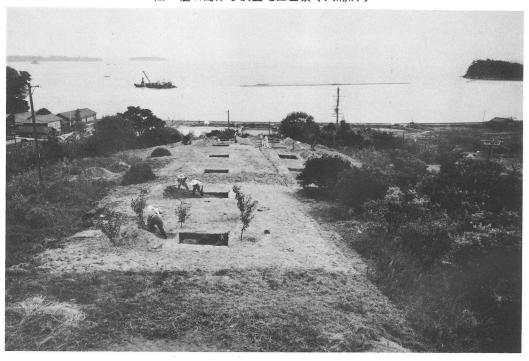
大浦浜から西岸櫃石海水浴場への峠にあたる尾根上に確認された旧石器包蔵地である。 尾根は平坦に耕やされているが東西約25m,南北約1,000mの範囲に遺跡の散布が認められる。

o その他 (4)

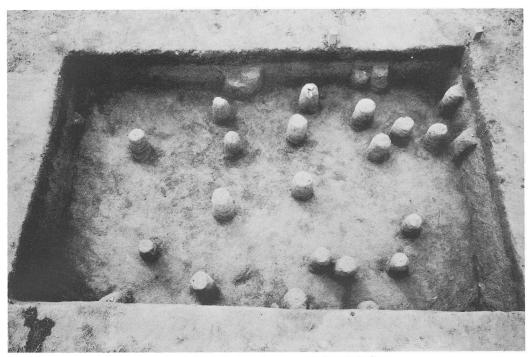
大浦浜浜堤背後の後背湿地は表土下30cm程に地下水面を持つ低湿地であるが、下層部分には縄文式土器の細片が認められ注意を引く。



(1) 櫃石島第3調査地区全景(大浦浜)



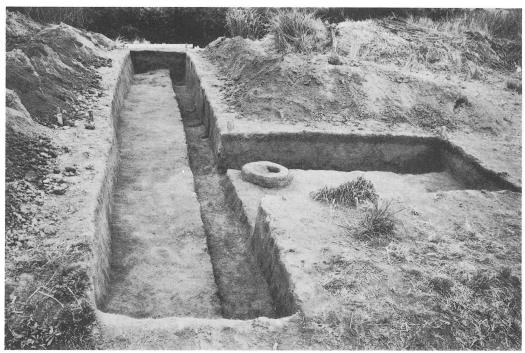
(2) 櫃Ⅲ-1調査区全景



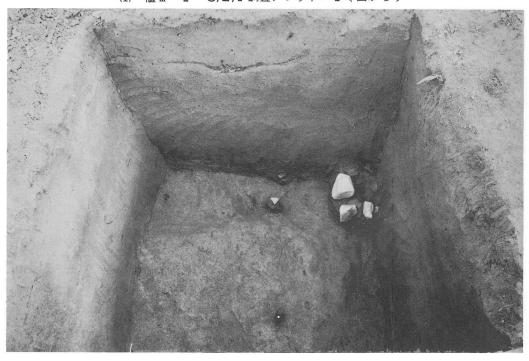
(1) 櫃Ⅲ-1-K調査グリッド(西から)



(2) 櫃Ⅲ-2-C,E,F調査グリッド-1 (西から)



(1) 櫃Ⅲ-2-C,E,F調査グリッド-2(西から)



(2) 櫃Ⅲ-5-B調査グリッド(西から)